ディストピアゲーに転生したら行政側だった件について

我等の優雅なりし様を見るや？

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ディストピアゲーに転生したら圧政する側だった主人公の話。

目次

第一話　二度目の人生はディストピアで　1
第二話　暴力系（致死）ヒロイン　12
第三話　（身内には）アマイモン　21
第四話　傷跡の対価　30
第五話　書を捨てよ、戦場へ出よう　39
第六話　天使×魔人　48
第七話　王国より栄光へと至らん　56
第八話　堕ちたる羽　64
【幕間】　不死鳥の朝　72
義体―死の巡礼
第九話　イレギュラー　77
第十話　化け物　85
第十一話　無垢の価値　94
第十二話　秘めたる毒は　100
第十三話　悪夢との再会　108
第十四話　死の巡礼、再び（前編）　116
第十五話　死の巡礼、再び（後編）　124
第十六話　銀色の姉妹　136
第十七話　『反抗声明』　144
第十八話　魔神の一手　154
神の宿る駅
第十九話　野生の摂理　165
第二十話　氷姫と魔人　172

第二十一話　抵抗者よ　178
【幕間？前編？】初陣。死都にて。　184

第一話　二度目の人生はディストピアで

サイバネティック技術によって強化された腕が、発砲の衝撃を押し殺し俺は短く息を吸う。

相手を殺さず無力化する為に調整された銃弾は、俺が先程までホログラムのスコープで覗いていた脚部に命中し、走っていた男を転倒させた。

「ぐあぁぁぁっ!!!」

廃墟に響き渡る苦悶の声を聞きながら、俺は沈黙を保ったまま崩れたビルの柱の影に身を隠し、手に握った黒く仄かな熱を帯びる銃が狙撃モードを解除し、駆動音と共に通常形態へと変化したのを確かめる。

左手に取り付けられた腕時計型のデバイスに目を走らせるが、まだ己の望んだ結果は其処には表示されていない。

己の手に全てを解決する手段が握られているというのに、其れが十全に振るえないというのは全くもってもどかしい気分だ。

「何処だ！何処に行きやがった、調整局！」

「ダメです！逃げましょう、柊原さん！」

「くそっ、足を撃たれた！」

黒い身体にフィットするスーツに、幾何学的な蛍光色のラインが走る旧世代式の密着型パワードスーツを纏う少女が転倒した男に駆け寄り、抱き起こす。クソ、旧世代式とは言え軍の支給品だ。また何処かのアホが目先の欲に駆られて横流ししたらしい。

全く、そいつは小金を貰って一時の得をしたかもしれんが、此方はそれで死の危険が倍増するんだ。公安の内偵局がしっかりと締め上げてくれると助かるんだが。

「聞け、いいか香織。調整局の屑共がご丁寧に銃弾の一発一発に探知用の小悪魔を仕込んでいる以上、どちらにせよ俺は遠くへは行けん。

お前は逃げろ。俺が此処で足止めをする。」
「そんな……！柊原さん、やめて下さい！私も残ります！」
「馬鹿野郎！もうすぐ新技術が実践段階に移る……お前も適合者に選ばれたんだろう？此処で死んで何になる！」

柊原と呼ばれた男の方は脚部のパワードスーツにめり込んだ緑色に淡く発光する弾丸を手に取り、そのまま握りつぶす。弾丸は小さな煙と共にひしゃげ、地面へとその無惨な亡骸を落下させた。
特徴的な青い髪をした少女が、その可愛らしい顔を焦燥に染めながら男の肩を揺さぶる。だが、男の決意は固い様だ。
しかし、新技術か。て事は丁度『原作』が始まる一年前？随分と長い時間がかかったものだ。
そんな事を考えながら俺が左腕を見ると、丁度俺が待ち望んでいた物が表示された。

朱羽亜門調整官
治安維持活動特別措置法第二条に基づき、非協力的な市民の完全排除を許可する
異能調整局統括ＡＩ【ＪＤＡＣＳ】

全く何が『許可する』だ。こっちがやりたくて堪らないとでも思っているのだろうか？いや、ＡＩにそんな事を考える機能はないか。
頭は愚痴を垂れ流すが、訓練で鍛え上げられた身体は流れる様に手にした近未来的な銃の引き金へと指を伸ばす。
先程、男の足の方を撃った銃はまだ少し熱を帯びており、柄にも無く銃も敵を撃ちたくて辛抱堪らんのだろうか、等と下らない事を考えてしまう。
横に広いトリガーに指を這わせ、センサーと無学な俺にはよく分からない諸々の機械が銃を握るのが果たして俺であるかどうかを認証しているのを銃が放つ僅かな振動で感じる。
数瞬の空白の時間が経ち、俺の脳内で俺にしか聞こえない機械的な

女性の声が響き渡る。
『ユーザー認証及び調整局統括ＡＩからの許諾を確認。全セーフティを解除します。』
さて、仕事の時間だ。
俺は遮蔽物から立ち上がり、脚部に取り付けられたブースターを起動する。
ブースターから青白い燐光を放ちながら、俺は音も無く飛翔し廃墟の一際高い瓦礫へと降り立った。
本当ならば此処から気持ち良く弾丸を二発お見舞いし、双方の息の根を止める所なのだがそうもいかない。
此処で彼女を取り逃せば俺の評価は落ちてしまうだろうが、此処で彼女を殺してしまえば俺の持つ『原作』の知識が通用しない可能性が高い。
それに、これまで俺はこのブラック企業……いや、ブラック国家で馬車馬の如く働いてきたんだ。それなりの実績も残しているし、この程度で首は飛ばないだろう。
課長からはどやされそうだが、もう慣れた。それよりもとっとと任務を終わらせて帰ろう。確か今日は甲金フーズの新作メニューのデータの配信日だった筈だ。
そんな事を考えつつ俺は下で未だに悠長に話を続けている人影へと銃口を向け、俺の顔を覆う黒いバイザーに搭載されたハイライトで相手を鮮烈な光で照らし出す。
『法務省異能調整局だ！異能濫用禁止法第一条、及び緊急事態宣言に基づく国民管理への抵抗の疑いで執行する。無駄な抵抗はよせ。』
バイザーに搭載されたボイスチェンジャーが俺の声を耳障りな合成音へと変換する。
銃口と共に目も眩む程の閃光を浴びせられた男は、手で顔を庇う様な仕草を見せながらも傍で己を抱き起こそうとしていた少女へと叫んだ。
「逃げろ！香織ぃ！」

そして叫びながら自身が握り込んでいた、硬化樹脂に包まれた何かを少女の手に握らせ、小さく頷く。
「これを持ってレジスタンスの基地に帰れ。リーダーによろしくな。」
少女は暫し迷った様な素振りを見せたが、それも一瞬。涙を拭いながら深々と男へと頭を下げ、此方を一瞬睨みつけた後に走り出す。
男は腰のポーチから何かを取り出し、自らの首へと押し当てた。
「調整局の狗が。此処は通さねぇよ。」
『違法な薬物も使用か。罪状が増えていくな。』
バイザーに表示される情報によれば、男がたった今空にした注射器に入っていたものは数年前に出回っていた、人工養殖されたフェニックスの涙。その粗悪品だ。
接種者に一時的に異常なまでの治癒効果を与えるが、効果が切れれば肉体が炎になって燃え尽きるという代物でそれを知らされずに投与した人間が突然燃え上がる事件が多発し、厳重に禁止された薬物。
それを使う事は即ち死を意味する事となる。
『死ぬ気か？あんな物のために？』
「あんな物ぉ？俺達にとっちゃあ希望の光そのものだ。それに死ぬのは俺だけじゃねぇよ……お前も此処で死ねぇッ！」

男の身を包むパワードスーツに走る光が輝きを増し、地面にひび割れを走らせながら跳躍した。
そして瞬きをする間もなく、奴は俺の目の前へと轟音と共に着地し俺へと凄まじい勢いで蹴りを放つ。
嘘だろ、こいつ身体能力向上系の異能保持者なのにパワードスーツまで着てんのかよ！
サイバネティック技術が施され、向上している筈の俺の動体視力を優に置き去りにし、男の脚はバイザーを貫きその奥にあった俺の顔面をぶち抜いた。

男の身を包むパワードスーツに走る光が輝きを増し、地面にひび割れを走らせながら跳躍した。

あっぶねぇ!!!俺は瞬時に姿勢を低くし、頭上の空気を凄まじい音と共に男の足が削り取るのを感じる。
俺の異能がなければ即死だった。いや、即死したけども。
俺はそのまま転がり、少しでも距離を取ろうと低い姿勢のまま後ろへと跳躍する。だが、目の前で蹴りを放ち終えた体勢のままだった筈の男の身体が一瞬で掻き消え、俺は凄まじい衝撃と鋭い痛みを背中に感じ、腹の中からこんにちはしてくる男の腕を見ながら息絶えた。

男の身を包むパワードスーツに走る光が輝きを増し、地面にひび割れを走らせながら跳躍した。
はーーー???なんだこのクソチート。主人公の親友の師匠ってこんな強かったんかい。
前回と同様に俺は身を屈めながら転がり、手にした銃を殺傷モードへと切り替え瞬時に後方へと放つ。
「ぐおッ⊠テメェ、予知系の異能持ちか!」
なーーんで話せるんですか???技術開発局のお墨付きの破砕弾だぞ?そのパワードスーツくらい貫通して余りある威力の筈なんだが。
咄嗟に振り向けば、痛々しい穴の空いたパワードスーツの下から覗く肌がまるで早回しの様に回復している男が、俺の顔面へと拳を叩き込もうとしている最中だった。

男の身を包むパワードスーツに走る光が輝きを増し、地面にひび割れを走らせながら跳躍した。
そーだった忘れてた!こいつ今自動回復状態じゃん。フェニックスの涙有能すぎないか?
対怪異用に調整された破砕弾でも死なないとかウッソだろお前ｗｗｗ
流石に急所に当てたら即死だろうが、そんな狙いをつけているような時間は間違いなく無い。絶対頭をぶち抜かれて終わりだ。
俺は初撃を避ける事に慣れ始めている自分にげんなりしつつ、身を屈めながら転がる。そして後方へと銃弾をばら撒きつつ、左手で思い

切り地面を殴りつけた。
「ぐおッ☒テメェ、予知系…って何しやがる！」
先程、下から此方まで男が跳躍してきた時の着地で此処の瓦礫は崩れかけだ。俺のサイバネティック技術で強化された腕なら、ヒビが入る前なら無理だがこの程度ならば粉砕できる。
空中なら避けられないし、相手の拳も蹴りも届かない。ハッハァ！
死に晒せェ！
そうして空中で身体を捻り、銃口を向けた先にあったのは男が頭上から蹴り出した、俺の顔面の3倍はある瓦礫の破片だった。

男の身を包むパワードスーツに走る光が輝きを増し、地面にひび割れを走らせながら跳躍した。
あー、そりゃそうか。俺の足元から広がったひびなんだから、俺が先に落ちるのは当たり前か。馬鹿じゃん俺。死ねよ。死んでたわ。
瞬時に身を屈め、転がりつつ後方へと破砕弾をばら撒く。そしてそのまま、今度は足に力を込め頭上へと跳躍した。
「ぐおッ☒テメェ、予知系……☒」
相手が言い終わる前に銃口を向ける。狙い澄ました一撃は男の脳天を寸分違わず撃ち抜いた。
おほ^～気持ちええ～！伊達に前世でＦＰＳやり込んでないんだよ。そんな俺の思考は頭から血を流し落ちながらも、男が蹴り出した瓦礫が頭部を粉砕する事で中断された。

男の身を包むパワードスーツに走る光が輝きを増し、地面にひび割れを走らせながら跳躍した。
え、フェニックスの涙って急所も治すんか☒マジで原作でこいつがどうやって死んだのか逆に聞きたいんだが。もしかして課長が直々に来て執行したのかな？
そんな危険な任務に俺を寄越すなよな……仕方ない。凄く嫌なんだが、奥の手を使わざるを得ないだろう。所詮俺は、全身を改造しているとは言え人間の範疇を出ない。相手は本物の化け物だ。

このままじゃ埒が明かない。始末をつけよう。
俺は瞬時に身を屈め、転がりつつ後方へと破砕弾をばら撒く。そして勢いよく跳躍した。
「ぐおッ☒テメェ、予知系……☒」
相手が言い終わる前に銃口を向ける。今度は破砕弾では無い。そんな物では一時的にとは言え不死鳥の力を手に入れているこいつを殺せないのは身をもって実証済みだ。
申し訳ないがかなり惨たらしい死に方をしてもらおう。
『レメゲドン、開帳。偽典・七十二柱の悪魔を開始。Ｎｏ．４３、サブナック。対象を執行します。』
放たれた銃弾は青ざめた燐光を放ちつつ、男の脚へと着弾した。
痛痒に顔を顰めつつも勝利を確信した笑みを浮かべる男。だが悪いな、俺の勝ちだ。
瓦礫の破片へと伸ばされた男の脚はぐちゃり、という不快な水音と共に瓦礫とぶつかり潰された。
「なっ……！」
驚愕に顔を歪める男を意にも介さず、その腐敗は更なる獲物を求めて這い上がる。男の身体に宿った不死鳥の因子が宿主を生かそうとするが、再生した端から崩れ落ち腐敗していく。
何処から来たのだろう。傷口から白い蛆が顔を覗かせ、重力に従い男と共に落下していく。
男が地面に到着する頃には、それが人間であったという証拠は何処にも残っておらず、腐敗臭を放つ腐肉と蛆の塊がそこにはあった。
その光景を俺は眺める事もせず、荒い息を吐きながら脚部に取り付けたブースターを起動し、近くの無事な足場へと移動する。
辿り着いたと同時に俺は地面へと倒れ込み、青ざめた顔で喉奥から迫り上げる血の塊を吐き出した。
俺の切り札である『コレ』は、血液を対価とするだけでなく俺の身体を内部から破壊する。
医療が高度に発達した社会であるにも関わらず、俺の身体をサイバネティック化のままにしているのはコレが原因でもある。全く、給料

が良くなかったらこんな仕事辞めている。
俺は正直原作なんてどうでも良い。レジスタンスもこの国も知ったことでは無い。
俺の目的はただ一つ。とっとと金を貯めて、何処か遠くの異界にでも高飛びするのだ。出来ればビーチがある異界が良い。そこで金を豪快に使いつつ、現地で彼女でも作って悠々自適に暮らすのだ。
月明かりが照らす中、俺は瓦礫にもたれ掛かりながら将来設計へと思いを馳せるのだった。

◆

異能。或いは奇跡、或いは魔法。
国によって呼び方は様々だが、この存在が世界に知れ渡った日から世界は変革を余儀なくされた。
混乱に次ぐ混乱に、いつの間にか作られたポータルを通り異界から侵攻してきた怪異達。世界が第三次世界大戦を選ぶ迄にはそう時間は掛からなかった。
日本はいち早く異能を発現させた人材を蒐集し、自衛隊を解散、国防軍へと名を変えた組織へと編入させた。
近代兵器はもはや異能の前では有効な手段とは言えず、日本を始めとする異能を初期から活用していた国家が戦争を優位に進め、開戦から僅か2年後にインドで開かれたデリー講和会議によって過去の国際体制は崩壊を迎えた。
アジアの多くは日本の保護国となり、多額の賠償金と環境資源の優先的採掘権を手に入れた日本は間違いなく第三次世界大戦の勝者の一人と言って問題ないほどの栄華を誇った。
だが、第三次世界大戦に伴う軍拡、そして内閣による独裁体制は戦後も続き、それに反対した一部の国防軍幹部、及び未登録の異能保持者による国内でのレジスタンス活動が活発化。
法務省は異能調整局を立ち上げ、異能を用いて国家へと叛逆する人間を厳しく取り締まり、ＡＩによる簡略化裁判により死刑となった人

物に対しては完全排除、つまりは法務省に所属する調整官による死刑執行が行われる事となった。
　日本国民の畏怖と国家の暴力装置としての威信を背負う法務省異能調整局は、東京のかつて某巨大国が外交館を置いていた地に黒くそびえるビルを拠点とし、日本のみならず、日本の勢力圏にある各国で活動を行なっていた。
　そのビルの一室。『異能調整局第一課・課長室』のプレートがかけられた部屋の中で少女の怒鳴り声が炸裂した。
「はぁ?! 取り逃がしたぁ?! 国家指定文化財を盗んだ犯人の一人をぉ?!」

　業火の如き色合いのツインテールを靡かせ、その色合いに負けず劣らずに顔を怒りに染めた少女は立ち上がりながらバンバンと机を叩き、目の前の男を怒鳴りつける。
　一見、中学生の様に見えるこの少女は正しく法務省異能調整局の武闘派である第一課の課長であり、日本で5本の指に入る異能保持者である。
　彼女に怒鳴りつけられれば大抵の人間は恐怖を隠さないが、彼女の怒りの対象となっている男は無表情を崩す様子は無かった。
　中肉中背、黒髪に黒い目のその男は無表情のまま、静かに頭を下げながら、手にしたアタッシュケースを開きその中で冷凍保存されている朱色の液体を取り出した。
「如何様な処分でもお受けします。ですが、その前に此方を。執行したレジスタンスの男の一人が所持していたフェニックスの涙のアンプルです。
　技術開発局の見立てでは人体の急所を破壊して尚回復する、これまで市場に出回った事のないタイプであるそうで。」
　それを受け、少女の顔は形容し難い表情に歪む。
　そう、これなのだ。本来ならば犯人の一人を取り逃がした時点で相当の罰則は免れない。だが、この男が齎した『コレ』はそれを相殺し

てお釣りが来るものだ。
　これ一つで日本の医療業界がどれ程の進歩を遂げることか。下手に罰してしまえば、この変革した日本でも有数の権力を持つ日本武装医師会からの圧力は免れまい。
　少女は溜息を吐きながら、課長室に備え付けられた豪奢な椅子へともたれかかる。
「それで？何を企んでる訳？」
「何を、とは？」
　はて、と首を傾げる男に、少女は噛み付く様な目線を向ける。
「我が法務省異能調整局第一課が誇るエース様が犯人を取り逃がす？笑えない冗談ね。
　貴方が負傷したのはレメゲドンの使用による副作用のみ。それ以外は傷一つ負う事なく、軍用パワードスーツを装着した身体強化系異能保持者。もっと言うならば急所を破壊されても死なない相手を単独で執行した。
　で、そんな貴方が少女一人を取り逃がす。一体何を企んでいるの？」
　男は無表情のまま頭を下げ、静かに言い放つ。
「この国の将来と安寧を。」
　もう一度大きな溜息を吐き、少女は言う。
「……良いでしょう。退室を許可します。次は無いと思いなさい。いいわね？」
「寛大な処置に感謝致します。では。」

　課長室のドアが閉まる音を背に、少女は自らのデバイスから一人の職員の情報ファイルを表示する。
「朱羽亜門調整官……ね。本当に無能力者？技術開発部門の誤診じゃ無いのかしら……って、これも何度目かな……」
　朱羽亜門調整官。法務省異能調整局唯一の無能力者にして、最大の切り札。
　反動が大きく、一度使用すれば同じ戦闘では二度と使用できない神

学部門が開発した産廃、『レメゲドン』の唯一の実戦使用者であり、過去の戦闘の影響で全身の６５％をサイバネティック化している。
多くの過酷なミッションを成功させる。最早捨て駒として用意されたような戦場でも生還し、危険度の高い対象を多く執行。行動から分析される忠誠値はＡ＋。正に化け物の様な経歴だ。

「執行の様子を記録した動画、何回見ても未来が見えてるとしか思えないわよね……驚異的なセンス、って事かしら。」

パワードスーツを纏った男が跳躍し、スローモーションカメラですら捉えきれなかった初見殺しの蹴りを恰も知っていたかの様に回避。
瞬時に転がり、背後へと回り込んだ対象へと正確に銃撃。その後、空中に跳躍した後の執行……通常の炸裂弾を使用しなかったのは、急所に当てても意味が無いとの直感なのだろう。
自分でもかなり手こずるであろう相手を数瞬で執行。本当に規格外の男だ。
「私はこの異能調整局最強の異能保持者、なんて呼ばれてるけど、あいつに勝てる気なんてしないわね……全く、何考えてるのやら。」
無表情に、冷酷に。何処までも国家に忠実な法務省異能調整局が誇るエージェント。そんな男に対し、呆れ――それと彼女は認めないだろうが、一抹の恐怖――を抱きつつ、彼女は今回の報告書をどう書いたものかと頭を悩ませるのだった。

◆

「法務省異能調整局……！朱羽、亜門……。絶対に許さない。師匠の仇は――私が必ず取るわ。」
そして少女は、復讐の炎を瞳の奥で燃え上がらせる。その炎が己の身を焼き尽くすのが先か。それとも彼女が敬愛した師匠の仇を焼き尽くすのが先か。それは誰にもわからない。今は、まだ。

第二話　暴力系（致死）ヒロイン

『Ｆａｌｌｅｎ　Ｇｏｄ』は所謂ディストピアを題材にしたゲームだ。
近未来の日本。最先端の技術と異能や怪異、魔術などが入り混じるゲームでジャンルは――百合ゲーだ。
登場人物は全員美少女で、男キャラも居るには居るがストーリーには余り関わってこない。
で、このゲームは俺の前世、つまるところ２１世紀でかなり有名なゲームだった。
あんまりこう言うゲームには手を出さない俺がついついプレイしてみるほどにはマーケティングにも力を入れられてたし、ゲームの内容も中々に面白かった。
このゲームの主人公は近未来の日本を強権的に支配し、ディストピア化させている『裏の政府』にレジスタンスとして立ち向かう少女。
かつてはこのディストピアと化した日本で暮らす普通の高校生だったが、研究者であった父の謎の失踪について調べていくうちに政府機関に目をつけられ――
みたいな内容だ。
ゲームシステムもしっかりしているし、何より敵味方で入り乱れる一体イラストに幾ら掛けたのか不安になるレベルの美少女の立ち絵達。
オタク界隈は熱狂の渦に叩き込まれ、二次創作サイトのランキングはこのゲームの二次創作に埋め尽くされる事となった。
ゲームの内容も結構マイルドで、多少のお色気要素は有ったがディストピアを題材にしたゲームにしては珍しくゴア描写も少なく、全年齢対象だった。
多分それもこのゲームが人気を博した要因の一つなんだろう。バッドエンドとか言う訳でもなく、最後は主人公達が『裏の政府』を支配していた怪異を破壊して日本は自由を取り戻す！
という希望に満ち溢れた物だった。
こんな訳で、俺は『Ｆａｌｌｅｎ　Ｇｏｄ』の世界に転生したと知っ

たときにはそれなりにワクワクした物だった。
これでも前世は一端のオタクだったのだ。異能やら怪異、魔術なんて物が現実にある世界に来たのならば心に潜む中学2年生がハッスルしてしまうのも道理と言えよう。
だが。そんな淡い、言ってみれば楽観的すぎる希望は今世での両親が存在しない事によって消え去った。
両親が存在しない。なら何処から生まれたんだという話なのだが、俺は泡立つ試験管の中の薬剤から誕生した。
所謂クローンという訳だ。前世の世界では人間のクローンは禁止されていたが、此方の世界では人倫などとっくの昔に消え去っている。
国防軍にて最前線で戦う為のクローン。一山幾らの兵士達。特に優れたところもなく、かと言って劣る所もない何処に売り出しても恥ずかしくない兵士として俺は誕生した訳だ。
俺はどこかでこの世界を舐めていたのだと思う。
俺がクローンとして誕生した時点で俺の肉体は既に成熟していた。生まれたての俺と、俺と同じ顔をした兄弟達は最低限の訓練を受け、国防軍の憲兵として配属された。
レジスタンス達のテロの鎮圧、そして群衆に紛れての国家に叛逆的とされる人間の監視。拷問。洗脳。
それはゲームでは描写されなかったこの国の真の闇。
そして、俺が己の能力に気づいたのもこの頃だった。『死を起点とするタイムリープ』。所謂死に戻りとされる物。
定期的に行われていた異能調査にも引っ掛からず、実戦で初めて気づいた事からこの能力はこの世界での『異能』では無いらしい。
数度目のレジスタンスによるテロの鎮圧の際、俺はこの世界での一度目の死を迎えたのだ。
「何やぁ、クローンかいな。国防軍も堕ちたもんやねぇ」
そんなはんなりとした言葉と共に俺の首は着物を着た妙齢の女性

が手を軽く振る事で発生した風の刃によって簡単に吹っ飛んだ。
そう、俺はこの人をゲームで知っていた。原作で主人公の頼れる姉御ポジに居たキャラ、中禅寺丹羽。
最強議論では常に話題に登るキャラ。レジスタンス勢力の幹部の一人。
結論から言ってしまえば、俺はその戦場で他の兄弟達を差し置いて唯一生き残った。まぁ、あまり会話も無かったしそんなにショックでは無かったが。
数分の戦闘。しかし、俺にとってみれば恐らく体感にはなるが数ヶ月に及んだその戦闘は俺の両脚、左腕の喪失という尊い犠牲の下に終結し、中禅寺丹波は撤退した。
というか、見逃された。クローン一人にそんな構っては居られないという至極当然の理由のもとに彼女は撤退し、俺は気が狂いそうな死を積み上げる巡礼から帰って来れたという訳だ。
で、まぁ当然の如く俺はかなり注目された。身体の部位を失ったとは言え、大量生産のクローンの中で一人が生き残りあまつさえレジスタンスの異能保持者、更には幹部相手に数分間戦い抜いたのだ。
他のクローンにそんなポテンシャルは無く、気が遠くなるほどの検査と色々とここでは書けないような実験の後、あっけなく突然変異の様な物だろうと片付けられた。
更なる研究、つまりはバラして俺を複製できるか確かめてしまおうという国防軍と日本武装医師会の決定に待ったを掛けたのが法務省だった。
対異能保持者に発足された法務省異能調整局は人手不足であり、複製できるかも分からない様な実験で使い潰すよりも対異能保持者の鉄砲玉として俺を雇用しようという訳だ。
あれよあれよと言う間に俺は新しい身分を与えられ、六桁の番号だった名前は『朱羽亜門』という名前へと変えられた。そこから俺のこれまで以上にブラックなお仕事は幕を上げたのだった。
そんな昔の事を思い出しながら法務省のリノリウム張りの床を歩

いていると、俺の背後から話しかけてくる者がいた。
「朱羽亜門調整官！」
俺が足を止め、くるりと振り返れば其処には調整局の制服をかっちりと着こなした如何にも『私は真面目です！』と全身で語っている様な少女が立っていた。
「貴方にはこの国家を安寧に保つ調整官としての自覚は無いのですか！おめおめと犯人の一人を取り逃がしたと聞きましたよ！」
「……あぁ、その件でしたら不問との寛大な処置を課長が下してくれましたよ。ご安心を、氷峰裁歌調整官。」
日本人にあるまじきその銀髪に天井の明かりを反射させ、顔には糾弾の意思が宿る彼女の名は氷峰裁歌。
原作において主人公のライバルとして最終的には友好を深める事となる少女。原作の主要キャラの一人だ。俺としては原作に首を突っ込むつもりもそんな願望も持っていないので、余り彼女と仲良くする気は無いのだが、ある時から無性に彼女の方から突っかかってくる様になったのだ。実を言うと少し、いやかなり迷惑しているのである。
「そう言う事を言っているのでは……！」
「おや、課長の沙汰にご不満が？宜しければ課長にお伝えしておきますよ？」
あー、ダメダメ！この国では上の言うことに逆らうなど有ってはならないのだよ！俺の上司が良いと言ったのならヨシ！完全な免罪符を手に入れている俺に敵うと思ったのが間違いだったな。
それにしても此処の法務省の面子に限らず、原作キャラ達の髪の色は本当に喧嘩を売っていると思う。此処は日本だぞ？地毛でそれおかしいだろ。
だが誰も気にしない所を見るに、この世界ではこれが普通なんだろう。色素とかどうなってんだ。原色の髪とか目痛くなるわ。
「違っ、そんなつもりじゃ……と言うか先ほどから何処を見ているのですか！」
おっと、つい見すぎていた様だ。いかんいかん。セクハラと思われ

る。此処まで積み上げてきたエリート街道をこんなアホらしい事で潰すわけにはいかない。
俺は肩をすくめ、何でもないように答える。
「いえ、何も。それで話は終わりですか？氷峰調整官。」
「……貴方に模擬戦を申し込みにきました。」
はーーーー！（クソデカ溜息）またこれだよ。俺が彼女を避けている原因の一つとして、顔を合わせる度に模擬戦という名の私闘を申し込んでくるのだ。
しかもこの女、名家に生まれ幼い頃からエリート街道まっしぐらである故に武術の手解きも無論最高のものを受けている。今のところ俺の全敗であり、何度も勝てないと言っているのにもかかわらず戦いを挑んでくるあたり、本当に俺の事が嫌いなのか人を殴らなければ生きていけないかのどちらかだろう。俺としては前者を強く主張する。
「氷峰調整官……私では貴女の相手にはなりませんよ。私はまだ貴女から一本も取った事がないと言うのに、どうしてこう何度も模擬戦を私に申し込まれるのですか？」
「ッ…！いい加減にして下さい！私が気づいていないとでも☒そんな簡単なことも分からない様な箱入り娘だと言いたいのですか☒」
そう、で断るとこんな風にキレ始めるのだ。本当に困った物である。パワハラで訴えようかな……揉み消されますかそうですか。
「今回の映像記録も見ました！あんな風に動ける様な貴方が！任務において無敗の貴方が！私如きとの模擬戦で負けるわけがないでしょう！
本気を出すに値しないと☒真面目にやる様な気も起きないと☒」
そりゃそうである。言わばあれはトライアルアンドエラーの繰り返しの末に生まれた、絶対に勝てる既定路線をなぞっているに過ぎない。俺という存在にのみ許されたズル。
模擬戦で死ぬ様な目に遭わない以上、戦闘において独学のみの俺が彼女に勝てる筈がないのだ。
「貴女が私を殺す気が無いからですよ、氷峰調整官。では私はこれで……」

深々と頭を下げ、彼女へと背中を見せる。甲金フーズの新作メニューの配信が始まる時間だ。自室に設置してある食用３Ｄプリンターにはそこそこ金を掛けている。
三ツ星シェフの考案したメニューに想いを馳せつつ、歩み出そうとした俺の背筋を寒気と慣れた『いつもの感覚』が這いずり回る。
おいおい、嘘だろ？此処でやるつもり――――――
「なら、ならやってやりますよ。貴方を殺す気でッ！」
俺の腸を極寒の杭が掻き混ぜる感触と、背中に走る激痛が俺の意識を刈り取った。

「なら、ならやってやりますよ。貴方を殺す気でッ！」
瞬時に俺は横へと己の身を投げ出し、視界の端でリノリウム張りの床に突き立てられた氷の槍が霜を降らせるのを捉える。
正気かこの女⊠調整局の廊下でやるかよ普通！頭おかしくなったのか？俺の周りに人が居たら……？いや、待てよ。妙だな。廊下に人影の一つも見当たらない。
正真正銘この頭のおかしい女と二人きりだ。
氷峰裁歌。法務省異能調整局第一課所属の調整官であり、氷結系最強の異能保持者。
つけられた渾名は『氷結地獄』。
「……正気ですか？」
「既に局長から許可を取っています。調整局内に異能保持者が侵入した時の避難訓練との名目でこの場を整えて頂きました。」
俺は今手ぶら。相手は異能保持者。あの金髪合法ロリ、俺を本格的に殺す気なのか？いや死なないが。
そんな思考も氷の上を滑る様に近づき、俺の顎へと掌底を放ってきた彼女によって中断された。余りの速さにその彼女の美しい銀髪が残像へと溶ける。揺れる視界に、込み上げる吐き気。脳を揺らされたらしい。
そして首に突き立てられた極寒の一撃が俺の最期の記憶となった。

「なら、ならやってやりますよ。貴方を殺す気でッ！」
瞬時に俺は横へと転がり、余裕を持って着地する。流石に二度目は慣れる。伊達に死に慣れちゃ居ないのだ。
ゆっくりと立ち上がり、目の前の女を見据える。
「……正気ですか？」
「ほら……前動作の無い状態からの異能行使にすら余裕で対応するその異常なまでのセンス。確かに殺す気でなければ――――相手にすらしてもらえない様ですね！」
足の下に展開した氷の上を滑る様に移動してくる彼女の、俺の顎に目掛けて放たれようとする掌を腕が伸び切る前に抑える。来る前に知っていればこんなもんだ。
そしてそのまま体勢を崩した彼女の脚を払い、なるべく手加減した手刀を首筋へと叩き込んだ。
男女平等チョップ！否、平等では無い。どう考えてもこの女の方が強い上に金を持っている。俺は首筋を手加減したとはいえ、サイバネティック技術で強化された手刀で打たれ、意識を朦朧とさせている彼女を背中に背負い医務室を目指す事にした。ここで放置したら寝込みを襲われそうだ。全く、原作キャラに絡まれると碌な目に遭わないのだ。メニューの配信に間に合わない事を悟った俺は溜息を吐きながら、氷が溶けかけている廊下を歩き始めたのだった。

◆

朱羽亜門。世界でも有数の異能保持者が集まる法務省異能調整局において、異能保持者最強を決めるのならば一課の課長が挙げられるだろう。
だが、純粋な最強を選ぶのならば皆異口同音に彼の名を挙げる。
無能力者でありながら、異能保持者を圧倒するその戦闘センスと致命的な副作用すら厭わない兵器の使用、持って生まれた肉体に固執しない余りにも割り切った肉体のサイバネティック化。
其れ等諸々を受け彼は法務省内で――――否、この名は既に国外にす

ら広まっている。
無能力者でありながら任務において無敗を誇る、忠実なる国家の僕。
人呼んで曰く――――『無能無敗』。その名は畏怖と共に語られている。

医務室で目覚めた氷峰裁歌は、その微睡んだ目でベッドに腰掛ける細い背中を見やる。
嗚呼……〝また〟負けた。今度は完膚なきまでに、完全に。
裁歌は日本が先の大戦で勝利する一因を作った異能保持者を多く輩出した名家、氷峰の一人娘である。
幼い頃より鍛え上げられたその技術と、天から与えられた強大無比な異能。彼女は調整局に入局するまで己が最強と信じて疑わなかった。
その驕りは課長の行使する異能を目の当たりにする事によってへし折られたが、それでも己がＮｏ．２であると思い続けていた。
そんな時に耳にしたのが『無敗のクローン』の噂だった。
曰く、無能力者、しかもクローンでありながらレジスタンスの幹部を数分間押し留め、あまつさえ撤退させたのだとか。
最初は戦場にありがちな荒唐無稽な噂の類だと気にも留めなかった。
だが、その噂は日に日に声を大にして語られる様になる。彼女もその存在を認めざるを得なかったが、只の偶然だろうと決めつけた。
二度目の彼女の驕りを打ち砕いたのはそのクローンの戦闘ログだった。
『勝てない』。恰も来る攻撃を既に知っているかの様に避け、いなし、己の身を傷つける事を厭わぬ攻撃によって一撃で仕留める。
そのセンスも、国への忠誠も勝てないと彼女の心が思ってしまった。
それから目を背けるかの様に、彼女はそのクローンへと模擬戦を挑んだ。

結果は彼女の勝ちだった。だが、誰がどう見てもそのクローンが本気を出していないことは明らかだった。既に幾つかの実績を積み上げていたそのクローンの戦闘ログを知る者は、思わず彼女への憐れみに目を背けるほどだった。

相手にすらされていない。あのセンスは見る影もなく、まるで素人の様に倒され其れを悔しがりもせず参った、と言うのである。

本気を出すに値しない。それは戦闘に身を置く者への最大の侮辱であり、彼女にとってそれは正面から打ち破られるよりも悔しく、怒りを感じる行為だった。

その後も何度も模擬戦を挑むも結果は同じ。相手に本気を出させられなかった以上、彼女の負けの様なものである。己の武術、己の身だけでは本気を出させる事すら出来ない。業を煮やした彼女は、ついに局長への直談判へと至った。

幼い少女の容貌でありながら、その垂れ流す雰囲気は正に政界の怪物と呼ばれるに相応しい、まるで虎口に手を入れたかの様な空気を彼女に感じさせた。

思いの外、局長は軽々と異能を用いた模擬戦の許可を出した。だが、今にして思えばあれは彼女への警告だったのだろう。

『これに懲りればあの男にこれ以上手を出すな。君が死ぬ事になる。』

正にその通りだった。氷結系最強とすら言われる己の異能の発動を完全に見切り、摩擦を極限まで減らす事によって繰り出される超高速移動すらも知っていたかの様に見切られ、いとも容易く無力化された。あの手刀にあとほんの少し力が篭っていれば彼女は死んでいた。正に文句のつけようが無い敗北。だが、彼女はどこか清々しかった。

(異能を使ってやっと本気の一部……嗚呼、本当に勝てないんだな……でも、しっかりと負けられてよかった。)

敗北すら許されなかったこれまで。だが、今回しっかりと己を敗北へと叩き込んだ彼によって、己の気持ちに踏ん切りがついた。

もっと強くならねば。このクローン――――否、朱羽亜門の立つ頂に少しでも近づける様に。

(嗚呼、でも……いつか、勝ちたいなぁ……)

第三話　（身内には）アマイモン

異能調整局のビルの上層階には高位の職員専用の居室が存在している。

大抵の職員は自分の家を持っているが、俺の場合はクローンであるが故に家もなく、はんなり姉御によって一族郎党（クローンの兄弟達をそう呼ぶならば）皆殺しの憂き目に遭っているので主に此処で生活している。

しかし、一介のクローン兵士が法務省の高位スタッフとは出世したもんだ。そんな事を考えながら、部屋の壁に備え付けられた機械に青色のカードをスキャンさせる。

西暦２？？？？？年の住宅にはキッチンが存在しない。置いてあるのは電子レンジの親戚みたいなこの機械だけだ。『甲金フーズ監修！ハンバーグデータセット』とファンシーなフォントで印字されたカードのパンチ穴が既にこのカードをこれ以上使えない事を訴えていた。結構高かったのだが、消費する時は一瞬だ。名残惜しい様な気分でそれをゴミ箱に放っていると、部屋に響く電子音が『調理』が終了した事を知らせた。

食用３Ｄプリンターによって作成されたハンバーグを口に運ぶ。前世ならばファミレス等で良く食べていたハンバーグだが、今の日本では目も眩む様な高級食だ。尤も大戦に貢献した企業や家系の上層部はもっと美味い物を食っているのだろうが。

そんな事を考えながら、雑にナイフで取り分けたハンバーグをソースと共に口に運ぶ。部屋の窓から眼下に広がる『理想郷』は赫赫たる夕日に照らされ、狂気の様な美しさを演出していた。

無数に乱立するビル。天を舞う国民監視ドローン達。ホログラムで虚空に投影される聞こえの良い政府のプロパガンダと、レジスタンスに対抗する為に未成年へ国防軍への入隊を促す広告達。

クローンなんて物が有るのだから、もういい加減に国民徴兵を止めたらどうなのだろうか。そこら辺は色んな利権が絡み合って複雑なのだろう。

何となくテレビをつけてみれば、此方でもにこやかなレポーターが我が国の偉大さを褒め称える事に表情筋を総動員していた。
『――ンドの占領統治政策も順調であり、現地の3等国民達は日本政府への謝意を示す集会を自発的に行うことで世界へと我が国との友好をアピールしています！』
「は、それは何よりだ。」
よく言ったもんだ。現地の住民による抵抗運動は『謝意を示す集会』か。恐らくその集会に参加した奴等はこの世界には既に居ないだろう。
この国はいつだって命の単価が安い人間を欲している。それは俺も例外では無いが、少なくともタダでは無い事が救いか。食べ終えた食器を分解用ダストシュートへと放り込み、部屋に備え付けられた椅子にもたれ掛かる。
全く、この国はディストピアだ。平等を謳う広大な家畜小屋。プロパガンダと利権を牛耳る企業の広告が天を舞い、路地裏では社会から溢れた人間が怪しげな薬やらを売り捌く。
異能を得ようとも、異界の存在を認識しようとも、人の本質は変わらない。
俺らしく無いセンチメンタルな気分に浸っていると、左腕に嵌めたデバイスに通信が入る。なんだ、人が頭の良さそうなモノローグを気持ちよく垂れ流してるところに水を差す不届き者は。勧誘とかだったら怒鳴りつけてやろうかな？
「やーあ、亜門調整官。元気にしているかな？」
「は、お陰様で。局長、何か御用命でしょうか？」
あっぶねぇ！化けもん怒鳴りつけるところだった！通信画面に映し出されたのはどう見ても小学生低学年程の体格をした少女。
美しい金髪を彼女のサイズに合わせて仕立てられたスーツの上に垂らしているその様は、一見すれば背伸びしたがっている可愛らしい幼女にも見えなくは無いのだが、その目を見ればその存在がそんなものでは無いのが分かるだろう。そのワインレッドの目は只管に誰かを貶め、それを見て高笑いをすることしか考えていない人格破綻者の

目であり、正しく『悪』その物の様な目であった。
「いや、君の右手の面倒でも見てやろうと思ってね。君に残された数少ない生身の部分だ。メンテナンスは欠かせないだろう？」
「そのご提案は非常に嬉しいのですが、生憎と用事がありまして……」
こんな腹黒合法ロリに付き合わされてたまるか。暫く俺は出動の予定は無いし、それに今日は銀行に預けた金を確かめてニヨニヨするという崇高な使命に費やすと決めているのだ。
ああ、通帳の０の数が俺の高飛び後の安寧さを示している……！
だが、そんな俺の堅実な人生設計を嘲笑うかの様に少女は愉快げな表情で告げる。
「じゃあこう言おうか。『局長命令だ、亜門調整官。』今すぐに局長室に来たまえ。」
……。
こんの腹黒合法ロリがァァァァ!!!俺が上司に逆らえない事を良い事にニヤニヤしやがって…！
だがまぁ、一応この少女……いや、本当は少女なんて年齢なのでは無いので此処は本名である『天威喪音（アマイモネ）』と呼ぶ事にしようか。
彼女、つまり天威局長は俺の上司である以上に恩人でも有る。彼女は無自覚ではあるだろうが俺の高飛び計画においての最大の障害を消してくれたのである。
クローン兵士。正式名称『乙式量産型兵士』。その体内には魔術的、科学的なロックが多数設けられており、決して反抗などが出来ない様になっている。
もしもその状態で俺が高飛びなんぞしてしまえば、その行動の意思を見せた時点で俺はそれこそハンバーグの様に肉の塊となって死を迎える。
いや、俺の能力上死なないがどちらにせよ俺の高飛び計画においての最大の障害である事は間違いない。
だが、その障害は俺の身柄が国防軍から法務省へと移行する際に解消された。
これまで対異能戦の最前線で戦ってきた国防軍は法務省異能調整

局が気に入らず、異能調整局は商売仇になりかねない国防軍を警戒している。
つまりは仲が悪いわけだ。
その中で国防軍によるロックやらをガッチガチに固められた俺という存在をそのまま雇うわけには行かないという事。獅子身中の虫になりかねないからね。
で、そのロックを解除される代わりに俺は彼女の沙汰により直属の上司である第一課課長に『名』で縛られる事となった。
異能調整局最強の武闘派、赫羽焔課長。赤いツインテールの彼女の異能はズバリ、『フェニックス』。
原作において中ボスの役目を担っていた彼女は鉄すら一瞬で蒸発させる程の炎と、脅威的な再生能力を持つ作中でも5本の指に入る強さを持つキャラであり、『Ｆａｌｌｅｎ　Ｇｏｄ』をプレイしたプレイヤーからは「ツンデレフェニックス」の名で親しまれていた。
なんと敵キャラでありながら攻略が可能なキャラであり、ストーリー終盤にとある事情によって異能を失い、調整局から追われる身となってからは主人公に対して渾身のツンとデレを披露してくれる、前世でも中々に人気の高いキャラだった。
そして話を戻すが、俺は彼女によって名で縛られている。俺が六桁の番号の代わりに与えられたのは『朱羽亜門』という名。
天威局長によれば、この『朱羽』という名字にフェニックスの意味を込める事で俺の魂自体が課長の異能に縛られる事で、課長の命令に対しては絶対遵守となる、らしい。
此処ら辺はよく分からなかった。そんなに前世でも細かく設定資料とか読み込んだ訳じゃないから仕方がない。
で！此処で一番大切な事は俺に設けられた縛りは、ストーリー終盤において課長の異能消失と共に消え去るという事だ。
勿論、課長の異能が消えた時点で俺の縛りが解ける事は周知だろうが、何らかの手段が講じられる前に俺はこの世界からはおさらばという訳だ。
如何に覇権国家日本といえど、その勢力が外宇宙にまで及んでいる

わけではない。後は溜め込んだ金を使って悠々自適なバカンスという事だ。見よ、この完璧な人生設計。
だが、そんな事を考えていると少しぼーっとして居たらしい。局長から催促の声が飛んでくる。
「返事が聞こえないぞー？亜門ちょ、う、せ、い、か、ん♪」
「はっ！」
「よろしいよろしい。君は他のクローンと違って話しがいがあるね。待ってるよ。」
通信を切った俺は溜息を一つ吐き、自分の部屋を後にするのだった。

◆

「おやおや、随分とまた酷使したもんだねぇ。前回刻んだシジル（刻印）がもう薄れてるじゃないか。」
ツツ、と俺の背筋を撫でる指の感触に俺は思わず声をあげそうになる。が、そんな事をしてしまえばどう考えてもこの金髪腹黒合法ロリの思う壺なので、歯を噛み締めて我慢する。
そうそう、説明をし忘れて居た。現在、俺を半裸に剥いて背伸びをしながら俺の腕やら背中を弄くり回している、一見すれば可愛らしい幼女は原作でも超重要人物である。
それが何かって？そう、『ラスボス』なのだ。
『ＦａｌｌｅｎＧｏｄ』において、日本という国を背後から牛耳り主人公達と最後に対面する事となる全ての黒幕。それこそが、この幼女『天威喪音』なのだ。
いや、先程から幼女幼女とまるで俺が犯罪者の様に連呼しているが、実のところ彼女は人間ではない。
魔神である。
人類が異能を認識した直後、或いは直前。世界各地に『ポータル』と呼ばれるこの世界ではない異界に繋がるゲートが自然発生した。
大抵のポータルは何のことはない、無害な物だったが、それは裏を

返せば一部のポータルは危険だったということだ。
【怪異】
　ポータルから現れた人類、というよりは生命体に対して敵対的な生物の総称であり、その大半は多かれ少なかれ超常的な力を持っている。
　そして彼女はその怪異の中でも極上の部類に入り、破壊衝動を理性で捩じ伏せている存在、即ちそれが『魔神』なのだ。
　作中でその存在は限られた数しか登場して居ないが、その特徴として異能ともまるで違う力である『魔術』を行使すると言うことだ。
　分野によって得手不得手はあるものの、魔神の行使する魔術はどれも世界の法則を乱しかねない物ばかり。
　それは彼女も例外ではない。
「こらこら、こんな魅力的なレディと二人きりなのに気をそぞろにするんじゃ無いよ。この時間を楽しみ給え。」
「は、申し訳ございません。」
　いっっっった！こ、コイツ爪で掘りやがった！俺の四肢で唯一無事な右手にはサイバネティクス化が施されて居ない。
　故に、彼女の魔術による補強をシジルと呼ばれる刻印を刻み込む事で行っているのだが、爪でやる必要は無いだろ。
　クローン標準搭載の死亡済み表情筋のおかげで顔はピクリともしないが、心の中ではジタバタとのたうち回っている。とっととこんなやつ主人公に撃破されろ。
　あと何がレディだ。ツルッ！ペタッ！ツルッ！の動く平野が何を言ってるのか私には理解に苦しむね。
「今なんか凄く失礼なこと考えなかったかい、君？」
「とんでもございません。私の様な一介の職員にこの様な補助を頂けるなど……感謝の極み」
　とんでもあるわ。サラッと思考を読まないでほしい。……読めてないよね？
　急に不安になってきたが、思考が読まれているとするならばとっくの昔に死に戻っている筈なので、その可能性はないのだろう。

いや、それにしても確かに不思議だ。それなりに実績をあげているとはいえ、俺はあくまで一省庁の中の上級スタッフでしかない。
彼女もカモフラージュとして異能調整局の局長なんてやっているが、実態としてはこの国のトップだ。こんな所でクローンの右腕弄って何が楽しいんだか。まぁ、助かってはいるんだが。
「ん、こんなもんだろう。あまり無茶をしない様に。」
「ありがとうございました。ですがこの国の安寧の為、無茶をせざるを得ない立場でして。」
「ンンンッ！そ、そうか。それもそうだな。帰ってよし！」
……なんでこの幼女頬染めてんの？こっわ。まぁいいや。銀行口座を眺めながらニヨニヨする作業に戻るとしよう。
俺は一礼してから、遅れてしまった本日の予定を取り戻すべく自室へと急ぐのだった。

◆

『Ｆａｌｌｅｎ　Ｇｏｄ』
即ち、堕ちた神。其れ等は総じて魔神と呼ばれる。
彼女がこの世界に降り立ち、一国の裏に根を張ったのはただの気まぐれにすぎない。悠久に近い己の生涯のほんの少しの暇つぶしとして世界でも滅ぼしてやろうかと思っただけだ。
弱者が貧弱な能力を振り翳し、争う彼等が大戦と呼ぶ物にほんの少し介入してやるだけでその国は勝利した。
ああ、本当につまらない。超常の可能性なぞ見飽きた。命と共に燃え盛る炎も、時すら凍てつかせる氷も、不死を断つ風刃も全て、全て既知のものだ。
そろそろ直接滅ぼしてやろうか等と考えていた頃であった。彼女がほんの少し開発を手伝ってやったクローン兵士が、この世界で『強者』と呼ばれる者を撤退させたと聞いたのは。
最初はありえないと断じた。そのクローンの開発をほんの少しとはいえ手伝ったのだ。そのスペックは全て熟知している。だが、だ

が。その戦闘ログを見た時。
彼女がこの世界に来てから――――否、彼女が世界の外にいた時から蝕んでいた退屈が少し、ほんの少し彼女を蝕むのを止めたのだ。
彼女にとって既知であり、ありえないと断じたものがあり得ている。
着物を着た女が繰り出す風の刃、吹き飛ばす瓦礫の雨。その全てをそのクローンは避け続ける。右足が、左腕が断たれようとも全身で跳躍し、手にした支給品の何の変哲もないナイフを振りかざす。
幾千幾万の絶死を超え、左足を断たれたクローン――――否、『彼』の振るったナイフは、確かにその女の着物を貫き、その左腕へと突き立った。
この時の彼女の歓喜は想像を絶するものだった。無いと断じた事が有ったのだ。既知が未知となる久しい感覚。そして、なによりも彼女を激らせたのは彼の瞳だった。
死を無限回に煮詰めたような深く深く澱んだ瞳。だが、その目には確かに先へと進まんとする確固たる光が宿っていたのだ。
それからは早かった。国防軍に圧力をかけ、手慰みに作っていた組織、つまりは法務省異能調整局へと引き抜いた。
万が一にも逃げられない様に彼女の『娘』の名で縛る事も考えた。だけど、まだ足りない。どれだけこの手で掴もうとも、彼はするりと抜けて何処かへと行ってしまいそうに感じる。
そう、言ってみれば死に近いのだ。魔神にすら一度しか訪れない死の香りを彼は濃密に纏っていた。だから、だからだからだから。

自分の名前でも縛る事にした。

さぁ、讃えるが良い。我が尊名を。私は強欲の権化、大罪の名を冠する者。
地獄の侯爵と弱者が呼ぶ者であり、不和を司る者。
天威喪音など偽りの名前。我が名はアマイモン。四方の王たる一

角であり、地を司る者。
ああ、こう名乗った方が良いだろう。愛おしい、私の退屈を晴らした彼に。そしてともすれば、私のこの悠久に終止符を打つやも知れぬ存在に名付けた名を。
即ち――――――『アモン』。

そう、絶対に絶対に。私の手から逃す事など考えられぬ、私の、愛しい愛しい『可能性』。
だから、先程彼が『この国の安寧の為、無茶をせざるを得ない』だなど言った時には堪らなかった。
彼はこの国が私そのものだと知ったらどうするのだろう？　その忠誠を向けている先が実は私だと気づいたのならば。その死の香りの満ちた目で跪き、私へと首を垂れるのだろうか。
そして私がこの国を破壊したら。その無表情を激情に染めて私を殺しにくるだろうか。私の永遠に、逃れ得ぬピリオドを打ってくれるだろうか。
不死性を誇る私をその異常なまでのセンスと試行錯誤の上に打ち破り、この胸にナイフを突き立ててくれるだろうか。
ああ、それを考えると昂って堪らない――――――！
その幼き瞳を隠しきれぬ欲情に染めたその少女は、その豪奢な部屋で一人恍惚に満ちた顔でほくそ笑むのだった。

第四話　傷跡の対価

『国民協力度を測定中……５０アンダー。拘束対象です。速やかに非殺傷手段で無力化してください。』

俺の脳内で響き渡る中性的な声が目の前で尻餅をつく男への判決を告げる。

結果は有罪、一生の勤労刑って所だな。

「止めろ！止めてくれ！そう、金が無かったんだ！お、俺は悪くねぇ！俺は悪くねぇぇぇぇ!!」

寂れた倉庫の地面に無様に尻餅をついた男の無精髭だらけの顔は焦燥に満ちている。これから何が起きるのかをよく理解できているようだ。

ならもう少し頭を働かせるべきだったな。ろくにコネも持っちゃいない木端役人がレジスタンスに武器なんて横流ししたらどうなるのか。

まぁ、気持ちは分からなくもない。辛かったんだよな。毎日毎日同じような備品の点検ばかり。

ちょっとした小遣い稼ぎのつもりだったんだろう。いい加減「国民用健康維持食品・タイプＣ」以外の物でも食ってみたかったんだろう。

俺が構える銃口が少し降りたのを見た男の顔が闇の中に一分の光を見たような、希望に満ちた表情へと塗り替わる。

俺が見逃しでもすると思ったのだろうか？こいつ、やっぱり馬鹿なんだろう。俺のスーツの胸元に縫い付けられた『Ｍ・Ｏ・Ｊ』の金系が目に入らないらしい。

『Ｍｉｎｉｓｔｒｙ　ｏｆ　Ｊｕｓｔｉｃｅ』

この国の正義の代弁者は、国という『正義』が定めた道を外れた者を許しはしない。そして俺は俺のエリート街道の上の障害物を許しはしない。

俺は下げた銃口をそのまま男の足に照準を合わせ、発砲した。

倉庫に反響する男の悲鳴と銃声。撃ち込んだ銃弾はそのまま足の神経を蝕み、適切な処置が施されなければ奴を一生松葉杖生活にさせ

るだろう。
え？非殺傷じゃ無いのかって？
この国での非殺傷は『命までは奪わない』の事なんだよなぁ……。
俺が左腕の端末を操作し、護送用のドローンを呼び寄せていると地面に蹲る男が苦痛に喘ぎながら何かを呟いていることに気づいた。
「俺は……金を、金がぁぁぁ……要る、要るんだ……もう嫌だ…一生、一生こんな生活は嫌だ……」
痛みに震える男の手が奴が着ていた薄汚れたコートのポケットに入れられ、薄ピンク色のガラス瓶を取り出す。
……なんか見覚えあるな。なんだっけアレ？えっと……思い出せないな。多分前世で見た事があるはずなんだが……
そんな事を考えながら男の腕へと発砲する。筋金入りの馬鹿だな、こいつ。目の前であからさまに『今からドーピングして強くなりますよ』って物をそのまま飲ませるわけ無いだろ。
「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!!」
右腕を撃ち抜かれ、弾が当たった部分が徐々に黒ずんでいくのを絶望的な表情で見つめる男。
手にしたガラス瓶は地面に落下し、その中身を床に飛び散らせた。結局何だったんだか分からずじまいだ。後で床に染みた液をサンプルとして解析してもらおうか。
再び左腕の端末の操作に戻った俺だったが、突然その背中をどろりとした『いつもの感覚』が襲う。
「俺はぁ……こんな所で終わっていい人間じゃあねぇぇぇ!!!」
振り向けば芋虫のようにのたうち、限界まで舌を伸ばした醜悪極まる形相をした男が地面に染み込む液体を舐め回す。その様は地獄で渇きに苦しむ餓鬼の有り様であり、必然的に『醜悪』以外の言葉が似合うはずもなかった。
うっわ！きっしょ！3秒ルールは液体には適用外だろ……。これから自分を襲うであろう事から逃避するかのように、俺の頭は呑気な思考を垂れ流す。
男のもはや動くはずのない脚が蠢く。身体が電流が走ったように

のたうち、口から泡を吹き出す。
コートははまるで背中の内側から何かが抜け出そうとしているかのように膨らみ、やがては弾ける。肉ののたうつ音と骨が軋む音共に伸ばされた四肢は灰色の体毛に覆われており、その筋肉の躍動に合わせてまるで稲穂の様に揺れ続ける。腕に撃ち込まれた弾は筋肉の膨張に合わせ排出され、その傷はビデオの早回しの如く塞がった。
身体に服の残骸を引っ掛け、ゆらりと立ち上がる男の顔に既に過去の名残は無い。鼻は前に突き出し、口内の歯は明らかに食事を咀嚼する以外の目的を求め牙へと変貌する。
その口からは粘ついた涎が垂れ、目からは理性の色が消えていた。

……ふむ。此処で現実逃避がてら、何故俺が此処にいるのかを説明しておこう。
まずこの男、国民ＩＤ：Ｂ３８７２８ＣＵ７２、本名吉中哲寺の職業は国防軍の下請け業者だ。国防軍が既に使わなくなった旧式の兵器や防具を、日本の占領下の国の親日政権へと運搬する仕事を担っていた。
そのまま仕事を進めていれば老後には３等国民から２等国民になっていたのだろうが、奴はそこまで待てなかった。
目先の金銭に目が眩み、旧式のパワードスーツやら兵器やらをレジスタンスへと横流ししていたというわけだ。
既に国内では型落ちとは言え、国際的に見れば最先端の数歩先を行っている。それをレジスタンスが運用し、日本の円滑な統治に支障をきたすなど以ての外だ。
もっと言えば、俺を前回の任務でボコボコにしたフィジカル馬鹿が着用していた物もこの男が横流していたらしい。
で、普通ならばこの案件は公安が担当する。だが、この男が異能保持者であった事がそれに待ったをかけた。
異能名【月下狼】。月の出ている夜に狼の特性のうち一つをその身に宿すという、言ってしまえば雑魚異能だ。だが、異能は異能。法務省異能調整局の管轄下だ。

丁度暇だった俺は、楽して心証を良くできる機会と見て立候補したのだが……道理で天威局長が意味深な目をしていたわけだ。
あの金髪腹黒合法ロリ、この事を知ってやがったな？
遅まきながら思い出したあのピンク色の液体の正体。アレは原作でプレイヤー、つまりは主人公が使う『ＭＰ回復アイテム』だ。確か天使の雫？とか言ったかな。
原作ではポンポン使われていた物だが、あれは異能を用いることで消費するゲージを回復させる物。言ってしまえば異能のキャパシティに対するドーピングだ。
主人公達は特殊な体質である故に、それをジュース感覚でゴクゴク飲んでいたのだろうが、一般人にとっては劇薬だ。
故に今、目の前で獣臭い息を振りまいているあの男は自らの異能が暴走し、月下で無い状態で全身を狼のものへと変貌させている。
だが、それが何だというのだろうか。俺も死に戻りというズルがあるとは言え、体感で言って仕舞えばかなり長い時間戦闘に身を置いているのだ。
前世が平和なる日本のオタクだったからと言って、そろそろ死に戻りに頼らない戦いも出来るはずだ。俺は左腕の端末が開いていたホログラムを閉じ、首をコキリと鳴らしながら目の前の人狼に対し挑戦的に指を動かす。
さぁ、来いよ化け物。人間サマが退治してやる。そんな風にニヒルにカッコつけていた俺の顔面は、狼の天へと届けとばかりに響き渡る咆哮に引き攣ることとなる。
狼の剛腕に吹き飛ばされた倉庫の棚が俺の腹部に激突し、腸をかき混ぜられる感覚と共に俺の意識は暗転した。

さぁ、来いよ化け物。人間サマが退治してやる。そんな風にニヒルにカッコつけていた俺の顔面は、狼の天へと届けとばかりに響き渡る咆哮に引き攣ることとなる。
はい、無理でした。野生の獣に人間が勝てるわけ無いんだよなぁ……。俺は勢いをつけて前転し、頭上を轟音と共に通り過ぎる風圧を

背中で感じる事となる。
低い体勢をそのままに、俺は床に手を付きながら回転と共に相手の足元へと転がり込む。そして回転の勢いと共に繰り出された蹴りは見事に空振り、背後から振り下ろされる爪の一撃が俺の脳漿をぶち撒けたのだった。

さぁ、来いよ化け物。人間サマが退治してやる。そんな風にニヒルにカッコつけていた俺の顔面は、狼の天へと届けとばかりに響き渡る咆哮に引き攣ることとなる。
まぁそりゃそうか。動体視力も獣のソレに強化されているならば、蹴りを避けながら瞬時に背後に周る事も可能というわけだ。
作戦変更！俺はサイバネティクス化された脚で勢いよく跳躍し、次いで俺の真下を通過して壁へと突き立てられた鉄の棚の上へと着地した。
そのまま軽やかな音共に鉄製の棚の上を駆け抜ける。それと同時に四肢を地面へと着けた人狼が咆哮と共に此方へと突貫を開始した。
そう、それで良い。俺はそのまま勢いを殺さずに相手へと接近する。鼻をツンと刺す獣臭さに頭がクラクラするが、それを意思の力で捩じ伏せる。
人狼の後ろ足が撓み、そして矢の如く空中を直進して此方を喰らわんと迫り来る。剛速。野性そのもの。だが、人は常に野性を攻略する事で進化し続けてきた。
俺は此方へと迫り来る一条の矢と化した人狼の頭へと片手を添え、そのまま後方へといなす。
そしてそのまま宙を舞い、俺と人狼の位置は完全に入れ替わった。着地と同時に振り向き、手にした銃を構える。相手はその全身から繰り出した運動エネルギーを未だに消費し尽くしてはいない。
つまりは、未だに空中という事だ。俺のサイバネティック技術で強化された動体視力が、針に糸を通すかのような正確さで相手を捉える。
『対象の分類を再識別。矯正対象市民から非協力的市民への移行を確

認。殲滅対象です。一部機能のロックを解除します』
カチャリ、と変形した手元の銃へと破砕弾が装填される。そして素早く引かれた引き金に導かれた弾頭は爆発的な化学エネルギーに後押しされ、此方へと振り向かんとする人狼の頭蓋骨を削り取ったのだった。

◆

「あれ、中禅寺さん。その左腕の傷どうしたんですか？」
東京のとある地点に位置するポータル。その情報は秘匿され続け、ポータル自体にも無数のセキュリティが施されている。
これを正面から破る事ができるのはそれこそ、そのセキュリティを構築した『魔神』と同じ存在くらいのものだろう。
そしてそのポータルの奥。異界にしては小規模な数十ｋｍ四方の空間に、一つの街が建築されていた。
此処こそが今や世界にその名を轟かせ全ての富が集まる独裁国家、日本に対するレジスタンス組織の中枢、『マヨヒガ』だった。
そしてそのマヨヒガの中心。幹部達が住まう邸宅の中でも一際目立つ和風建築の中で寛ぐ少女が、不思議そうに緑の髪を綺麗に結い上げた妙齢の女性へと問いかけた。
薄手の浴衣の左肩から覗く古傷。それは白磁のような肌にこびりついた汚れのようであったが、その不完全さが逆に彼女の美しさを引き立てていた。
問われた女性は懐かしそうにその傷を撫で、何かを思い出すように笑う。
「あら、見えてはりました？」
それを問うた少女は、今更ながら不躾な事を聞いたと思ったのだろう。その端正な顔を申し訳なさに染め、謝ろうとするのを女性が手で制す。
「ええのええの。それに見られたところで往生するもんやあらへんから。」

手を上品にパタパタとふり、はんなりとした雰囲気を纏う女性――――即ちレジスタンスの幹部、中禅寺丹羽はもう片方の手で目の前の少女の頭をゆっくりと撫でる。
少女の顔がふにゃりとだらし無く歪むが、直ぐに元の調子を取り戻す。
「その、すごく失礼なんですけど……なんで治さないんですか？医療室にあるメディカルポッドで数分で治る怪我、ですよね？」
そう言いながら浴衣の襟から僅かにはみ出た傷を目で追う少女。
彼女も戦場に身を置く人間として、その傷が何らかの短い刃物で付けられた傷という事をその独特の形状から推察した。
だが、それはとてつも無い事である。
中禅寺丹羽。彼女は不死すらをも断つとされる無数の風刃を操るレジスタンスの中でも有数の異能保持者。その彼女が、異能では無く物理的な刃物で傷つけられるまで接近されたという事のあり得なさ、そしてそれが示唆する強大な敵の存在を少女は感じ取っていた。
「そやねぇ……此れがうちにとっての戒め、やからかなぁ……。
なぁ、うちもこのレジスタンスで幹部なんて言われて持て囃されとるけどな？この傷、誰がつけたと思う？」
はて、と少女は考え込む。目の前の女性に対抗できる戦力。憎っくき法務省異能調整局の武闘派たる第一課を率いる、【狂乱の不死鳥】。或いは国防軍の中でも剣豪として名高い【猪狩り】か、それとも大戦の英雄【人喰い鮫】か。もしくは日本武装医師会の【傀儡奏者】？でも、頭の中で挙げられる戦力達はどれもこのような傷を付けるような相手では無い。
いや、待て。法務省異能調整局にもう一人いた。余りにも異質すぎて意図的に除外していたが、奴が居た。無数の同胞達を『執行』してきた、この国の走狗。即ち【無能無敗】、朱羽亜門。
だが、奴の扱う武器は銃器が主流だと聞く。ならば奴も違うのか。むむむと考え込んだ少女の顔を愉快そうに眺めていた中禅寺は笑いながら切り出した。
「【無能無敗】っておるやろ？アイツ。そう、香織ちゃんが思ってる奴

でおうとるで。アイツがクローンなのはまぁ、知れとる話やけどな？うちのこの傷は【無能無敗】が初めて戦場に出てきたときにつけられた傷や。」
【無能無敗】。奴の悍ましく、無数に積み上げられた戦績の一つ。それが目の前にいる女性を撤退させた事だという事は少女も知っていた。
だが、撤退させただけでは無く傷をつけた？それも、初めての戦場で？
「あの頃はうちもちょっと調子に乗っとってなぁ。幹部最強！なんて持て囃されて舞いあがっとったんや。
そんで、ちょっと国防軍にちょっかい掛けに行こうと思うて行ってみたら、まぁクローンしかおらんくてなぁ。えらくがっかりしとったんやけど、そのクローンの中におったんよ。【無能無敗】が。」
彼女の語るところによれば、まだ当時一山幾らのクローンだった【無能無敗】は彼女の放つ全ての風刃を、周りの同機種のクローンがバタバタと倒れる中まるで未来が見えている様に避け続けたのだという。
未来予知の能力かと思い、決して避けられない角度で風刃の檻を作ってもみたが腕を、脚とそのナイフを握る腕だけを残しながら、それ以外は全て些事とばかりにいとも容易く犠牲にして彼女の元へと少しずつ、だが確かに迫ってきたそうだ。
「あの黒髪黒目のクローンの顔でな？痛みもあるやろうに躊躇せずにこっちに少しずつ迫ってくる様がまるで死神みたいでなぁ。それでその目がもう濁っとるんよ。
正直言って、あれが一番人生で怖い瞬間やったわ。」
そして目と鼻の先にまで迫り、彼女の首へとナイフを突き立てようとした【無能無敗】の残された左脚を辛うじて切断し、その狙いがズレた事でなんとか事なきを得たのだところころと笑う中禅寺を少女は引き攣った顔で眺めていた。
「あの時はもう怖くてなぁ？【無能無敗】が立てへんようなって地面にぶっ倒れた瞬間逃げたんよ。たかがクローンに自分が傷つけられたのが信じられんくてなぁ……」

そしてかつての己の慢心を戒める為にこの傷を残しているのだと語る中禅寺の目に、少女は何処か薄寒い物を覚えたのだった。

◆

「ふふふ……ちょっと怖がらせてもうたかな？」

少女がそそくさと帰った後、一人縁側に腰掛ける中禅寺。

先程語った内容に嘘は無い。この傷を残したのは戒めの為でもある。だが、それだけではなかった。

「あの目ぇ、怖い以上に……ほんまに綺麗やったわぁ……」

何処までも深く、幽く続く闇の中。死を塗りたくった様な濁りを放つその目の中に、確かに宿る生への祈り、渇望、そして希望。

クローンと己。量産型と唯一無二。その壁は、最も容易く撃ち破られた。あの後、かのクローンが無能力者との判定が出たと政府内の内通者から齎された知らせに彼女は歓喜した。

あのセンス、あの無慈悲さ、死の中に誰よりも深く潜りながらも、何処までも生を追い求めるその矛盾。

その全てが彼女にとって美しく映った。

「あんさんの傷、両脚と左腕の傷はまだ疼いたりするんやろか？その度にうちを思い出しとったりするんかなぁ？」

ふふふ、と妖艶な笑みが屋敷を満たす。あんなにも昏く、美しい物を手に入れたいと思うのは女の性か、それとも破綻した欲望か。

彼女は自らの左肩をそっと撫で、その傷が続く左腕を浴衣越しになぞる。

「いつかこの国をうちらが元に戻したら……あんさんの首に鎖かけて、この屋敷に飼ったるからなぁ……乙女の柔肌に刻んだ傷、キチンと責任を取ってもらわんとねぇ♪」

その形の良い唇をつらり、と舌が撫でる様は獲物を思う蛇の様に悪辣で、狡猾で、耽美で――――危うい美しさだった。

第五話　書を捨てよ、戦場へ出よう

多くの得体の知れない出店で賑わう路地裏を、天高く聳えるビルから漏れ出る光が照らし出していた。
フードを目深に被る男達が声を潜めて会話を交わす酒場に、足が6本の動物を串で刺して焼いただけの物を売り捌く屋台。
淫靡な笑みを浮かべる薄着の女達が小さな駆動音と共に手招き、しゃがみ込む老人が複雑な機械を弄くり回し奇天烈な音を奏でる。
此処は東京。永劫の楽園都市を謳う地の暗部。怪しげな密会に、突然変異した動物を貪る貧者達御用達の店、違法改造アンドロイドが営む風俗店に、横流しされた官製の品々。
此処で手に入らぬ物など何も無く、法では無く金が支配すると噂されるこの路地は人呼んで『暗金街』。
拡大する都市の中心部から忘れ去られたかの様に、かつての大戦の跡すら所々に残るこの地に異質な色が入り込んでいた。
黒。黒、黒、黒。
黒光するタクティカルスーツに踊るは『ＭＥＸＴ』の文字。即ち、文部科学省。
手に手に青光りするライフルとライオットシールドを携え、一つの建物を取り囲む様に配備された車両から働き蟻の様な勤勉さと均一さで次々とその建物の入り口を取り囲んでいく。
ヘルメットのバイザーの下で無感動に己の標的を見据える彼等の顔は、一様に無個性な表情を浮かべていた。
同じ顔に、同じ装備に、同じ動き。均一たる彼等は一つの目的に従い粛々と動く。
『こちら科学技術・学術政策局警備課。展開を完了しました。』
スモークガラスから漏れ出る夜景の光を濡羽色の髪に反射させ、気怠げな表情を浮かべる少女は己の左腕を覆うデバイスへと指を走らせる。猟犬達は準備を整えた。後は――――飼い主が一声掛けてやれば良い。
「好きにしてくれ～。終わったら通信で報告するよーに。」

ザッという空電音を残し、再び車内を静寂が満たす。全く、年頃の乙女を深夜に呼び出してやらせる事がゴミ溜めを漁る事とは。大戦前は存在していたとされる『福利厚生』なる物に思いを馳せてみるも、あまりビジョンが思い浮かばない。

給料が出るだけで儲け物だというのに、定時で帰るだのノー残業だの言い出した日には戸籍を抹消されて適当な異界の鉱山にでも放り込まれてしまう。

昔は『ロードーキジュン砲』なる兵器を労働者達が携えており、雇用された企業に不満を持つ者達はそれを企業へと向け、レジスタンス運動へと身を投じた等と言う噂も流れるくらいだ。大戦前はよほどこの国は混沌としていたのだろう。

取り留めのない事を考えていると、欠伸が一つ口から溢れ出る。

クローン達を現場の任務に導入するのは大いに結構な事だが、薬物や暗示で自意識を縛り過ぎなのが玉に瑕だ。

こうして決定を下す人員が最低でも一人現場に行かなければ、彼等は只の同じ顔をした烏合の衆だ。

話し相手にしようにも、『はい』か『分かりません』くらいしか言いやしない。

あの『彼』の様な突然変異型のクローンが増えてくれないだろうか。彼女は四肢をほぼ全てサイバネティクス化した己の友人の顔を思い浮かべる。

『彼』は、朱羽亜門という名を与えられたクローンはどうして生まれてきたのだろう。

他の全てのクローンが濁ったガラスの様な目で地面を眺めている中、彼だけはその目を暗く昏く直向きな生への渇望に染め上げ、天賦のセンスによって無敗を貫く。量産の過程で生まれた『イレギュラー』。日本武装医師会の名医や研究者達が無数の検査と試算を繰り返せども匙を投げた生まれながらの戦闘マシーン。

他の個体とは異なり確固たる自意識が存在し、柔軟な思考が可能。己の肉体の欠損も厭わぬ程の忠誠心を持つ国家の第一の下僕。これ程までに国家に都合の良い存在が偶然で生まれたとするならば、それ

はもう凄まじい天運が味方したとしか考えられない。だがまぁ、そんな事は彼女にとってはどうでも良いのだ。
実は――――これは彼女しか知らないと自負しているが――――彼は本を読むのである。
今や完全没入型の仮想現実やら、小型の立体映像デバイスが安価で出回る中、活字を読む人間は少ない。
更に先の大戦で多くの書籍が回収、焚書された為に本そのものが貴重だ。
彼女は旧家の出身であり、文部科学省とのコネもあった事から蔵書は焚書を免れ、幼き頃から活字に触れてきたのだが先述の事情もあってこの趣味を誰とも共有できない。
家のコネで文部科学省に就職してからも悶々とした毎日を過ごしていたある日、法務省への出向を命じられたのだ。
文部科学省の所有する幾つかの異能研究機関と法務省異能調整局との橋渡しをせよという何とも面倒くさい仕事。
更に言ってしまえば、異能調整局には武闘派が多い。第一課長の狂乱の不死鳥を始めとして、氷結地獄、単独旅団、そして悪名高き無能無敗などの二つ名持ちがゴロゴロと転がっているのだ。
非力な文学少女を自認する彼女にとって、気の進まないどころか全力で拒否したい案件だったのは言うまでもない。
しかし彼女は――――戦々恐々と向かった聳え立つ黒い巨塔で運命と出会う。
一通りの顔合わせを終え、強者居並ぶ会議室から這う這うの体で抜け出し、昼食を取りにカフェテリアへと向かった彼女の目に一人の青年が留まる。
誰もいない窓際の席に一人座り、腕から響く僅かな駆動音と共にページを捲る音を響かせながら口へとサンドイッチを運ぶ後ろ姿。
その時の彼女の歓喜の程は筆舌に尽くし難い。生まれてこの方、本を読む同志になぞ会った事が無い。いつかは同志と巡り合い、オススメの本を紹介してみたい等と淡い期待を抱いていた彼女は、食事をしに来た事などすっかり忘れてその背中へと駆け寄った……駆け寄っ

てしまったのだ。
「キミキミキミキミ！もしかしてその手に持ってるのは本とかいう物だったりするのかい?!
ちょっとボクと一緒にお話しヒィッ！」
彼女の一世一代のファーストコンタクトへの返答は、カチリとサイバネティクス化された左腕の中から覗く黒光する銃身だった。
だがそれ以上に彼女が怯えたのは……その顔だった。黒髪に黒目。特徴のない事が特徴的なその顔には無表情だけが浮かべられ、暗く濁った目からは何処か見られたく無いものを見られた事に対する苛立ちが感じられる。
クローン。いや、違う。違う違う！一般のクローンはこんな目をしない！〝アイツ〟だ。殺戮兵器、法務省のジョーカー、番外の最強。即ち、無能無敗。
あー死んだ。さようならボク。グッバイこの世。無能無敗のプライベートな時間を邪魔して生きて帰れるとは思わない。次の瞬間には頭に風穴を開けられて赤い大輪の花を咲かせる己を幻視し、この世への潔い別れを告げた彼女だったが、意外にも投げかけられたのは銃弾では無く言葉であった。
「あ……これは申し訳ありません。癖になってまして……。そうですよ。少々値は張りましたが先日購入した本です。珍しいですか？」
先程の雰囲気は霧散し、打って変わって申し訳なさそうな雰囲気をその無表情から振りまきながら、左腕を元へと変形させる無能無敗をぽかんと彼女が見つめてしまったのは決して責められる事ではあるまい。
どうやら、此処で死ぬ定めでは無いらしい。居ない事がほぼ証明されてしまった神は実は存在したのかもしれない。
頭の中で神に感謝を捧げつつ、彼女は勇気を振り絞って言葉を紡ぐ。
「そ、そうだ……いやそうです。はい。ボクも本を読むのが趣味なんデス。」
汗をダラダラと流しながら、チラリと彼の持つ読み込まれた跡のあ

る本の表紙を見ればそこに踊る『逃げの極意　～海外逃亡編～』の文字。
はてなと頭に浮かぶ疑問符。最強にして最恐とされる無能無敗がとても読む様な本には見えないが。すると彼は視線に気づいたのか、本を閉じながら語る。
「おや、そうでしたか。私も職業柄、逃げる非協力的市民を捕縛する事が多々ありますからね。先読みの為にその手法を学んでおこうかと。大戦前の書籍ですが、中々タメになりますよ」
成る程、そういう理由だったか。国家に敵対的な異能行使者を何処までも追いかけて捕縛、あるいは殲滅する異能調整局。
そのエースともなれば、此処まで勤勉なのも納得だろう。
あそこまで本が草臥れる程読むとは、本も冥利に尽きるだろう。だが、実利一辺倒なのは彼女にとって少し面白くなかった。本は確かに知識の園であり、実利の為に読む事もある。だが、彼女にとって本は楽しんで読むものなのだ。決して実利の為だけに読むのではなく、活字が織りなす冒険を、恋愛を、悲劇を、物語を心で楽しむ。初めて出会った読書仲間に、彼女は勇気を振り絞って言葉を放った。だって、だって。彼女はこの出会いを初めて本を読んだ時から待って居たのだから。
「あ、あのさ！本がお好きなら読んで欲しい本があるんだ！」
今でも思い出す、少し驚いた様な無能無敗の顔。無表情以外も出来るんだな、なんて感じたのがつい昨日の様だ。
思えば、あれが彼と自分の縁の始まりだったのだろう。生まれて初めての読書仲間。お互いに本を貸し合い、感想を話し合う仲。夢にまで見たその縁をまさか無能無敗と結ぶ事になろうとは。
嗚呼、早くこの任務を終わらせて帰りたい物だ。明日彼に貸す本を見繕わなければ。ロビンソン・クルーソーなんてどうだろう。
ニヨニヨと表情を崩し、早くも任務を成功させた後を考えている彼女はまだ知らない。この任務をきっかけに、自分の人生が……いや、この国が大きく動く事になる事など。

◆

やぁ、俺だ。

今日もディストピアで元気に庶民を踏み台にして暮らす一般エリートクローンとは俺のことよ。

いやまぁ、右手以外機械になってるのが元気っていうのかは議論が分かれる所だろうが。

いや違う！そんな話をしに来たわけじゃ無い。今日は朗報があるのだ。俺はまた一歩バカンス計画へと近づいた。

なんと！とある『本』を購入出来たのだ。ふらりと休日に寄った雑貨屋の奥にポツンと置いてあったハードカバーの本。

こちらの世界は技術進歩＆過去の焚書政策の所為で書籍が少なく、前世はかなり読書家であった俺にとってはかなり苦しい状況だった事もあり、暗い店内の中でキラキラと光り輝いて居るように見えた。

然も、題名が『逃げの極意　～海外逃亡編～』である。コレはもう日頃頑張る俺への神からのボーナスなのでは無かろうか。

この世界に転生してから苦節数年……！……そうだった。クローンは生まれてから既に成人の姿を取っているから忘れがちだが、俺がこのディストピアにぶち込まれてから１０年経って居ないのだ。僕は小学生です！働かせないでください！

クローンに人権とか無いからね、仕方ないね。普通の人間にもあるか怪しいのにクローンなんて話にならんだろ。

話がずれた。そう、何はともあれ今生で一、二を争う幸運なのである。値札を見て店主にレメゲドンを向けたくなったが、此処はグッと堪えて数ヶ月分の給料に相当する金を無言で出す。

誰にも渡さねぇからな……！何時ぞやのレジスタンスの姉御が襲撃してきたとしても、この本を守る為ならまた数ヶ月の死に戻りを繰り返す事もやぶさかでは無い。

それからはもう、只管にその本を読み耽った。流石に数十年は過去の本なだけあって、偽装戸籍の作り方等は参考にならないが、逃亡先での生活方法や追っ手の司法組織を撹乱する方法などは中々為にな

りそうだった。
それに何より、その本を読む事で将来のバカンスに思いを馳せてとても幸せな気分になれるのだ。最早この本は俺にとってのバイブル。こんなもん読んでるところを課長や、あの腹黒金髪合法ロリにでも見つかったら何されるか分かったもんじゃないので、監視の目がない自室か何故か監視カメラが存在して居ないカフェテリアでしか読まない事にした。
近づくなオーラを放ちながら窓際の席にでも座っていれば、態々読んでいる物の題名を確かめにくる奴なんて居ない。
本を購入して数ヶ月が経ち、傷ついた俺の財布事情も回復傾向、昼食時にカフェテリアで本を読みながらバカンスについて妄想を膨らませる事が日課になっていたある日。
俺が南国ビーチでトロピカルジュースを飲みながらカウチに寝そべる妄想を、合成肉とどう考えても小麦からは作られて居ない緑色のパンで作られたサンドイッチを食しながらして居た時。
背後から、接近する気配を感じたのだ。
課長と局長の気配だけを警戒しすぎて、それ以外の気配、しかも初見の気配に対して反応できなかったのだ。
周囲に誰も居ないことを確認して本を読み始めたのだが、油断しすぎて居た様だ。ま、まずい。流石にこの距離まで近づかれたならば本の内容を見られてもおかしくない！
仕方ない。作戦『食事中に話しかけられたら発砲するくらいイライラしてた』で行こう。なんか割と頭のおかしい奴扱いを局内でも受けているし、今更発砲くらいなんだって話だよな！この局内の人間ならゼロ距離射撃とか余裕で避けてくるし、当たる心配もないでしょ。背に腹はかえられぬ！
左腕が何かに切り替わる感触。腕の感覚が内部に引っ込み、骨が軋む様な感触と共に黒光りする銃口が腕を割って現れる。
瞬間、背後へと振り向きその銃口を――――――
「キミキミキミキミ！もしかしてその手に持ってるのは本とかいう物だったりするのかい?!

ちょっとボクと一緒にお話しヒィッ！」
……あれ、こんな奴いたっけ？
振り向けばぷるぷると涙目で震える、小動物じみた雰囲気を纏う白衣の少女。局内にこんな人間居ない……よな？
首元を見れば、ゆらりと揺れる『入場許可』の札。
つまりあれか？俺は初対面の人間に銃口突き付けちゃったと。しかもどう見ても泣かせてると。
まずい。黒髪黒目の男が涙目の美少女に銃を突き付けてます。字面だけで犯罪の香りが凄い！
「あ……これは申し訳ありません。癖になってまして……。そうですよ。少々値は張りましたが先日購入した本です。珍しいですか？」
苦し紛れの言い訳が口をつく。いや、相手に銃口突き付ける癖って何だよ。もっと良いのあっただろ！
何もなかったかの様に左腕を通常の状態へと戻し、未だに涙目の少女にお願いだから叫んだりとかしてくれるなよと願いを込めながら軽く頭を下げる。此処で叫ばれたらエリート街道から鉱山労働者派遣街道へと移行してしまう！
「そ、そうだ……いやそうです。はい。ボクも本を読むのが趣味なんデス。」
駄目だ。ライオンを前にしたオカピみたいになってる。いや見たことないけど。
現実逃避気味に考えていると涙目の美少女の目線が揺れ、俺の本の表紙へと移行する。
ま　ず　い。見られた。逃亡とか堂々と書かれてるの見られた。いやまだだ！まだ挽回できる！
「おや、そうでしたか。私も職業柄、逃げる非協力的市民を捕縛する事が多々ありますからね。先読みの為にその手法を学んでおこうかと。大戦前の書籍ですが、中々タメになりますよ」
流石にキツいか……？最悪、記憶処理（頭部への拳による殴打）も考慮せねばならないかもしれない。
だが、少女は何処か納得した様な雰囲気を放ったかと思えば悩む様

に考え込み始める。
ええ……。どう見ても逃亡を試みてたのは俺だろ……。節穴なのかもしれない。詐欺とかに騙されてそう。
いや、これは駆け引きなのかもしれない。この考え込んでるのは『これをネタに幾らまでコイツから巻き上げられるか』の可能性もある。幸い、カフェテリアには俺とこの少女以外誰もいない。この少女さえ丸め込めば俺の計画は安泰だ。
仕方あるまい、俺の財布が火を吹く日がまた来た様だ……
一先ずは相手の出方を伺う事にする。これでもアホみたいな量の修羅場を潜っているのだ。来いよ、小動物少女（仮名）。
年季の差を教えてやる――――俺の方が年下だろうけど――――
「あ、あのさ！本がお好きなら読んで欲しい本があるんだ！」
俺は自分の無表情が困惑に崩れるのを感じた。
今思えば此れが彼女、即ち花夜柳との長い長い付き合いの始まりだったのだろう。
彼女とは中々に良い友人関係を築けていると思う。なんたって、柳は軽率に暴力に訴えてこないからな！付き合うべきは文民よ。
……しかし、花夜柳。原作のどこかで名前を見た様な気がするんだよなぁ……？

第六話　天使×魔人

ピチャリと汚水が跳ね、水滴が水面を揺らす音が遠く反響する。
ぬるりと指先に触れる未だ温かい液体を振り払い、俺は深呼吸と共に肺に鉄錆と腐敗の香りのする空気を送り込んだ。
鋭角的なフォルムの近未来的な銃を腰のホルスターに戻しながらインカムへと触れれば、僅かな空電音と共に聞き慣れた声が電波に乗って俺の耳朶を揺らす。
『素晴らしい手際です。朱羽調整官。付近の思考反応をスキャニング……反応無し。目標レジスタンス小隊の沈黙を確認。』
機械的な女性の声で告げられる終了宣言。俺はまだ反動の余韻の残る右手を軽く振り、ゴム靴でうつ伏せに伏せた物言わぬ屍と化した男の身体をひっくり返す。
俺の虹彩に仕込まれた暗視システムが緑色の世界を網膜に投影し、その荒い視界の中で脳天に風穴を空けた男の顔を観察する。彫りが濃いヨーロッパ系の顔立ち。防弾ベストの袖から覗く筋肉質な腕が、この男が戦場にこそ身を置く人間であると饒舌に主張して居た。
「日本人じゃ無いな……ヨーロッパ圏は日本の統治下で無い筈だが。ＪＤＡＣＳ（異能調整局統括ＡＩ）、法務省データベースから画像検索。キーワードは『傭兵』。」
『検索中……一件該当。』
俺の視界を一瞬で覗き見たＡＩは瞬時に此処から数キロ程離れたサーバーへと接続し、無感情な声で答えを告げる。
『ヴィクトール・コルニエフ。フランス領旧ロシア自治区を拠点とする民間軍事会社【チェルニー・ミーチ】の傭兵です。血液型はＢ。ムルマンスクにて西暦２０７８年に誕生。グアルテナ幼年学校を卒業後、第５次国連徴兵にて国連軍に入隊。ローマ攻防戦において第一次突入部隊として――――』
「いや、もう良い。その情報は課長に送信を。」
このまま喋らせておけばそのコルニエフとかいう男の黒子の数、好きな歌手、性癖、交際関係まで一日中喋り続けるであろうその声を途

中で遮り、その全てを焔(ほむら)課長へとぶん投げる。
恐らくはレジスタンス側が雇った人間だろう。日本の支配下にあるアジア圏の人間ではなく、ヨーロッパ圏の人間までもが彼等に協力し始めているという事は、レジスタンスの〝例の計画〟が成功を収めたという事だ。
つまりは、日本政府を打倒しうる物がレジスタンスにはあると一部の人間は確信しつつある。
まぁ、国家に忠実な彼女ならきっと全部読んでくれるだろう……多分。その燃える様な紅のツインテールをブンブンと振り回しながら怒声を上げる彼女を一瞬幻視するが、肉体労働専門である俺に此れを読ませるよりも遥かに効率的だろう。
コ〇ラのマーチだかチェルニー・ミーチだか知らないが、そこら辺の関係を洗うのは彼女に押し付……任せよう。
それに俺の方が歳下なのだ。年上の威厳を見せて貰おうでは無いか。
『総ファイル数８９ページを送信しました。他にご要望はお有りでしょうか？』
「……謝罪の言葉も送信しておいてくれ」
少々早まったかもしれない。鮮血が混じる汚水に倒れ伏す十数人の死体を避けながら、無限に続くかの様な下水道の暗闇の中へと俺は足を進める。
刹那、俺の鼻を刺す腐臭。俺は目当ての物を発見したとの確信と共に、目の前に広がる醜悪な空間をゆっくりと見渡した。
ズラリと４メートル程の高さの天井からぶら下がる肉塊。時折蠢き、ゴポゴポとくぐもった音を発しながら揺れる肉塊達が並ぶ景色は、地獄に生肉加工店があるならばこんな物だという感想すら抱かせる。
粗い緑色の視界はアーチを描く天井から垂れ下がりながら動き出す肉塊達を映し出すが、テリトリーに入ってきた物が己達の期待していた物とは違う事に気づいたのだろう。直ぐに下水道は肉塊達が放つゴポゴポと言う音だけが支配し始めた。

『生体熱遮断モードへと移行しました。フェイスシールドの着用を推奨します。』

鼻や耳が存在せず、原始的な視覚器官しか持ち合わせていない其れ等は熱源を探知する事によって、周囲を識別する。

漏れ出る熱を遮断して仕舞えば、奴等にとって俺は存在しない物と同然だ。

大戦中に敵対勢力の異能によって汚染された下水道を浄化する為に放たれた『ソレ』の名はクリーナー（清掃員）。最早完全に野性化し、今や異能の残滓ではなくこの下水道へと足を踏み入れた動物を食糧とする事を選択して居た。

まぁ、動きがカタツムリの様に緩慢なので恐らく今でも汚染を主食としているだろうが。

『クリーナー（清掃員）の群生地点を確認。異能行使者が間違い無く当該施設に滞在している物と判断します。』

つまり、そんな彼等が群れる地点として選ぶ地点は色濃く異能の残滓があるという事だ。

此処は所謂闇市の広がる『暗金街』の地下を巡る下水道。敵異能による攻撃の爆心地となり放棄された区画にて栄える、貧者と違法に生きる者達の楽園であり無法地帯。

未登録の異能行使者も存在しているだろうが、『暗金街』で燻っている様な奴等が所持する異能の強度等たかが知れている。

本来ならば5、6体程のグループを作って下水道内を徘徊する彼等が此処まで群れている事への予想される答えは二つ。

一つ。此処ではカタツムリの速度以下の速度で動き、尚且つクリーナー（清掃員）達の食糧となりうるサイズのクソ雑魚動物が群生している。

二つ。この付近で常習的に強力な異能行使者が滞在しており、それによって発生する異能の残滓を目当てにクリーナー（清掃員）達は群れている。

一つ目ならとっとと絶滅してしまえ、そんな欠陥生物は。と言うか、そんな生物がいるならとっくの昔にクリーナー（清掃員）達に食い尽くされている筈だろう。

二つ目ならば、そんな強度の異能行使者が所属する団体は国家機関ともう一つに限られている。
まぁ、この付近の下水道をレジスタンスの連中がパトロールしていた時点で答えは出ている様な物だ。奴等が動物保護団体に方向転換したのでなければ、間違い無くこの下水道の真上の建物はレジスタンスの拠点だ。それもかなり重要な。
『先程、科学技術・学術政策局警備課の先行部隊が指揮官を除いて壊滅。文部科学省より現場の指揮権の法務省への移譲が宣言されました。』
俺の思考を中断するかの様にインカム越しに告げる声に、俺は無言で笑う。
なんだかんだと御託を並べたが、実際の所。俺はこの上に何があるかを知っていた。全ての始まり。運命が始まる場所。この国の黄昏の起点。主人公が彼女の運命と出会う地。
『朱羽亜門調整官からの申請を確認……承諾。義手、義足、及び第０世代空想領域接続デバイス【レメゲドン】の全拡張機能の使用を許諾。』
腰のホルスターに収まった確かな重みを感じさせる近未来的な銃の引き金へと手を添えながら、ゆっくりと引き抜く。
照準を合わせる先は下水道側面に等間隔で設置されたドア――ではなく、肉塊犇く天井。
俺は知っている。これから天使が来る事を。いずれこの国からの弾圧を跳ね除け、自由という素晴らしき２文字の下に他者を鼓舞し、美しき王（Malkuth）国へと誘う存在を。
『Ｗｅａｐｏｎｓ　ｆｒｅｅ（兵装使用自由）。ご武運を、朱羽亜門調整官。』
その行動は高潔なのだろう。その思いは称賛すべきなのだろう。
だが、それは俺がこのクソッタレの世界からの逃亡への旅路で足を止める理由にはならない。
インカムから響く声が止み、辺りを肉塊が蠢く音だけが支配する。
瞬間、暗闇と肉塊だけが支配していたこの地を白銀の閃光が染め上げた。

放たれたのはレメゲドンの高出力レーザー。白銀の光が天高く登り、一瞬にして夜の『暗金街』を昼へと染め上げる。
天井を破り、崩れ落ちる瓦礫と肉塊の中。闇を照らし出す光の中、卵の様に丸く閉じられた四枚の羽がその凄まじい熱量と光を物ともせず、可憐にして頑強な白亜の壁として己の主人を保護していた。
刹那、開かれる四枚の羽。
手を繋ぎながら舞い降りる二人の少女は天より祝福されていると言わんばかりにその背中から伸びる橙色とレモン色の美しき羽を羽ばたかせ、ふわりと舞い踊る羽毛がまるで宗教画であるかの様なこの光景の美しさを際立たせる。
青いポニーテールとピンク色のショートボブの二人の少女は其々意匠の違う鎧を纏い、手にはまるで海をその煌めきのままに固め金属として鍛えあげたかの様な瑠璃よりも深き蒼を湛える槍と、特大の水晶から武神が掘り出したかの様な少女達が放つ光を七色に屈折させる剣をそれぞれ携えている。少女達は、その翼をゆっくりと動かしながら地下に広がる空間へと降り立つ。
彼女達が、彼女達こそが。この物語に祝福された存在。主人公（ヒーロー）であり、勝利を確約された生まれながらの英雄達。
そこに羽毛と砂塵の舞い散る空気を振り払い、パワードスーツの赤黒く光るラインを全身に走らせる無粋な存在が一人。
フェイスガードに覆われた奥の顔を無表情と僅かな高揚に彩り、俺は舞い降りた『主人公』達へと規則通りに言葉を告げた。
『法務省異能調整局だ。異能濫用禁止法第一条、器物損壊、国家反逆罪及び緊急事態宣言に基づく国民管理への抵抗の疑いで執行する。無駄な抵抗はよせ。』

◆

花夜柳（はなよいやなぎ）にとって、この任務は直ぐに終了する類の物である筈だった。
とっとと盗まれた重要指定文化財を保管していると思われるレジ

スタンス拠点を制圧し、準監視対象の身柄を国防軍に引き渡してから甲金フーズの発表した『かれーらいす』なる物のデータセットに舌鼓を打つ予定だったのだ。

この施設に居るのは準監視対象の民間人と、複数人の武装したレジスタンスメンバー。

数十人の科学技術・学術政策局警備課の重武装クローンで攻め立てたならば一瞬でケリが付く筈だった任務は、建物内に踏み込んだクローン兵達が銀色の液体金属で構成された巨大な一撃で玄関ごと薙ぎ払われた事で破綻を迎えた。

「限定具象化！《エロヒム・ツァバオト》ッ！」

凛とした声と共に揺れる青いポニーテールを靡かせ、まるで舞うかの様に周囲へと手を向ける少女。

その手の動きに追従するかの様に縦横無尽に動くは、彼女の周りに寄り添う様に浮遊する複数の液体金属の塊より放たれる白銀の煌めき。鞭の先端の様に振るわれるその鋭い一撃は、国防軍標準採用のライオットシールドをまるで障子のように切り裂き、辺りでは吹き飛ばされるクローン兵達が護送車に衝突した事による金属音が鳴り響いていた。

「行くよ、春音（はるね）！私達はもう逃げ回らない。私達は抵抗する者達（レジスタンス）！この出口の無い鳥籠から、貴女を連れ出しに来た！」

白銀の殺戮武闘の中、凛とした表情で彼女は振り向き手を差し伸べる。

差し伸べられた先には尻餅をつく少女。ピンク色の髪を夜風に揺らし、快活そうなその顔には困惑と歓喜の色が覗く。

「……うん!!!」

いや、うんじゃないが。

ボクはプルプルと震えながら、数十メートル離れた見晴らしの良い指揮車の中からこっそりとかなり広くなった玄関に居る二人の少女を眺めていた。

え？なんで指揮車の見晴らしが良いかって？

……ついでに風通しも良いよ？だって、この車上半分が無いもん。

さっき切り落とされました。おほしさまきれい（現実逃避）
リクライニングを限界まで倒してうたた寝してなかったら今頃ハーフアンドハーフなスプラッタ美少女が完成している所だった！
というか！というか！国防軍の『異能保持者は居ない』発言を信じて来たっていうのに、アレはなんだよ！
どう見たって第一級の異能保持者だろ！この車の弁償はお前らにさせるからな……！
これはどう見たって法務省異能調整局の案件だ。ボクは左腕を覆うデバイスを必死にタップし、周囲で地面に激突したクローン兵が出す鈍い音に涙目になりながら上司を呼び出す。
『はーい。こちら志乃咲課長ー。任務終わった？』
「それどころじゃ無いですよ！異能保持者居ます！それもどう見ても第一級の！ボクに預けられた部隊が千切っては投げられ千切っては投げられてます！法務省に投げてくださいこの案件！量産型のクローンじゃ相手になりませんってば！」
ホログラムで映し出されたその女性は、その報せに少し考え込んだ様子を見せる。
恐らくは面子とかそう言う事を考えているのだろうが、面子が潰れる云々の前に早くしてくれないとボクの命が潰える！
「お願いします！もうこの指揮車とかオープンカーになってます！上半分が切り落とされて無くなってます！
次に散るのはボクの命なんですぅぅ!!!助けてください課長ぉぉぉ!!!」
涙を垂れ流しながら訴えるボクを尻目に、カタカタと何かを打ち込んでいる課長。
それと同時に、ブンッ！という音と共に車の後部が銀色の残像と共に切り落とされた。狙ってる！狙ってるよどう見たって！
「死ぬ死ぬ死んじゃう！死にたく無い！後部座席が消えた！次はボクだぁぁぁ!!!」
『あー……法務省はもう人材を派遣しているみたいだったから、現場の指揮権を渡しておいたわ。』

「ほえ？」
瞬間、ボクの背後より天高く一筋の閃光が立ち上がった。
放たれた白銀の極光は、凄まじい陰影を生み出し周辺一帯を昼間の様相へと塗り替える。
眩しさに顔を腕で覆い、振り返るボクの左腕から声は続く。
『良かったわね、花夜ちゃん。派遣戦力は一名。朱羽亜門調整官。無能無敗は伊達じゃ無いってところを見せてもらいましょ？』

第七話　王国より栄光へと至らん

「はぁぁぁぁっ！」

夜の闇を可憐な少女が振るう七色の煌めきが切り裂く。

その年頃の少女らしいすらりとした細い腕に握られるは、成人男性でも持ち上げるのは不可能とすら思わせる巨大な剣。

水晶を鍛え、研ぎ澄ましたかの様に見えるその大剣は七色の光を振り撒きながら己の主人たる少女の前へと立ち塞がる一人の男へと迫り、その美しき輝きを鋭利に煌めかせる一撃は絶死の物と思われた。

だが、それは相手が凡百の敵であった場合である。

七色に光る致死の熱線を先触れとして振りまきながら放たれるその大剣の一撃に対し、男は動じる様子も無く勢いよく右足を地面へと叩きつける。サイバネティクス化によって強化された身体とパワードスーツの相乗効果は下水道の床を大きくひび割れさせるという結果をもってその男へと応えた。その衝撃によって無数に跳ね上がる瓦礫達。

男は淀みのない手付きで両手を高速で振るい、その両腕に弾かれた瓦礫達は凄まじいスピードで即席の弾丸と化して空間を駆ける。

ガガガガ――――ッ！

不規則な軌道で男を焼き尽くさんと放たれた閃光は、まるで放たれた瓦礫へと吸い付けられる様にその軌道上に存在する瓦礫達に接触し、在らぬ方向へとその破壊力を振りかざす。

不可視の防壁に囲まれているかの様な錯覚すら抱かせる挙動でその進路をずらした男に対し、ゴクリと少女は唾を飲み込むも、振うその大剣を止める事は無い。

振り撒かれた熱線も、全てはこの一撃の前座に過ぎない。彼女の父の遺産たる『コレ』に秘められたる力はこのまま男のパワードスーツを切り裂き、絶命させて余りある物だ。

大剣より流れ込む知識と力に身を委ね、振るわれるは美しくも凄まじき一撃。それに対し男は瓦礫を弾いた体勢のまま、その一撃の進路上に己の右手を挟み込む。

刹那、撒き散らされる極光。
己の主人の敵対者を喰らい尽くし、塵へと変えんと吠え立てるその大剣は右腕を覆うパワードスーツを瞬時に消失させる。だが、その一撃は男を傷つけるには至らない。次の瞬間、這う様に男の右腕を一瞬で覆い尽くすは紫の燐光を放つ紋様。
その一撃と、拮抗する紋様より発生した紫電は大気を焼き、周囲にオゾンの匂いを撒き散らす。
魔神が手ずから編み込んだその紋様は、少女の渾身の一撃と拮抗し明滅する。
翼を広げ上空より切りかかった少女の一撃は防がれたものの、男を中心に先程作られた陥没痕を上書きするかの様に作られたクレーターがその一撃の熾烈さを物語っていた。
だが、防がれてしまっては如何に鋭き一撃といえど意味はない。拮抗する七色の閃光と紫電に男の無感情な黒いフェイスシールドが照らされる中、吹き上がる風にピンクの髪を揺らしながら焦燥にその可愛らしい顔を染める少女。
「春音(はるね)！今よ！」
しかし、元より彼女は一人では無い。その声に導かれる様に勢いよく飛び退く少女。世界を塗りつぶしていた極光は瞬時に消え去り、拮抗するべき相手を失った男はその体幹を僅かに崩す。
有るか無いかの僅かな隙。それを目掛け放たれた白銀の液体が空間を縫い、戦場において致命的な隙を露呈させた男へと迫る。蛇の様に隙を窺い、アルテミスの放つ銀矢の如き清廉なる残像を引きずりながら迫るその一撃は、鏡面の様な表面を男の鮮血で彩らんと唸りを上げて男の死角から放たれた。美しき二人の天使により編み上げられた、敵を死へと誘う譜面。完全なる死角より放たれた一撃は、天使を地へと堕とさんとする不遜なる罪人を裁く――――筈だった。
『軻遇突智(カグツチ)、起動』
白銀の断罪は、男の左腕より放たれた赫赫たる炎を纏った一撃により失墜する。
男は完全に死角から放たれた一撃に対し、その左腕の関節の可動域

を大きく無視した一撃にて返答した。
駆動音と共に放たれたその一撃は、火薬の燃焼するエネルギーを遺憾無く拳の威力へと変換し放たれた銀矢を打ち砕く。
大戦中に大東亜工業が設計、開発した義体用の兵器。だが装着者の肉体への著しい負担を強いるソレは使われる事なく、歴史の闇へと葬り去られる筈だった。しかしそれは今。設計され、そうあれかしと望まれた機能を男の元で十全に振るい、その爆炎を月光の下に晒していた。
衝撃、轟音。液体としての本分を思い出したかの様に辺りへと飛び散る水銀の中、煙と共に立ち込める火薬の強烈な匂いは、周囲を覆うオゾンの匂いと混ざり合い形容し難い異臭を放つ。
ガシュッ！と何かが排出される音と共に男の左腕から高熱の蒸気と共に空の薬莢が地面へと落下する。
金属が跳ねる音を奏でながら地面を転がる音が、完全に破壊された下水道の通路へと響き渡ると同時に、迎撃の余波だろうか。男の顔を覆うフェイスシールドにピシリとヒビが入る。
この間、水晶の一撃が放たれてから数十秒。だがその短い時間の間の攻防は彼我の力の差を饒舌に物語っていた。
「嘘……でしょ」
完全に不意を突いた一撃。
意識外から、死角から放たれたその一撃は男の腹部を貫通し、彼女の師父を殺した男への復讐と日本政府への反攻の鏑矢として、レジスタンスの戦の始まりを高らかに告げる筈だった。
無能無敗という二つ名が彼女の背に重くのしかかる。未来予知すら疑わせる戦闘センスに、的確な状況判断。
絶死が待ち受ける戦場の中で冷静に、冷徹に立ち回るその姿は彼女に鈍く光る鋼鉄の拳銃を想起させていた。
頭にこびりつく妄想を振り払うかの様に再度放たれる白銀の液体。
それは彼女の焦燥を代弁するかの様に、やけくそ気味な無数に分裂した散弾として男へと降り注ぐ。
それを赤色の光を全身に走らせた男は上空へと跳躍する事で回避

する。月光を背負いながら天を舞う男へ、その喉笛を食いちぎらんと軌道を修正した銀の雨が獲物を追う猟犬が如く迫る。

『機能変更。レメゲドン、面制圧へと移行します。』

それを迎撃するは瞬時に腰から抜き放たれた銃。

鋭角的なフォルムの表面を赤色のラインで覆い、駆動音と共にその姿をまるでパズルを組み替えるが如き挙動で細長く変貌させる。

次の瞬間、銃口より振り撒かれる発火炎（マズルフラッシュ）。雷管の爆裂は発射薬を瞬時に気化させ、銃口から放たれるは無骨なる鉛玉。無造作に振りまかれるその暴虐は、空中という不安定な場でありながら迫り来る白銀の時雨を的確に迎撃する。

放たれた白銀の散弾はその男を傷つける事叶わず。硝煙を銃口より立ち上らせ、スタリと戦闘の余波で崩壊し、中よりへし折れた街灯の残骸へと着地する。

月光を背負い、露出した右手に握るは殺戮の機構。地に立つ天使達を見下ろす魔人は手にした銃の先をカチャリと少女達へと向けた。

パキリ。突如訪れた静寂を払う様に響く音と共にフェイスシールドに走るヒビは大きな亀裂へと移行し、その身を砕け散らせる。割れ目から覗くは黒い目。暗く濁り、死を煮詰めた様なその目は冷徹に彼女達を見つめていた。

「１８２回……」

ボソリ、と男の口より紡がれる声。

唐突に放たれたその言葉だったが、蒼き槍を携える少女はその意味を瞬時に理解する。

１８２回。それは恐らく、先程の戦闘で男が彼女達を殺せた回数。数十秒の攻防……いや、戦闘と言えるのだろうか。

そんな疑問を抱かせる程に、彼女達と無能無敗の間に広がる溝は広い。手から力が抜ける。勢いよく燃え盛る炎ほど、消える時は儚き物だ。師父の仇を討たんと燃え盛っていた彼女の心は、圧倒的なまでの力量差にその炎を潰えさせようとしていた。

だが、もう一人の少女は折れていなかった。

もう一人の少女の心で揺れる炎へと吹子で酸素を送り込む様に。

ブンッ！という轟音と共に振り払われた大剣は七色の極光と共に燦然と輝き、その無数のカットが織りなす水晶の輝きを夜の闇へと振り撒く。
「私達はまだ、折れてないよ。」
蜂蜜色の目。つい先程まで普通の学生だった筈の彼女の目は、美しく燃え上がっていた。
心に秘めるは自由への願い。胸に抱くは今は亡き父への想い。高潔なりしその少女は、世界から祝福された少女は、月光を背負う黒い男を凛と睨みつける。
「私は、この閉ざされた世界が全てだと思ってた。
貴方達の言う事は全部正しくて、貴方達は正義の為にレジスタンスの人達と毎日戦ってるヒーローだと思ってた。」
広げられるは、レモン色の翼。仄かに東から立ち上り始めた黎明の光を反射させ、狭き檻より羽ばたかんと広げられた翼を背負う少女は、その可愛らしい顔を決意に染める。
「そして、そんな貴方達の為に研究をしてるお父さんを誇らしく思ってた。……ううん、お父さんの事は今でも誇らしい。
だから、だからこそ！お父さんを騙して、命まで奪った貴方達を、この国を覆い尽くす灰色の硬い壁を許さない！
レジスタンスの人達は、悪に狂った狂人達じゃなかった！明日を夢見て、今日を走るすごい人達だった！」
太陽が顔を出す。朝焼けの光は此れより散りゆく少女達への手向けか、それともこの国の変革の黎明の光か。
だが、少なくとも。少女の放った言葉はもう一人の炉心へと火を灯した事は間違いない様だ。
散らばった水銀達へと生命が吹き込まれ、主人の走狗たらんと彼女の周りへと馳せ参じる。
朝焼けの光をその白銀の鏡面に反射させ、手に持つ瑠璃より深き蒼を湛える槍はその鋒を微かな波紋に揺らす。
七色の光が、白銀の煌めきが、二人の戦乙女を美しく彩る。それは一枚の宗教画の様に美しく、幻想的な光景であった。

「「私達は、セフィロトの天使。」」
「冠するセフィラは王国（Malkuth）」
「冠するセフィラは栄光（Hod）」
「「この狭い空を、見上げるだけなのはもう終わり！」」
立ち上る圧力。二人の背負う翼が光を放ち、共鳴しているかの様に振動し始める。
ＨｏｄよりＭａｌｋｕｔｈへと至るパス。其れは即ち、『審判』を暗示する大アルカナ。
其れに対し無言のまま手に持つ銃を向ける黒き男、即ち無能無敗が持つ銃はその銃身を紅の光帯で覆い尽くし始めた。
相対せんとする二つの『必殺』。場を満たす緊張はガラリ、と瓦礫が崩れる音と共に打ち破られた。

「「黙示録、解放。天より注ぐ極光よ、今こそ黄昏へと――――」」
『レメゲドン、開帳。偽典・七十二柱の悪魔を開始。Ｎｏ．６８、フェニクス。対象を――――』
だが、その起こりうる筈の衝突は唐突に響き渡るその気の抜けた声によってかき消される事となった。
「はーい、そこまで！」
瞬間、男が立つ街灯の残骸が崩れ落ちた。
クシャリという擬音が伴いそうな程にあっさりと、まるで不可視の巨人がその手を振り下ろしたかの様にひしゃげた街灯。
その成れの果ての上で銃を構えた姿勢のままに硬直する男は、ギロリと目だけを動かしその下手人を見やる。
忽然と姿を現したのはその身を所謂ゴシックロリータと呼ばれる服で身を包んだ少女。朝日をその長く伸ばした金髪に美しく反射させ、恰も光輪を戴くかの様な神聖さを纏いながらもニコニコと屈託のない笑みを浮かべる少女は、上から男を押さえつける様な手つきを崩さぬままに少女達へと話しかける。
「エンジェル・ガールちゃん達、ちょっと焦りすぎだよ？
香織ちゃんは兎も角、春音ちゃんはこれが初めての【転樹】でしょ

？流石に今それをするのは時期尚早かなって思うゾ♪」
この戦場に似つかわしくない軽快な口調で話す少女。其れを見た二人の少女達はその顔を歓喜に染める。
「エリザさん！」
「エリ姉！」
エリザと呼ばれたその少女は、見る者を安心させる様な余裕ある笑顔で二人へと応える。二人の少女達はガチャリと手を覆う甲冑を鳴らし、手に持つ各々の武器を握りしめた。レジスタンスでも一、二を争う強さを誇る彼女。【重力緊鎖】のエリザベートと呼ばれるその少女が来れば無理のある攻撃を為さずに、此処であの男を撃破する事も充分可能だろう。
だが、その喜びを崩すかの様な不吉な音が響く。
ギチ、ギチギチと。何かが無理矢理押さえつけられた物を力づくで引き出そうとしているかの様な、そんな音。
「……嘘でしょ？」
全身を軋ませ、その身を襲う数百倍の重力に少しずつ、しかし確かに逆らうその男を化け物を見るかの様な目で見つめる少女。先程まで見せていた軽快さは鳴りを潜め、その顔に僅かに焦燥が浮かび始める。
「香織ちゃん？春音ちゃん？これ以上の戦闘は禁止。マヨヒガに撤退するよ。流石に【分け身】じゃあ無理だね、この子は。」
とある事情により、十全にはその力を振るえない彼女。その状態の力量では目の前の男を殺しきる事は不可能だと瞬時に判断し、二人の少女達へと呼びかける。
その間にも足元に増大した自重によってクレーターを作りながら、ゆっくりと此方へと銃口の先を移動させる男。
その目は獲物を狙うハンターの様に暗い意思の光が宿っており、其れを見た二人の戦乙女達の背筋にも冷たい物を走らせる。
「凄いねぇ、えーっと、無能無敗くん？だっけ。レジスタンスに転職する気とか無い？」
苦笑いしながら、少女は押さえつける動作を続ける右手はそのまま

に、空いた左手を二人の少女達へと差し出す。
冗談まじりに投げかけられたその言葉への返答は、睨みつける黒き双眼。この国の定めた正義の元に、何処までも忠実に、愚直に敵を屠らんとする其の姿はエリザベートに僅かな憐憫の情を抱かせた。
「……可哀想なお人形。」
二人の手を左手で握りしめ、地面を黒いタイツで包まれた足で少女が軽く蹴った瞬間、３人の少女達は忽然とこの世界から消え失せる。
残されるは、全身の義体箇所から灰色の煙を噴き上げる男が一人。朝日に其の全身を照らし、ゆっくりと立ち上がった男は声にもならぬ声を一つ、ポツリと零した。
「したいです……」
最先端の集音装置も、彼に執着する魔神が張り巡らせた魔術にすら探知されぬ程の微かな息吹として吐き出された其れは、誰の耳にも入る事なく楽園の朝の空気へと溶けて消えていったのだった。

第八話　堕ちたる羽

『損傷率８２％　早急なメンテナンスを推奨します。』

俺の脳内にのみ響くその声は、俺の全身に走る痛みを数値に表して無感情に告げる。

右腕の表面は火傷で覆われ、金髪腹黒ロリこと天威（あまい）局長によって彫り込まれた刻印は黒ずみ、ジクジクとした鈍い痛みを放っていた。

右腕を除いたサイバネティクス化された四肢は関節部分から灰色の煙をあげ、軻遇突智（カグツチ）を使用した左腕に至っては一部が融解しかけ、金属とゴムの焦げるイヤな臭いを振りまく始末だ。

更に、凄まじい重力に襲われた全身は痛み、無理な挙動を強いた筋肉が悲鳴を上げて俺の脳へと抗議の痛みの信号を送り込んでいた。

俺はゆっくりと座り込み、エリザベートと呼ばれた少女によって崩壊した街灯の成れの果てへと背中を預ける。

暫くは動けないだろう。義体の至る所が損壊し、戦闘行為はおろか日常の動作にすら事欠くであろうという事を数値で知らせるひび割れたバイザーを右手で引き剥がし、地面へと放り投げた。

『お疲れ様でした、朱羽亜門調整官。レジスタンス勢力が保持する新兵器のパターン解析を終了。

確認された二種の兵器を特別関心技術（Technology of special interest）に指定。以降はＴＳＩ―００２、及びＴＳＩ―００３として識別します。』

俺の総死亡回数は恐らく四桁。水銀を操る事によるトリッキーな戦術が特徴な香織ちゃんが容赦無く浴びせてきた、水銀一斉発射を全て迎撃する迄に積み上げられた俺の『死』だけでも１８２個。戦闘開始から全て数えたならば数日間に渡る時間を、俺は死を繰り返しながら進んできたというわけだ。

銃弾を銃弾で撃ち落とすという無理ゲーを体感ではあるが数時間ほどやらされ、挙げ句の果てには重力で揺らされた俺の脳は声高に休息の必要性を訴えている。だがそれを妨害するかの様に、先程放り投げたバイザーの液晶が明滅を開始する。

バイザーに取り付けられた俺には到底理解の及ばない複雑な機構

の幾つかが作動し、瓦礫に寄りかかる俺の目の前に一人の少女の立体映像を映し出した。
『朱羽亜門調整官。天威喪音局長より通信……おや、少し遅かった様ですね。おはようございます、局長。』
『おはよう、アヒル君ＪＤＡＣＳの隠語。ダックから。任務を終えた優秀な部下を労いに来たのさ。』
まるで其処にいるかの様な鮮明さで映し出された少女は、愉快そうな笑みをその可愛らしい顔に浮かべる。
流れる黄金を形取った様な髪は纏められる事なく背中へと流れ、早朝だからだろうか？普段はかっちりとした法務省の制服に包まれているその躰は桃色のシュミーズを身につけていた。
普通の人間が見たならば、成長の狭間にある危うい美しさに呑まれてしまうと思わせる程の美しさを湛えるその少女はまるで舞台の上に立つ役者の様な大仰さで、その慎ましい胸の前で手を組みながらその声を紡ぐ。
『いやぁ、亜門調整官。私の命じた極秘指令で此処まで傷ついてしまうとは大変心苦しいね。
私もレジスタンスが保有する新兵器があそこ迄の破壊力を持つとは思っていなかったんだ。其れを乗り越えて任務を無事に完遂した君を、調整局の長として誇りに思うよ。』
なーにが心苦しいだ。全てを知りながら俺を此処に寄越したのはこのロリだというのに。
今回局長より下された極秘指令は一つ。
『レジスタンスの新兵器を保管していると思われる施設有り。
強襲し、その戦闘データを回収せよ』
之だけ。その新兵器――――主人公達が纏う『セフィラ・ツリー』と呼ばれるアイテムについての説明も一切無し。其処にいるレジスタンスの人数も、同時に展開している他の機関の実働部隊についての話も無し。
どう考えても失敗する前提で任務を押し付けて来たとしか思えない。と言うか、最後にエリザベートが来ていなければ主人公ちゃん達

の合体必殺技がぶちかまされていた事を考慮すれば、殺す気だった可能性もある。
そう、エリザベート。彼女の説明がまだだった。彼女はレジスタンスの副リーダーであり、主人公達も持つ『セフィラ・ツリー』の適合者の一人である原作キャラだ。
この星に降り立った魔神の一柱であり、普段は【分け身】と呼ばれる自身の分身を動かすのみでレジスタンスの本拠地たるマヨヒガから出てこない人物。軽快な口調と『チョロい』発言が人気を呼び、普段は軽い彼女の好感度を最大まで上げた時に見られるその赤面イラストは多くのオタク共の心臓を見事に射抜いた。彼女についての二次創作イラストは照れ顔が大半を占めており、斯く言う俺も『Ｆａｌｌｅｎ　Ｇｏｄ』をプレイした時はかなりドキッとしたシーンでもあった。
見た目はゴスロリに身を包んだ深窓の令嬢といった風貌だが操る異能力である『重力緊鎖』は凄まじく、最終章ではその正体を現した天威喪音局長と【分け身】では無い本体で交戦し、隕石やらブラックホールやらが東京の空を飛び交う異能力大決戦を繰り広げた。
その場面を描いた一枚絵は荘厳な雰囲気すら漂わせる一枚であり、その時の凛とした彼女の顔と過去の照れ顔のギャップで多くのプレイヤーの推しキャラの座を勝ち取った。
それに比べてこの性悪ロリは何だ。ドＳなキャラが前世でも受けていたが、いざ己にその気質が向けられるとなると辟易としてしまう。だがそれももう少しの辛抱だ……。原作に突入した以上、俺を名前で縛っている焔課長の異能が消失するまでそう長くは無い。遂に俺の高飛び計画が始動する時が来たと思うと感慨深い物がある。精々それまでは従順な人間を演じていてやろうでは無いか。
「ありがとう、ございます。レジスタンス勢力二名の交戦ログは既に送信しておきました。
それと……局長に施して頂いた刻印の一部を使い切ってしまいました。申し訳ありません……。」
こういう時は己の動かないクローン表情筋が有難い。前世の俺

だったら眉間の皺やら何やらで秘めた思いやら感情が露見してしまう所である。一切動くことの無い表情のまま、俺は業務的な連絡と謝罪を重ねる。先に謝っておくことで後から責められる可能性を少しでも減らす高等テクニックを喰らえ！……いや、高等でも無いな。小学生でも割と思いつく様なことだ。

だが俺の発言を聞いた局長は驚いた様に、その形の良い眉をピクリと上げた。

そして恐らくは自室にあるのだろう椅子の背もたれへともたれ掛かりながら、意外そうに笑う。

な、なんだ。まさかこのクローン表情筋を突破して俺の本意を察知したとでも言うのか……！

『恨み言の一つでも言われると思っていたのだがね。君は他の兄弟達とは違ってはっきりとした自意識やら感情を持っているのだろう？無茶な任務を押し付けた私に対して、何も思う事はないと？模範的な調整官だな、亜門調整官は。

君の送信してくれた戦闘ログによれば、何でもレジスタンスからの勧誘を受けたらしいじゃ無いか。こき使われる生活から逃れようとは思わなかったのかね？ん？』

面白い様な物を見るような目で俺を見る局長に、俺は心の中で冷や汗を一つ流す。

はっきりと真意を悟られているという訳では無さそうだが、これは不味い流れだ。この腹黒ロリの気分一つで俺は何処か遠くの異界で永久労働に勤しむ未来もあり得る。少し反抗しないと逆に疑われるとか、分かるわけ無いだろ！

おかしい。百合ゲーに転生した筈なのに俺だけ別ゲーをやらされているような気がする。

いや、待て。此処は此れでいこう。『ぼくくろーんだから難しいことわかんない』戦法だ。生まれて１０年も経ってないんだからあながち間違ってもいない。適当な法律を盾に『此れにこう書いてあるから……』と純粋クローン少年を装うのだ！

この腹黒ロリが国を裏から牛耳っているとは言え、あくまで表の立

場は一省庁の部署の長だ。法に従順な態度を見せるクローンを裁くのは体裁が悪かろう。俺は自分で言うのも何だが、割と悪い意味で有名なクローンだ。人知れず葬るという手段は取れない……と、信じたい。魔神のなんか凄い力でどうにかしてしまいそうなのが怖い。

「局長。私は法務省異能調整局の調整官です。」

俺はハイライトの死んだ目を精一杯純粋に見えるように努力しつつ、ホログラムとして空間に投射された局長の真紅の眼を見つめる。

「私が何者であるかを、私は知りません。何故他の同胞に芽生えなかった感情が、自意識が備わっているのかも分かりません。ですが、一つだけ。一つの肩書きに於いてのみ私は自身を定義できます。」

崩壊した暗金街の区画を朝日が赤く照らし出す中、静寂だけが此処を包み込む。局長は無言で俺の話へと耳を傾けていた。

「《新国家公務員法　第九十六条　1項。すべての職員は勤勉なる奉仕者として国家の利益のために勤務し、

且つ、職務の遂行に当たっては、全力を挙げてこれに専念しなければならない。》

私はこの国に奉仕する公務員です。そうあれかしと定められ、そう有るべしと望まれました。此れが私にとっての存在意義（レゾンデートル）である以上、如何に私の身体へと負担を齎す職務であろうとそれが国家の利益となるならば。私は全力を挙げてそれに取り組むまでです。」

そう言い終えれば口をつぐみ、局長の返答を待つ。赫赫たる日の出の光がホログラムの光を打ち消し、その顔が如何様な表情に染まっているのかを知る術はない。

……なんか輪郭プルプル震えてね？踏んじゃったか？なんか地雷踏んじゃったか？

逆光になったシルエットが小さく震えているのを見た俺は背中を冷や汗が伝うのを感じる。もしもこのロリを本気でキレさせたのならば俺に明日は無い。

たっぷり10秒ほど静寂の時間が流れ、俺が現実逃避気味に辞世の句を考え始めた辺りで漸く虫が鳴く様な声がホログラムより響いた。

『……な、成る程。うん。国家の奉仕者ね。うん……へへへ……。

良くやった、亜門調整官！異能調整局に帰還後適切なメンテナンスを受ける様に！腕の紋様なんて気にしなくて良いぞ！何回でも刻んでやるからな！』

言うが早いか通信は断ち切られ、空中に投影されていた少女の虚像は消え失せる。

一瞬だけ見えたその顔が赤く染まっている様に見えたが、朝日の影響だろう。余りにも唐突な終了に俺は一瞬呆気に取られるが、どうやら窮地は脱した様だ。やっぱり魔神と人間じゃ思考回路が隔絶しているらしい。何考えてるのかさっぱり分からん。

「あ、朱羽調整官！今そっちに行くから待っててくれよ！オラっ！退けこの三等市民共！検挙するぞ！」

緊張状態を脱した事による反動で薄れる意識の中、聴き慣れた声が耳朶を揺らす。その方向を見れば、ちんまりとした人影が集まり始めた野次馬をかき分けながら此方へと走ってくる所だった。

パンツスーツに包まれた脚を必死に動かしながら走り寄るこの世界で唯一と言っても過言では無い友人を見ながら、俺の意識は薄れゆく。全く、早くこんな世界から逃げるのが待ち遠しい。全ての苦難はそれまでの辛抱だ。

新たなる決意の中、俺の意識は気絶の暗闇へと呑まれるのだった。

◆

「ふふふふふふふー♪」

アメリカ合衆国のホワイトハウス、イギリスのダウニング一〇番街、ロシアのクレムリン。

かつては地球の政治の中心だった此れらの地だが、今やこの世界の中心は極東のとあるビルへとその位置を移しつつあった。

『官邸』とだけ呼ばれる、天を突かんとばかりに聳えるそのビルの最上階。

この国の中心を見渡す事が可能な、正にこの国の真の支配者たる彼女に相応しい部屋に備え付けられた、天蓋付きのベッドの上で鼻歌と

共に悶える少女が一人。
その魔性の美貌をだらしのない笑みの形へと歪め、その小さな体躯で枕を抱きしめながらゴロゴロと転がるその姿はとてもこの国を影から支配し、楽園を謳う灰色の鳥籠へと作り替えた存在とは思えなかった。
魔神たる彼女の本性を知る者がこの場に居れば、恐らく驚きの余り目を剥いた事は間違いないであろうその光景。
ひとしきりゴロゴロと悶えた後、その美しい金髪を放射状にベッドへと投げ出したままにベッドの天蓋を眺めながら先程の余韻に浸る少女は、未だにその顔を至福の笑顔へと固定したままであった。
この国を支配し凡ゆる権力基盤に根を張る彼女にとって、先程の彼女が寵愛を注ぐ男からの発言は告白に等しい物であった。
あの美しき死の化身は、一体天使の力に何処まで拮抗できるのかと期待して送り出してみれば、結果は想像以上。
凄まじい戦闘センスとその身体への犠牲を顧みない戦法は健在であり、己と同じ領域の埒外の力に対し、全身をサイバネティクス化しているとは言え、彼女の想定を出ないスペックしか持ち得ない彼は終始相手を圧倒していた。
本当に、彼はどこまで己を疼かせれば気が済むのだろうか。
ベッドから起き上がり、すらりと伸びた薬指に嵌めた金剛石が煌めく指輪へと彼女はそっと触れ、静かに囁く。
「冠するセフィラは王冠(Keter)。『エヘイエー』、具現化。」
バサリ。彼女の形の良い肩甲骨から一瞬にして伸びるは純白の両翼。
かつて、この星で開いた異界の門より落ちたとされる魔神の遺骸。それは11の欠片へと分たれ、世界中に散逸したとされる遺物達。
それを全て揃えたならば、その者は神にも等しい権能を手に入れる事が出来ると言う。まぁ同じ魔神たる彼女にとってはそれはどうでも良い事だ。
己が偶々手に入れたセフィラに相対するセフィラをレジスタンス勢力が手に入れようが、この世界においての自身が滅ぼされようが、

彼女にとっては悠久の生の中でのほんの瞬き程度の出来事に過ぎない。

だが、この世界で『彼』を見出してしまった今では話が変わってくる。

彼女が『彼』と永遠に過ごせる様に。悠久の世界へと招待する為に。はたまた、彼の一撃へと真なる意味で己の悠久の生を刈り取る力を与える為に。さてさて、随分とこの世界も楽しくなってきた。

純白の翼を美しく朝日に煌めかせ、初めて抱く感情に心を燃やす魔神はその顔を再び至福の笑みへと転じさせるのであった。

【幕間】　不死鳥の朝

赫羽焔（あかはねほむら）の朝は特段早いという訳でも無い。

まぁ彼女の年齢を考慮すればそれも致し方ないのだが、低血圧という体質も合わさって非常に彼女にとっての朝は辛い物となっていた。

「ふぁ…ぁ……」

ファンシーなキャラクターがプリントされたパジャマを纏った手で、法務省の上級スタッフに支給されるホログラムデバイスへと触れる。

彼女の指紋を読み取り、天秤の背後に配置された交差する剣のエンブレムが一瞬回転すれば、虚空へと映し出されるデジタル時計。

８：３０という時間を見て、人々が抱く感想は多々あるだろう。

だが本日が平日であり、更に言えば彼女が国家機関の一つを任されている公務員となれば必然的に『遅刻』という単語が踊る訳なのである。

だが、寝起きのぽやぽやとした彼女の頭にはそんな単語は浮かんで来なかった様だ。

いつもは勝ち気に吊り上げられた眦はとろりと垂れ下がり、ツインテールに結ばれている彼女のトレードマークとも言える真紅の髪は、見事に前衛的なアートを寝癖という形で表現している。今の彼女を見て『狂乱の不死鳥』という二つ名を連想する人間は居ないだろう。

ゆっくりと上体を起こし、東京の街を俯瞰できる大窓へと掛けられたシャッターから覗く朝日に眩しげな表情を浮かべる。

自身の体温が残る毛布を名残惜しげに離脱すれば、ベッドの端へと腰掛ける。

未だに彼女の脳はふわふわとした眠りの名残に取り残されており、シャッターを開けるという考えすらも上がってこない様だ。

その美しい真紅の髪を肩に流し、普段はきりりと引き締められた顔を眠たげに擦る焔。

彼女が自力で再起動を果たし、朝の活動へと移行する迄には悠久の時が必要なのではないかと思われた頃、コンコンコンと彼女のドアを

ノックする音が部屋へと響き渡る。
「課長ー？赫羽課長ー？起きておられますかー？」
半分閉じられた瞼から覗く赤い眼がドアを見やれば、聞こえてくる溌剌とした声。
だが、未だに覚醒していない彼女の口からは意味のある言葉が発せられる事はない。よしんば彼女が意味のある言葉だと思っていたとしても、寝ぼけた彼女はそれを言語としての形で話す事は出来ないだろう。
「入りますよー？失礼しまーす……」
カチャリとドアが開けられる音と共に、壁に備え付けられた端末が操作される微かな電子音。
それと共に、この閉ざされた部屋へと太陽の光が漸く招き入れられる事となった。
陽の光を浴びた吸血鬼が如く声にならない呻き声をあげる彼女へと、呆れた様な顔で歩み寄る少女。
その全身を法務省の制服で一分の乱れもなくかっちりと包み、太陽の光を眩しく反射する銀髪を綺麗に整えヘアゴムで一括りにまとめた少女は、不遜にも夢の続きへと参らんとする少女の華奢な肩を軽く揺する事で強制的に覚醒へと導こうとするも、未だにその眼はとろんとした眠気を隠そうともしない。
「全く……起きてください、課長！朝ですよ！」
毛布で熟成された焔の体温が未だに残るパジャマの背中へと少女が指を向ければ、ふわりと踊るダイヤモンドダスト。一瞬で空気の熱を奪う事で発生した一陣の冷風が彼女の背中を一撫でし、そのぽわぽわとした頭へとダイレクトに冷たさを伝える。
それは焔の頭の中で張った眠気のベールを一瞬にして剥ぎ取り、彼女を突然の刺激への驚愕と共に完全に覚醒させるには十分な冷気であった。
「ぴゃっ！」
珍妙な声を上げ、その赤い眼を見開きながら軽く飛び上がる焔を笑顔で見やる少女へと、焔は何かを責める様な目で見つめる。

「……おはよう、氷峰（ひょうみね）。随分な起こし方じゃない。」
「おはようございます、課長。しかし此処までしないと大抵の場合お起きになられないので……」
氷峰と呼ばれた少女は、その細い指を頬に添えながら申し訳なさそうに笑う。
それを尻目に大きな欠伸を一つした焔はベッドからゆっくり降り、フローリングの床へとその幼さを感じさせる細い脚を下ろす。
夜の間に冷えた床の感触に身震いをしながら、彼女がペタペタと素足が床と触れ合う音を響かせながら向かうは台所。
「氷峰ー、貴女もう朝ご飯は食べたの？」
「いえ、職務の途中に栄養食（タブレット）で済ませようかと。」
制服の胸ポケットから取り出された、葡萄のイラストが描かれた小さなケースをカラカラと振る彼女へと背を向けながら、焔はその小さな身体を精一杯伸ばす。戸棚から取り出されるはフライパン。上級スタッフの部屋という事もあり、彼女は食用３Ｄプリンターだけではなく『調理』用の機器の付いたキッチンを支給されている。
冷蔵庫のドアを開け、慎重な手つきで取り出された物を見て銀髪の少女は軽く息を呑んだ。
その手に握られていたのは二つの形の良い卵。殻に刻印された『甲金フーズ・プレミアム』の金文字が物語る事が本当だとすれば、この卵は同質量の黄金と同じ価値を持つだろう。
大抵の食物がクローン技術と高度に発達したプリンター技術によって埋め尽くされた今、完全なる天然物の食材というのは一部の特権階級の食す珍味と化している。
如何に法務省異能調整局最強の異能保持者を謳われる彼女とて、食費に此処まで金を割ける程に湯水の様に金を使えるわけでは無い。では一体、と首を傾げる氷峰に年相応の得意げな表情を浮かべながら焔がフライパンをＩＨヒーターの上へと安置する。
「農林水産省の奴等よ。前にアフリカでの強制緑化措置に補助要員として参加した時、現地の異能保持者を執行してあげた御礼だって言って幾つか送ってきたのよ。流石にハムは培養肉使うけど、目玉焼き

作ってあげる。一切私の懐は痛んじゃ居ないんだから食べていきなさい。」
成る程、と合点がいったように頷く氷峰。確かに日本の、いや。いまや世界の食糧事情を左右できる機関たる彼等ならば天然の卵をほいほいと配る事も可能だろう。だが、そうすれば他の疑問が頭をよぎる。
「あのー、課長？」
「何よ？」
「料理、出来るんですか？」
フライパンを見てみれば、凹みなども見当たらぬ新品同然の品物。氷峰は実家で多少の調理の経験があるが、目の前の少女に調理の経験はあるのだろうか。
ぱちくりとその赤い眼を瞬かせ、ふむ。と腕を組み考え込む焔。
数秒の沈黙の後、笑顔で顔を上げた彼女は指先に小さな炎を灯しながら答える。
「何かよくわからないけど、目玉『焼き』なんだからいっぱい焼けば良いんでしょ？」
「課長は着替えてください！調理は経験が有るので私がキッチンに立ちます！」
暫くは抵抗の姿勢を向けた焔であったがそもそも卵の殻を割れるのかという根本的な問題が浮上し、渋々とクローゼットのある部屋へと向かう事となった。
それから数分後。白磁の皿に乗せられ、配膳される黄金の煌めきを太陽光に反射させる卵の黄身を薄く白身で覆った卵の下にはカリカリに焼き上げられたハム。横には焼かれた薄い黄緑のパンが添えられ、見る者の食欲を誘う香りを周囲へと撒き散らしていた。
小柄な彼女専用に設られた法務省の制服に身を包み、その眼をキラキラと輝かせる焔がフォークを握りしめながら氷峰へと羨望の眼差しを向ける。
「氷峰調整官。」
「はい、なんでしょう。」

「課長命令よ。いつか私に料理を教える様に」
少し自慢げに胸を張る少女へと振られる無邪気な命令。クスリと笑った氷峰は恭しく頭を下げる。
「氷峰調整官、謹んで拝命致します！」
和やかに法務省異能調整官達の朝餉が始まる。
朝日が照らし出すビル群を縫う様に舞うドローンと、今日も今日とて仕事へと向かう為に交通機関へと乗り込む無数の三等市民達。
彼等が一生口にする事のない様なご馳走を口にしながら、彼女達は談笑する。嗚呼、今日は良い一日になりそうだ。明日も、明後日も。永遠に繁栄は陰る事なく、理想郷は美しく栄える事だろう。氷結地獄と狂乱の不死鳥の朝はゆるりと過ぎていくのだった。

結局共々遅刻したのだが、異常なまでに上機嫌な局長からのお咎めは無かった。
この後幸せな気分で執務室へと向かった彼女を、ＪＤＡＣＳが送信した凄まじい量の書類が待ち受けていることを彼女は知る由もない。

義体―死の巡礼
第九話　イレギュラー

魔神。神にも等しい権能を持ちながら、神と言うには余りにも悪辣で享楽的。
物質的な世界を超越し、彼方の概念的な世界よりその触腕を伸ばす彼等は久遠に近い時を生きる。
本に描かれた登場人物が読み手を傷つける事が不可能である様に、彼等は大抵の武器では傷をつける事も叶わず、そして多くの場合において【分け身】と呼ばれる自らの分身を通して活動する為に、仮にその世界にいる魔神を討伐したとしても次元の果てにて鎮座する魔神の本体には何ら痛痒を及ぼさない。
だが、彼等は不死ではない。確かに彼等に与えられた時間は宇宙を3度繰り返したとしても余りある物ではあるが、それは彼等に死が存在しないと言うことでは無い。
強大な力と無限に等しい寿命を持つ彼等にもしっかりと死神はその黒い外套の裾を翻し、彼の持つ死を届けに訪れる。
その死因は様々だ。退屈という致死の毒に蝕まれて自害を選ぶ者も居れば、とある世界にちょっかいを掛けたが故に、億千の刃に切り刻まれて死んだ者だっている。確かに彼等は強大だが、無数の世界の中で最強というわけでも無いのだ。
そして、今からこの物語で触れる魔神の死因は一風変わったものだった。
即ち、同士討ち。魔神と魔神の小競り合いこそ存在するものの、どちらかが死ぬまでの殺し合いは非常に珍しいケースだった。
しかし彼女が己の同胞と刃を交えようとした理由は今や、積み重ねられた久遠の時間によって埋没してしまった。今に残るのはその闘争の結果のみ。無数の宇宙を二柱の魔神が駆け抜けた末に迎えた決着は、彼女の敗北であった。
勝者となった魔神は彼女の肉体をバラバラに引き裂き、辺境の世界

へと放逐したと伝えられる。
そして、その未曾有の魔神同士の闘争から幾星霜。分たれた『彼女』の一つが、新しい物語を紡がんとしていた。

◆

路地に響くその足音を聞く者は今や、物言わぬ存在へと変貌していた。
暗く澱んだその場所に似つかわしく無い銀の像が五つ。其れ等はまるで芸術の神が手ずから彫り上げたかの様な驚嘆すべき写実性を湛えており、路地に設置された寂れたバーの蛍光看板が投げかける僅かな光を反射しながら美しい煌めきを振り撒く。
その像は皆一様にこの国において三等市民へと配給される服へと身を包んでおり、その布の波や膨らみもまた驚異的な写実性を持っていた。
皺の一本まで彫り込まれた顔はまるで何か信じられない物を見たかの様に恐怖へと歪んでおり、仮にこれを手がけた芸術家がいるのであれば相当に精神が捻じ曲がって居ると言わざるを得ないだろう。
彼等は逃げる様な体勢を取り、今にも走り出さんとする様な躍動感を見る者へと与える。そしてその身を構築する美しき銀と像の人物達が身につけて居る質素な服とのアンバランスさや、恐怖を雄弁に主張する写実的に過ぎる顔も相まって一流の評論家をも唸らせる芸術性を内包していた。
だが、此処は決して美術館では無い。東京の廃棄された区画にて栄える幾つかの闇市場の一角。間違ってもこの様な芸術品が鎮座して良い場所では無かった。
「うーん……急に取り囲んできたから応戦しましたけども、あっさりと倒せましたわね……？
何だったのでしょう、あの殿方達は。」
しかし、彼女もまた此処に似つかわしく無い存在であろう。
緩く巻かれた紫水晶の輝きを放つその髪を背中の半ばまで伸ばし、

白百合の美貌は硝子細工の様な儚さを彼女へと与えていた。
その少女らしい全身を時代錯誤なドレスへと包み、すらりと伸びた手が握るは白銀の弓。
まるで上流階級の家から抜け出してきたかの様なその出立ちに、何気ない所作から滲み出る上品さ。其れら全てが、この少女が間違いなくこの場に居て良い存在では無いと物語っていた。
彼女は徐に、美しい月の意匠が彫り込まれた弓を何でもないかの様に投げ捨てる。その余りにも無頓着な仕草ですら、計算され尽くした踊り子の舞いであるかの様に美しさを振り撒き、ごみごみとした路地裏がまるで厳かな神殿であるかの様な清廉さを放つ。
地面へと落下したその弓は魔法が解けたかの様に黒ずんだ一本の鉄パイプへと変貌し、カランという音を路地裏へと響かせた。
「それで……私は誰なのでしょう？」
ポツリと漏れた彼女の疑問へと答える者は誰も居ない。
だが、その光景を遠く離れた地より観測する二組の目が存在していた。
「ねぇ、マモちゃん。私、夢見てるのかな？」
「その言い方は止め給えよ、エリザ。だが私も同じ感想だ。」
磨かれた黒檀のテーブルの上に浮かぶは、切り取られた空間の一面とでも表現すべき存在。
物理法則を無視してテーブルから数十ｃｍ余り浮かび上がり、何処かの風景を映し出すソレを覗き込む二つの人影はその端正な顔立ちを驚愕に染めていた。
「あれ、魔神だよね？凄い分割されて滅茶苦茶に繋げられてるけど、見間違えようが無いよ?!」
金色の後ろ髪を二つに結い、所謂ツーサイドアップの髪型へと整えた少女は黒と赤のフリルに覆われた袖をブンブンと振り回しながら隣に座る少女へと語りかける。
「ふむ……【分け身】では無いね。だが、其れにしては余りにも貧弱だ。更に言えば、私は此方に来てからこの世界に侵入した魔神を確認していない。詰まりは、アレは我々が此方へと降臨する前に降り立った魔

神ということになるね。」
藍色の詰襟を身につけもう片方の少女と同じ輝きを放つ金髪を背中に流しながら、考え込む様に指を顎へと触れさせる少女が虚空へともう片方の手を振るえば、大量の文字が空間へと溢れ出す。
大凡常人には読み解く事が不可能な量の文字を一瞥しただけで読み解いた少女は、未だ興奮冷めやらぬと言った様相を呈すエリザと呼ばれた少女へと顔を向ける。
「君の【分け身】はこの事態に気付いてるのかな？」
「んー、記憶とかも消してるし、探知能力とかを大分カットしてるから難しいね。この光景は見えてるだろうけど、魔神とは認識できないはず。流石に【分け身】の【分け身】は劣化するよぉ！」
「『縛りプレイ』の弊害だねぇ。だけど私の方が使える駒が少ないんだ。それくらいのハンデは良いだろう？」
エリザが指を鳴らせば、虚空から滲み出る様に現れるチェスボード。
その上には二つのキングと幾つかの駒だけが並び、閑散とした盤上となっていた。黒い駒はキング、クイーン、ビショップ、ルーク、そしてポーンが一つずつしか無いのに対して赤い駒はその２倍程の数を揃えており、戦力格差は歴然であった。
そしてその奇妙なチェスボードの上に、白色のキングが現れる。
其れは両軍の丁度中間地点に置かれ、駒の頭上へと白銀の文字で『Ｎｅｗ　ｐｌａｙｅｒ』の字が鮮やかに描かれた。
「『アレ』を新しいプレイヤーにするの？どう考えても私達みたいに駒を指せるとは思えないけどなー。魔神としての視点とかはもう持ってないでしょ。私の【分け身】みたいな感じで。」
「例えそうだとしても、盤上へと上がる権利は与えてあげないといけないだろう？其れに、イレギュラーという物はどうしようもなく心躍るものさ。」
「今回のゲームにはもうポーンが居るでしょ？あれ以上のイレギュラーは見た事ないよ。」
エリザの呆れた様な声に、少女――――アマイモンはその顔をぐるり

と声の方へと向ける。
「あげないからね？」
「とらないです……。というか、マモちゃんがあれだけ入れ込んでるのに横取りなんて出来ないよ。」
その返答に満足気に頷けばアマイモンはチェスボードへとその手を伸ばし、黒いポーンを細い少女らしい指で愛おしそうに摘む。
その顔を幼さと妖艶さが入り混じった笑みに染めながら、彼女はチェスボードの上で鎮座する黒いクイーンをもう片方の手で撫でるとエリザへとポーンを挟んだ2本の指を向けた。
「娘を作ってみたときもそれなりの感慨を抱いたけど、彼の物とは比べ物にならない。
あぁ……信じられるかい？クローンなんだよ、彼は。量産品で、消耗品で、無力な筈のクローンなんだ！うんざりするくらいに既知のスペックで、蟻みたいな力しか持たない！その彼がどれだけの未知を私に齎した事か！」
「出た、マモちゃんの無能無敗オタク。うちのビショップみたいな事言ってるよ……」
「その話詳しく。」
二柱の魔神の夜は姦しく過ぎていく。舞台へと突然現れた闖入者を受け入れ、其々の思惑と享楽の為に彼女達は今日もゲームを続ける。このゲームの行方は、彼女達にすら分からない。

◆

「余剰次元ソナーに感あり！日本のクソッタレ農林水産省だ！」
煌々と大地を照らし出す太陽の元、その声に弾かれる様に銃座へと駆け寄る兵士達。
彼等の装備や纏う服には統一性が無く、近代的な銃を構える者が居れば、最早骨董品とでも言える一つ前の大戦の銃器を構える者すら居る始末だ。
それもその筈、彼等は一つの国家の兵士では無く、それどころかつ

い最近まで一般人だった者まで居る。
だが、如何に服装や装備が違えども掲げる目標は一つ。それはこの大陸を守り抜く事。
彼等が立て篭もる要塞を、水へとミルクを一滴落とした様に白い膜が包み込む。大戦中に日本が開発した指向性エネルギーアストラル防壁（Directed Energy Astral Barrier）、通称『Ｄｅａｂ』と呼ばれるソレが展開したと同時に数十メートル先の空気が揺らぐ。
「今日も農家の連中がおいでなすったぞ！たっぷりおもてなししてやれ！」
その号令を呼び水に要塞の内部へと格納された無数の兵器がその砲身を、電子パルスの走る鋒を、理解し難い作用により周囲の空間を歪ませるミサイルの先端が空間の揺らぎへと向けられた。
日本が突如としてアフリカへと進軍を開始して１ヶ月。瞬く間に中間部までを占領した彼等は農林水産省を名乗り、人間が居ようが建物があろうが関係無いと言わんばかりに目の付く所を『畑』へと作り替え始めたのだった。
一瞬にしてビルの立ち並ぶ都市は破壊され異常な速さで風化し、無数の画一的な容貌のクローン達によって畑へと作り替えられる。そして収穫された野菜達は何処かへと運搬されるのだ。
逃げ遅れた人間……否、逃げ遅れた生命体はその身を節くれだった木へと変貌させる。それはまるでアポロンから逃れんとその身を月桂樹へと転じさせたニンフの様であったが、自発的なものか強制的なものかと言う点において大きく両者には隔たりがあった。
この要塞は国を追われた人々で構成された防衛拠点の一つ。今や、国というしがらみを捨てざるを得なくなった彼等は大陸という大きな枠組みで日本という巨大な勢力へと抵抗を試みていた。
要塞に走る緊張を破ったのは他でも無いその歪みより現れた一人の人物だった。その長身を黒い軍服で包み、長く伸びた黒髪を軍帽の下へと押し込んだその女性は、まるで庭を散歩する様な足取りで要塞へと歩み寄りながら大声で叫ぶ。
「初めましてだな！兵士諸君！私は農林水産省、日本国防軍の合同作

戦において国防軍を代表して此処に来た蕪木(かぶらぎ)中佐と言う！君達と話がしたい！」
　面食らった兵士達は顔を見合わせる。今まで彼等が此方へとコンタクトを取ってきた事は一度も無かったからだ。
　降伏の使者を出そうが、あらゆる周波数で呼びかけようが、彼等は淡々とこの地を緑化し続けていた。今になって一体どういう風の吹き回しだというのだろうか。
「どうする？」
「どうするも何もあったもんかよ、どうせ罠だ。精神操作系の異能保持者を使者に見せかけて送り込み、占領する。ありがちな手段だ。」
「いや、この要塞は異能を通さない。日本のレジスタンスから購入した『Ｄｅａｂ』を配備したばかりだろう？」
指向性エネルギーアストラル防壁（Directed Energy Astral barrier）、通称『Ｄｅａｂ』。
　異能保持者の異能を相殺し、その能力をベールの内側へと通さない対異能保持者の最大防御兵器。何処からかこれを入手したレジスタンスから購入した金額で小国が一つ買えるほどの高価な装置は、最近の農林水産省の襲撃において遺憾無くその効果を発揮していた。
「此方はアフリカ大陸守備軍！そこで止まらなければ発砲する！」
　メガホンを取り、要塞の内部から話しかけるはこの要塞の責任者。その声に隠しきれない憎悪を込め、尚も此方へと歩みを止めない軍服の女へと警告を発する。すると、彼女は驚いた様な顔をして立ち止まる。
「やぁ、申し訳ない！まさか返答してくれるとは思わなくてね！了解した、此処から動くまい！」
　腕を組み、邪気のない笑顔を浮かべながら太陽がキツく照りつける中で仁王立ちする彼女を、狂人でも見たかのような素振りで見つめる兵士達。メガホンを持つ将校も、その顔を怪訝そうにしながら話しかける。
「何の用だ、日本人！今からとっととこの大陸から出て行くという話か！」
「む、済まないがその話では無いな！」

女は軍服の裾を熱風にはためかせながら、カラカラと腕を組んで笑う。そして次いで投げられた言葉は衝撃的な物だった。
「私は此処から君達に立ち退いてほしいという話をしに来たのだ！無論君達の生命は保証するし、その後の人生の面倒も我々が責任をもって見よう！飢えも苦しみも無い人生を確約する！」
兵士達は呆れた様な、憤怒が抑えきれない様な顔で手にした其々の獲物を握りしめる。
舐めているのか、この女は。一人でのこのことやって来て、退けだと？此処が誰の土地だと思っているのだ。我々が、我々の先祖が勝ち取り、文化を育み、栄んとしてきたこの地から出て行け？
ふざけている。もしくは舐め腐っている。どちらにせよ、返答は一つだけだ。
「一昨日きやがれ！」
それと同時に要塞からハリネズミの様に突き出した銃口より、無数の閃光と鉛玉が彼女へと押し寄せる。
明らかに過剰戦力な其れらは、言外に兵士達の怒りを示していた。一瞬後に物言わぬ肉塊となる女を、その場にいる全員が幻視した。だが――――
「残念だ！だが、君達がこの地を愛するのと同じように私も私の国を愛している！
私が武器を取り、この力を振るったその日から！」
チャキリ、といつの間にやら彼女の手に握られていたのは一振りの日本刀。鯉口を切る音と共に覗く刀身の煌めきがアフリカの日差しを反射し、持ち主の目元を美しく照らし出す。
「私にはこの国を理想郷にする義務がある!!!」
彼女の口元が笑い――――刹那、白銀の暴風が吹き荒れた。
その日、一つの要塞と其れが守っていた区画が地図から消えた。派遣された人員は一名。また一つ、大陸が緑へと染まっていったのだった。

第十話　化け物

カチリ、という音が俺の左腕から響く。骨を直接触られているような感触を最後に左腕の感覚が消失する。

日本武装病院の地下。薄暗い部屋を無数の配線とパイプが這い回り、天井から伸びた機械の触腕の一つが俺の腹へと針を差し込み、もう一つは俺の肉体の『作り物』の部分を分離させんとその機構を駆動させていた。

『腹部裂傷の縫合を完了。同時に左腕、戦闘支援義手【金神】の分離を完了しました。体調に問題は有りますか？朱羽亜門調整官。』

「いや、何も無い。しかし、こうして見ると右手だけ残っていると言うのもアンバランスだな。」

『切除致しましょうか？大東亜工業から既に右腕の義手の作成の申し出が来ていますが。』

物騒な提案を無感情な声色に乗せて発するＡｉに無言で首を振る。

軍事特需によって大企業へと変貌した大東亜工業は俺の義体をオーダーメイドで製作してくれた企業ではあるが、その為に残った右腕を手放そうとは思わない。

大体、彼処は変態の巣窟なのだ。パイルバンカーの様な浪漫に極振りした兵装を義体に大量に組み込んで来ている以上、新しく制作するという右腕の義手も相当なものだろう。ロケットパンチでも仕込まれてるんじゃなかろうか。

「メンテの方を続けてくれ。遠路はるばる来てくれた友人を待たせている。」

『了解。右脚【歳殺】、左脚【歳破】、左腕【金神】のメンテナンスを開始します。』

前世の世界の歯医者にでも置いてあるような椅子の背もたれが倒れ、俺の身体を地面に平行に横たえる。視界の端では鈍く黒光りする俺の四肢達へと機械のアームが伸び、表面の装甲が外されている所であった。

其れを意識の外へと追いやり、俺の顕になった上半身へと電極を貼

り付けられる感触の擽ったさを堪える事に意識を向ける。頭上からはドリルの様な物が機械の腕の先端に取り付けられ、俺の首へと向かおうと駆動音を響かせていた。
『消費したナノマシンの補填、及び人工筋繊維のメンテナンスも同時並行で行います。完全没入型有機義体への転送を開始してもよろしいですか？』
「ああ。……今度はどの機体だ？」
『少女型であったかと。同期開始、３、２、１――――良い休暇を、朱羽亜門調整官』
その声を最後にパチン、と白黒テレビの電源を落としたかの様に俺の視界に広がる光景は消え去り、世界は黒へと満たされる。氷の様に冷たい様な、業火で焼き尽くされて居る様な感触が俺の首へと走り、ゆっくりと沈み込む様に全身から五感が消え去った。
全身の感覚が無いままに、黒色で埋め尽くされた空間を漂う経験というのはあまり愉快な物では無い。胎内回帰とは正反対の、生命としての根源的な恐怖を煽ってくるのだ。まぁ、死に慣れている俺からしたら『嫌だなー』程度の物でしか無いのだが。
『ご機嫌よう、朱羽亜門調整官。最後の使用は１８６時間２８分３２秒前です。ログインを開始しますか？』
【Ｙｅｓ】
『ログイン資格を確認……ようこそ、日本武装医師会へ』
真っ黒な世界に突如として浮かぶ、日本武装医師会のロゴマーク。白い十字架と燃え盛る弾丸の意匠だけが、この黒い世界で唯一の色彩だった。
モノクロが支配する世界に響くは先程まで会話していた声とは違う男性の声を思わせる合成音。身体も無く、意識だけが漠然と浮かぶ俺が肯定の意を示した瞬間、モノクロの世界へと七色の光が侵入した。
それは色彩の雪崩と化し俺の全身を包み込むと同時に、意識しかない俺という剥き出しの存在へと纏わり付き、ゆっくりと俺の身体を引き上げる。

優しく包まれお湯の中から抱き上げられたかの様な感触と、勢いよく上方へと引き寄せられる感覚。其れ等に身を委ね、上昇する俺の視界を純白の極光が覆い尽くした。

最初に感じたのは寒さだった。

再び取り戻した肉体の感覚は俺が閉鎖空間にいる事を示しており、ゆっくりと瞼を開けば眼前に広がる霜の降りたガラス窓。極寒の空気に満たされた乳白色の近未来的なポッドの中で、俺はまるでエジプトのファラオのミイラの様に手を交差させて横たわっていた。骨に染みる寒さから一刻も早く逃れる為に交差させた手を解き、コンコンとポッドに備え付けられた覗き窓を叩く。

『おはようございます、朱羽亜門調整官。意識の混濁はありませんか？』

「頗る快調だ。中佐は？」

『花夜室長と共にエントランスでお待ちです。お急ぎになられた方が宜しいかと。花夜室長は既に私に１６回、調整官の安否について問い合わせています。』

炭酸飲料を開けた様な音と共に冷やされた空気が霧としてポッドから漏れ、白い清潔感のある床へと流れていく。

乳白色の棺桶は音もなく滑らかに開き、ポッドの淵を掴んで上体を起こせば、さらりと剥き出しの背中に流れる髪の感触。普段の俺の古傷まみれの指とは似ても似つかぬ白い指に、しっかりと存在を主張する左腕と両脚。

両手を握りしめて感触を確かめながら、ゆっくりとポッドから立ち上がる。

まるで数日間同じ体勢で寝ていた様な痛みを節々が訴えるのを無視しつつ、俺は同じ様なポッドが数十個並ぶ部屋の中で伸びをする。ポキポキという小気味の良い音が全身から響くのを聞きながら、その俺の物では無いしなやかな身体を慣らしていく。

右手、左手、背筋、腰と順番に解し、一糸纏わぬままに俺は歩を進める。

いや、別に俺が変態という訳では無いのだ。この身体に性を特定で

きる一切の器官は付属していない。それはこの身体の設計理念に関係ない物だからな。出口付近に架けられた法務省の制服を身に纏い、ヘアゴムで髪を一本に結んで背中へと流す。さて、身支度は終わりだ。久々の『友人』達との交流を楽しむとしよう。

◆

「だ、か、ら！本当に朱羽調整官は無事なんだろうね！」

『朱羽調整官についての情報はセキュリティクリアランス・Ａｌｐｈａにて封鎖されております。ご理解頂けると幸いです。』

日本武装医師会。大戦中の日本で高まった、『凡ゆる組織は自らを護る力を保持すべし』という思想に従い武装した組織の一つであり色々と後ろ暗い噂の絶えぬ組織でもあったが、医療という本分を捨てた訳では無かった。

その証として、白く広いエントランスは多くの患者でごった返し、上空に浮かぶホログラムは診察の順番が回ってきた患者の番号を示していた。

だが、医師達の腰に揺れる拳銃の異質さがその全てを塗り潰す。

白い和紙に一滴だけ落とされた墨のように、白衣の腰に備え付けられたホルスターに収まる黒光りする銃。

だが其れを誰も気にする事なく当たり前の事として世界が回っていく様子は、此れこそが『正常』な事であると饒舌に語っているようでもあった。

そんな『正常』なエントランスに立ち並ぶ数十のカウンターにて、半透明のホログラムへと少女が怒気を上げていた。

今朝の任務にてレジスタンスの未確認兵器と目される物品を装備した二名の異能保持者と衝突、更にレジスタンスから派遣されたＰｅｏｐｌｅ ｏｆ Ｉｎｔｅｒｅｓｔ Ｐｏｏｌ ―００２と登録された幹部級のメンバーからの攻撃を受けながらも対象を退けさせた『無能無敗』こと朱羽亜門調整官。

彼に救われたと言っても過言ではない少女、花夜柳（はなよいやなぎ）はかなり……否、非常に責任を感じていた。

彼の持つ『レメゲドン』が二名の異能保持者との交戦中に使用されなかったのは、間違いなく付近で無様にその光景を眺めている事しか出来なかった己の所為だろう。友人を名乗っておきながら、肝心な時に足を引っ張ってしまった事に彼女は自己嫌悪に陥っていた。全身に傷を負い、その義体も著しく損傷していた彼は彼女が呼び寄せた救急ドローンによって付近の武装病院へと搬送されたが、その後の一切の容体が掴めない。焦りを抑えきれない彼女の肩を、白い手袋で覆われた手がポンと叩く。

「落ち着くのだ、花夜殿。我々が騒いだところで医療行為の進展が変わる筈も無し！」

その美しい黒髪を空調の風に靡かせ、見る者を安心させる豪快な笑みを浮かべる彼女の名は蕪木香流（かぶらぎかなれ）。

国防軍の中佐の地位に就く人間であり、過去の大戦において敵勢力が兵器へと転用していた島ほどの大きさの巨大な猪の怪異を一刀の元に切り捨てた功績より『猪狩り』の二つ名を与えられた身体強化系異能の最高峰。

そして今は農林水産省主導の一大プロジェクトに携わる人間であり、現在は休暇にて日本に帰国していた。

その長身を軍服で包み込み、豊満な胸には幾つもの勲章が並ぶ彼女はエントランス内でも注目を集めていたが、彼女が自覚している様子はない。

「それに我が友人たる朱羽がこの程度では死ぬ事は無いと、同じ戦場を駆けた人間として保証しよう！」

花夜を落ち着かせる様に両手を肩に乗せ、優しく摩る彼女は上から顔を覗き込む様に笑う。

その姿はお互いの髪の色も相まって、まるで姉妹であるかの様に他者からの目には映った。戦時中の徴兵でなし崩しに国防軍へと入隊した彼女が、僅かな期間で中佐へと上り詰めたのは彼女の特筆すべき武力以外にも、この包容力が理由なのだろう。

その言葉に冷静さを取り戻した花夜は、付近に備え付けられた椅子へと腰をストンと降ろす。

彼が此処に搬送されてから既に数時間が経過していた。大抵の傷ならば直ぐに完治させてしまう医療水準を誇るこの国だが、いかんせん朱羽亜門というクローンはイレギュラー過ぎた。

そもそも、使い捨てとして想定されているクローンの肉体の治療法などある筈もなく。人間とそっくりにその身を設計されている彼等だが、その実身体を覆う皮膚を剥いで仕舞えばその下は人間とは大きくかけ離れた構造だ。

『生命』としてではなく戦闘を有利に進める為の機能を付与された臓器達に、彼の場合はサイバネティクス化された身体もある。通常の医療手段では彼の治療が為し得ないのは一目瞭然であった。

「うー……大丈夫かなぁ……」

「大丈夫である！朱羽であれば例え頭を吹き飛ばされたとしても、首から下が残っていれば生き残るであろう！所謂『たふがい』という奴だな？花夜殿に貸してもらった本に載っていたぞ！」

「そこまで行ったら多分『化け物』ってカテゴリに入るとボクは思うな……」

座り込み、その小動物然とした顔を暗く翳らせる美少女の隣に腕を組んで佇む美女。

何処となく残念な気配が漂う彼女へと苦笑を浮かべる花夜であったが、直ぐにその笑みは喜びと安堵のものへと変化する。その表情に気づいた香流が彼女の視線を追えば、医師に付き添われながら此方へと歩を進める一人の人物。

少し小柄で、中性的な顔立ちと長く伸びた黒色の髪を一纏めにしたその人物の顔に浮かぶ特有の雰囲気は、例え普段の彼との見た目が変わっていたとしても『友人』を自負する彼女達が見逃す筈も無かった。

一切の感情が欠如しているとすら思わせる無表情に、その濁った瞳。だが、その瞳の奥に確かな感情の炎が灯っている事を彼女達は知っている。ひらりと無表情で手を振る彼――――朱羽亜門に、二人は笑顔で応えたのだった。

◆

「化け物が……」
姉妹の様に連れ立ち、武装病院の玄関から外へと出て行く彼女達の背中を見ながらぼやく一人の医師。彼の手元には、上部に【凍結】の赤い判が押された一束の書類があった。
【イザナミ計画】。人間の身体に備わっていると考えられる『魂』を別の身体へと転送する計画。
とある『金髪の女性』が技術提供を行ったとされるこの計画は、予めクローン技術を用いて作成しておいた有機義体へと魂を転写させ、その肉体の限界が来れば別の身体へ――を繰り返す事で擬似的な不老不死を体現する計画だった。
異界から手に入れた幾つかのサンプル、そして齎された新しい知識によって計画は順調に進み、人の意識を構成する『魂魄』を未だに未理解ではあるが観測し、捕捉する事にも成功した。
転移させる技術も確立させ、後は臨床実験を完了させるだけ。人類初の偉業、不老不死を完遂するかと思われたその実験は――全被験者の発狂という形で幕を閉じた。
魂を捕捉されその身体から引き離されるという未知の感覚は、一切の例外無く人間という生き物の精神構造に『死』を擬似体験させる。出来上がったのは不老不死の技術では無く、廃人を創り出す技術だったという訳だ。
日本武装医師会の威信をかけて行われた計画の破綻に鬱屈とした雰囲気が漂う中、一つの興味深い検体が発見された。東京にて発生したレジスタンスによる大規模なテロにおいて、幹部級の異能保持者と交戦し唯一生き残った戦闘用クローン。その検体は生存しただけでは無く、なんと手傷を負わせて撤退させたという。
未知である。それはあり得るはずのない現象であり、完全に想定外の事態であった。
量産型が圧倒的な個を凌駕しうる可能性。それは、将来の日本の国防において凄まじい価値を持つ事となる。
しかし、国防軍に身柄を置いていたそのクローンは日本武装医師会

の医師と国防軍の研究者に徹底的に調べ上げられ、開頭手術まで行ってもみたがその異常とも言える結果を生んだ要因は見当たらず。
もうバラしてみるかという話が出てきた頃、法務省からの圧力が国防軍と日本武装医師会へとかかり始めた。更にそれだけでは無く、『官邸』からも。なんでも新しく発足する法務省の対敵対的異能保持者の組織、異能調整局のエージェントとして雇用したいとの事だった。
正直言って、癪であった。頭ごなしに突きつけられた要求である上に、医師会の中で漂う鬱屈した空気。
どうせ引き渡すならば、と一部の暴走した医師により行われた実験。クローンと魂魄の関係が云々と適当な理由を付け、【イザナミ】計画にて使用された装置を用いたクローンへの実験が執り行われた。
皆が、そのクローンが自らの魂魄の摘出と再配置に耐えられないと思っていた。
だが、結果は彼等の度肝を抜いた。彼は、正常だった。何度転移を繰り返そうが、彼はその精神へと異常をきたさず、何処までも正常であった。クローン特有の物かと思われたが、同種のクローンによる実験ではそのクローンは『問題無く』発狂している。
その正常は、どう考えても異常だった。
魂魄という存在へとダイレクトに叩き込まれる『死』の錯覚。肉体に、精神に己の死を錯覚させられながらも正常でいられる存在を生物と呼んで良いのだろうか。
この実験を行った医師は更迭され、【イザナミ】計画は【ピグマリオン】計画と名を変えて法務省の管轄下へと置かれた。もう、武装医師会はこの件に介入する気にはとてもなれなかった。それは国防軍も同様であった。
法務省はこの技術を転用し、『何か』をやろうとしている様だがどうでも良い。
今や朱羽亜門と名付けられ、無能無敗の二つ名を冠する『アレ』にはもう関わりたくもない。
我々が、医者が追い求めるのは『生存』だ。死に魅入られ、死を経

験しても何も感じる事も無い『化け物』の事など知ったことか。かつて【イザナミ】計画を主導する医師の一人であった彼は、手にした書類を忘れてしまおうというかの様に引き出しの奥へと押し込んだのだった。

第十一話　無垢の価値

蕪木香流（かぶらぎかなれ）という女性は強い。

異能が、とかそういう話をしているのではなくもっと内側の話。

つまりは、意志の話。どんなにキツく、辛い状況に追い込まれたとしても、その男勝りな顔に浮かべる笑みを消すことはない。怒っていても、悲しくても、悔しくても、その頬は笑みを描く。

軍の一部を任される人間として彼女は本能的に察しているのだろう。

兵士というのは指揮官の顔を見る。故に指揮官というものは常に余裕を見せなくてはならない。たとえ心の中が荒れ狂い、唇を下に歪めてしまいそうな時も彼女は笑う。それはたとえ率いる部隊が血の通った人間から、クローンになったとしても変わらない。

あの日、空に門が開いた時も。

目の前で戦友が異能の的にされ、一瞬で消えてしまった時も。

遠い異国の地で数千の敵に刀一つで立ち向かった時も。

だから、彼を見た時は己と正反対なのだと思った。

朱羽亜門。法務省に新設された異能調整局のエース。クローンでありながら未来視じみた戦闘センスを誇り、単独でレジスタンスの幹部を撤退させたことで注目を浴びる。何処までも冷徹に非協力的な異能行使者を『執行』し、凡ゆる命令を完遂する。

その活動範囲は日本の勢力圏に留まらず、ヨーロッパやかつてオーストラリアと呼ばれたニュー・グレートブリテンでの任務も報告されている。

日本という一つの共同体が持つ外敵を斬り伏せる大剣が国防軍だとするならば、異能調整局は笑顔で差し出された手に仕込まれた毒針。その中でも一等の毒を持つ『無能無敗』を彼女が未だ『猪狩り』と呼ばれる前に遠目に見たことがあった。

無表情。他のクローンと同じその表情の中で黒い瞳だけが鈍い光を放ち、確かに意志が有ると主張する。

彼女には分からなかった。彼女が聞いた話では、朱羽亜門という名

を与えられたクローンは他のクローンと異なり自意識を持っている筈だ。
美しい物を美しいと感じ、悲しい物には悲しいと嘆き、邪な物には義憤する。何の因果かは分からないが、彼にはその権利が与えられているのだ。全く理解できぬとばかりに、彼女は直ぐにそのことを忘れた。それに元より、彼女は朱羽亜門という人間について好印象を持っていなかった。
冷徹で、冷血で。自意識を得たとは言えど、その腹の底はきっと凍りついているのだろうと。
鉄血の兵士であり、死に魅入られた一兵卒。それが『無能無敗』という男なのだと思っていた。
だが、今はそれが違うと彼女は知っている。目の前で無心に毒々しい紫色のケーキを頬張る中性的な顔立ちの少女を見ながら、あの時のことを思い出す。
『立ってください、蕪木少佐。』
あの荒れ狂う大海の上で、足場にするには余りにも不安定なゴムボートに立って彼は言った。
天を貫かんと走る雷の光にその顔を照らし、海の中へと沈まんとする彼女へと手を差し伸ばしていたあの光景を、彼女は一生忘れないだろう。誰がどう考えても絶体絶命で、生き残るという考えすら及ばないあの地獄で。彼は余りにも真っ直ぐなあの黒い目で彼女へと言ったのだ。
『貴女はまだ膝を突いてはならない。あの【猪】を切るのです。貴女には其れが出来る。』
幼児が架空のヒーローが実在すると信じる様に、あまりにも純粋に此方を見る瞳を見た時、彼女は理解した。
笑わないんじゃない。嘆かないんじゃない。怒らないんじゃない。『やり方』が分からないだけなのだ。クローンとしてこの世に生まれ落ち、共に生まれた兄弟達に自意識は無く。敵を殺すことこそを存在の至上理由と定められ、生まれてからの数年間を駆け抜けてきた。
朱羽亜門と名を与えられたこの幼いクローンは、この生き方以外を

知らないのだろう。何に対して笑えば良いのか、どうやって怒れば良いのか、涙を何時流せば良いのか。誰も彼に教えてあげなかった。
生まれながらにして戦士として成熟しているクローン達。一切の思考を縛られ、戦闘の為だけに己を捧げることに何の疑念も挟まぬ人造の兵士たちと過ごし、一人だけ己としての意識を持つ生活が如何に苦痛な物であったか。人間の子ならば親からの庇護を受けるべき期間を戦闘に費やし、銃を握りしめて駆けた幼少期が彼に何を齎したのか。
『……良いだろう！朱羽亜門！その言葉、信じたぞ！』
守らねばなるまい。誰も彼を守らず、戦へと赴く冷徹な兵器としてしか認識しないのであれば。
この広い日本という国の中で、己という存在だけは彼を庇護すべき存在として認識しよう。
その平坦でありながら一切の疑念も挟まぬ声に背中を押され刀を抜いたあの日から、彼女はそう在らんとし続けている。
「待ってください、花夜室長。私は今、冷静さを欠こうとしています。その苺は私のケーキに付いていた物です。」
「ええ？でも調整官が残していたんじゃないか。食べないならボクが食べても良いだろぉ？」
「断じて違います。それは私が最後に食べるべく取って置いたものです。あっ、待ってください。あっあっ！」
ショートヘアをピンで止めた小動物の様な印象を抱かせる少女が、白磁の皿の端に寄せられていた瑞々しい苺へとフォークの切先を突き立てんとする略奪行為を咎める無機質な声を聞きながら、追憶から浮上した彼女は静かな笑みを浮かべる。
もう一人の少女の小さな口へと運ばれる苺を乗せたフォークを目で追いながら、何処か情けない雰囲気を纏う無表情の少女が、巷では『無能無敗』と恐れられる調整官だと誰が信じようか？
彼を今、少女という形へと変貌させている有機義体という物が何なのか彼女の知るところではない。だが日本武装医師会の反応を見る限り、朱羽亜門という存在の異質さが無ければ運用できない技術なの

だろう。
しかし彼女はそれを追求しようとは思わない。
彼と、彼女と、共通の友人たる花夜が居るこの場では。彼を無能無敗としてではなく、1人の庇護すべき存在として扱おう。そんな思いを抱きながら普段は刀を握る手にフォークを握り、苦笑と共に彼女は己の皿から少女へと苺を移してやろうとするのだった。

◆

俺は激怒した。必ず、かの邪智暴虐な文学少女を成敗せねばならぬと決意した。
燦々と照らす正午の光に煌めくは、机上に乗せられた白磁の皿の上に輝く極彩色のケーキ。このディストピアにおいて、それが凄まじい価値を示すことは想像に難くない。
だが、そのケーキには一つだけ欠けている物が存在していた。ケーキの王冠（ティアラ）。赤き冠。
嗚呼、慧眼を持たなくとも分かるだろう。そう、このケーキには先程まであった『アレ』を失ったことによる致命的な欠陥を抱えてしまっている――――
苺が、無い
「花夜室長。申し開きが有れば実に聞きたいですね。」
「いや、違うんだ。その、ちょっとした出来心……みたいな？」
口にフォークを突っ込んだまま目を泳がせる少女の肩を掴み、真顔で圧をかける。いや、まぁ常に真顔だから圧も何もないんだが。普段はサイバネティクス化による身体強化の恩恵を受けている肉体も、今は見た目の少女の年齢相応の筋力しかない。この有機義体の『本来の目的』からしたら其れが良いんだろうが、非力なのは非常にこの場において不都合である。
「花夜室長。苺が消えてしまいました。」
「消えちゃった……ねぇ」
「出るとこ出ますよ。拳が。」

シュッ！シュッ！とシャドーボクシングで威嚇をしてみるも、この身体では虫一つ殺せまい。
気まずそうな顔で明後日の方向を見やる花夜をジト目で追尾する俺を見かねたのか、前方に座っていた蕪木中佐が苦笑いしながら俺の皿へと自身の苺を移す。
「私の苺を供給しよう！その不毛極まりない闘争を止めるのだ、朱羽。」
……救世主（メシア）は此処に居たか。法務省から国防軍に転職しようかな？いや、俺がこっちに移ってくる時のゴタゴタで俺のことを嫌ってる人が多いから無理か。
しかし、彼女とも長い付き合いだ。蕪木中佐。国防軍が誇る高潔なる指揮官であり、原作キャラの一人でもある。
純粋な身体強化の異能保持者でありながら、その圧倒的な出力と剣才にて幾つもの戦果を上げ続けてきた生粋の軍人であり、国防軍の中での人気も高い。……まぁ、その胸部装甲に惹かれている者も多いだろうが。
原作では珍しい一切の攻略が不可能な人物であり、主人公といくらコミュしようが一定以上の好感度を稼ぐことができない。人間的には主人公を気に入っているが、国家の奉仕者として認めるわけにはいかないという彼女のシンプルなスタンスが出ているシステムと言えよう。
そして何より、彼女の異名たる【猪狩り】。
国防軍の主力が異界へと出動しているのを見越して送り込まれた異界産の巨大な猪を洗脳することによって兵器運用した、海外テロリスト達の謀略を休暇中だった彼女が一刀の元に切り捨てたことにより与えられた二つ名。
他人事の様に語っては居るが、実は俺もその場に居たりするのだ。正直なところ、下手な島よりデカい猪にビビり散らかして中佐を無茶苦茶急かした覚えがある。
「しかし良かったのかい、蕪木中佐。調整官はともかくボクまでご馳走になったりして。実家にならあるが、個人としてのボクはあまりお

金は持ってないぞ」
俺の回想を遮る声の方向を見れば花夜がフォークを皿の上へと乗せ、完食の構えを見せていた。
言われてみればその通りである。ケーキを見た喜びで有耶無耶になっていたが、良くもまぁこの世界でケーキが手に入ったものだ。だが、それに対する返答は俺に衝撃を与えるに十分なものだった。
「うむ！私が作ったぞ！」
「ほ？」
「…？」
自信満々に腕を組み、誇らしげな笑みを浮かべる中佐に俺達は顔を見合わせる。
いやいや、作ったって言ったって材料とかはどうしたのだろうか。
「材料とかはどうしたんだい？小麦の代用品を使っている様には見受けられなかったが。」
花夜が投げかけた質問に、中佐はにこやかに答える。
「うむ！農林水産省のプロジェクトの産物の一部を受け取ったのだ！多くは異界に展開中の兵士へと運搬されてしまう様だが、ゆくゆくは此方の分も出回る様になるだろう！」
……なんか、俺の知らない設定が出てきた件について。

第十二話　秘めたる毒は

難民というのは付近の国の政情が不安定になればなる程に増える物である。合法的な手続きを経て別の国へと移り住む者も居るが、中には不法に国境を越える難民達も一定数存在する。それはこの滅びかけの世界も例外では無い。

日本。大戦の影響で大きく縮められた人類の生存領域の中で最大の版図を誇る覇権国家。

独裁的な政治、監視社会、法務省による異能行使者への偏執的とも言える管理主義等を無視するのならば、一応の生存が保証されている楽園（ユートピア）。其処に安住の地を求めるべく、今日も多くの難民が合法非合法を問わず国境を越えてくる。

そしてまた、突然打ち捨てられた区画の隅に現れた数十人の見窄らしい人影達もその内の一つである。

皆一様に使い古され色褪せた服を纏い、思い思いの鞄やキャリーケースを握る彼等の中から代表と思しき男がこの集団には似つかわしく無い服装をした男へと手を差し伸べ、笑いかけた。

「ありがとう、Ｍｒ．グラスホッパー。貴方のお陰で我々はこの国へと足を踏み入れる事が出来た。」

「金はもう受け取ってんだ。其れに見合った仕事をするのは当たり前って事さ。」

某国が起動させた気象兵器により世界の八割が暗雲に覆われた生活を余儀なくされている中、燦々と東京を照らす日光をサングラスに反射させ、未だに寒さが混じる春の風にアロハシャツを靡かせる男がニヤリと笑いながらその手を握り、握手を返す。

無精髭に覆われてはいるもの精悍な顔立ちをした男は、アロハシャツの男の言葉へと思わずといったように笑みを溢した。

「よく言うよ。此方が用意できた金額では数人は置いていかなければならなかったのに君は我々の要求を聞いてくれ、此処まで送り届けてくれたじゃ無いか。感謝する。運び屋（トランスポーター）を君に頼んで正解だった。」

照れ臭げに鼻の下を擦る男は運び屋（トランスポーター）。その中でも最上の部類に入

る、希少な時空系の異能行使者でも特に希少な『空間跳躍』の異能を持つ非合法の商売を営む男だ。世界の何処にでも依頼者を連れてジャンプする彼は蝗（グラスホッパー）と呼ばれ、金が払われればクライアントが誰であろうと世界中で商売を行う典型的な稼ぎ屋である。

そんな彼にも情があって良かったと胸を撫で下ろす男を、恥ずかしげに見ていた蝗（グラスホッパー）。だが突然何かを思い出したかのように、その毛に覆われた野太い腕で近くの路地へと誰かを呼び寄せる様に手招きしながら男へと話しかける。

「嗚呼、そうだ。その分と言っちゃなんだが、一つ頼まれちゃくれねぇか……って、その物騒なもんを仕舞えよ。裏切りゃしねぇよ。」

瞬時に襤褸を纏った男達が機敏に動き、腰のホルスターから青い光が葉脈の様に走る銃を引き抜く。中には両手を燃え上がらせ火球を放たんと構える者や、異常に発達した筋肉を膨張させる者もおり、彼等が異能行使者である事を示していた。

その素振りはとても只の難民とは思えず、彼等が何かしらの訓練を受けた戦場を褥とする人種である事を物語る。それを見た彼は諌める様な顔つきで銃を降ろさせ、男へと頭を下げる。

「すまない、彼等も気が立っていてな……。先日、此方へと派遣された同郷の傭兵が殺されたんだ。日本レジスタンスとの協力の第一人者として頑張ってくれていたんだが……」

「お前らが旗振り屋レジスタンスを揶揄するスラングと連もうが、火薬野郎国防軍を指すスラングと連もうが知ったこっちゃねぇが、俺に何かするのは止めてくれよな。ほら、コイツも怖がっちまってる。」

男が路地へと手を突っ込み、引きずり出したのは1人の少女だった。

擦り切れた白と黒のワンピースは砂に塗れ、アジア人らしい黒い髪は太陽の光に照らされ独特な光を放つ。

伏し目がちに地面を見つめる瞳はオニキスの様な美しさを纏い、まるで見る者によく出来た人形であるかの様な印象を投げかけており、更に拭い去られたかの様に一切の感情の機微を見せぬその顔が前述の印象に拍車をかける結果となっていた。

「その子は？俺達にどうしろと？」
「俺のお得意先の子供だ。何でもちと昂った兵士共がやらかした拍子に壊れちまったらしくてな。身内にそんな奴が居られると弱みになりかねんという訳で俺に押し付けてきたって訳だ。」
男は肩をすくめながら何でも無い事の様に語る。実際、この世界でこの類の悲劇はありふれている。目の前の少女には災難な話であるだろうが、今やこの世界で物を言うのは弱肉強食の摂理だけだ。
「お前達が何処に行くか知らねぇけどよ。どうせ旗振り屋の方に行くんだろ？公僕ですって顔じゃねぇしな。ガキの1人くらい連れて行っちゃくれねぇか？」
彼等は顔を見合わせる。別に連れて行くのはやぶさかでは無いが、先ずは彼女が本当に信用できるかどうかを知らねばなるまい。
彼等のうち1人が軽く頷き、左腕につけられた腕時計型のデバイスを少女へと向ける。
マネキンの様にじっと佇む少女を機械の眼が見定め、暴き、中に秘めた物が無いかと精査し尽くす間の数十秒間も、当事者たる彼女は微動だにしない姿を見て、彼等のうちの数人が痛ましげに顔を歪めた。
「白ですね、ボス。骨格、筋肉のつき方、内臓、全部この年頃のお嬢ちゃんの物と一致する。武器無し、自爆スイッチも無し。金属の類も無し。いやしかし、中身も綺麗なもんだな。傷も病気の跡もありゃしねぇ。よっぽど大事に育てられたんでしょうや。」
「人造兵士（クローン）の線は？」
「そんなもん、ちょっと話すだけで分かりますよ。」
オールグリーンと結果を示すデバイスをボスと呼ばれた男へと見せながら、少女の前に屈み込む男は笑顔で話しかける。
「お嬢ちゃん、名前は？」
「アモ…ン。」
「アンちゃんか、良い名前だ。おじさんはコリンって言うんだけどな。ちょっと今から言う言葉を繰り返してほしい。」
首を傾げる少女へと密かに並び立つ男達から銃が向けられる。精巧に作られたクローンだった場合、肉体のリミッターを解除してから

の徒手空拳で此方へと襲いかかってくる可能性がある事を、彼等は従軍経験からその恐怖と共に心の底から理解していた。
『ニホンはクソ以下の国です』。はい、アンちゃん」
　その場を静寂が支配する。所謂、絵踏みと呼ばれる識別方法だ。クローンの自意識は無数の暗示と薬剤、その他の物で雁字搦めに縛られ、一切の例外無くこの国への批判の文句を放つ事が出来ない。強制して無理に言わせようとすれば、自我の崩壊を招くこととなる程にクローンにとっての鉄の掟。少しでも言葉に詰まろう物なら射殺せんばかりの殺気が静かに辺りへと立ち上っていた。
「ニホンは……クソ以下の国です！」
　妙にハキハキと答える少女の前に、辺りの空気が一瞬で弛緩する。アロハシャツの男も寿命が縮んだとばかりに額にかいた冷や汗を手で拭う。男達も緊張が解けたからか顔には笑みが浮かび、此れから彼等と行動を共にする事となるであろう少女の頭を撫でるなど、先程までの殺気が嘘だったかの様な振る舞いを見せていた。
「あー、まぁ疑いも晴れたところで俺はお暇させてもらうぜ。不法難民用のセーフポイントが向こうの廃ビルの2階にある。この人数でも何とかなるだろうよ。そのガキを頼んだ！」
「何から何まで済まない。チェルニー・ミーチの名にかけてこの恩は忘れまい。」
　背を向け風にアロハシャツの裾をバサバサとはためかせる男へと深々と頭を下げ、彼等は少女を新しく加えて歩き出す。
　男達が姦しく少女へと話しかける声が遠ざかるのを聞きながら、蝗（グラスホッパー）はその顔を笑みへと歪める。
　彼は一度だって値引きやら、おまけなんてしてやった事はない。何時だって金はきっちり仕事の分取り立てるのが彼のポリシーであり、足りなければ毟り取るのもまた彼のポリシーであった。
「悪りぃな、お前ら。バッタは餌がねぇと凶暴になるもんなんだわ。小遣い稼ぎ、させてもらうぜ。」
　小声で呟かれたバッタの鳴き声は、東京の空へと溶けて消えて行くのだった。

「此処が蝗（グラスホッパー）の言ってたセーフポイントって奴か。窓がねぇぞ？埃っぽくて敵わん。」
そんな事はつゆ知らず、新しく加わった人形の様な少女を米俵の様に担ぎながらドアを開け放つ男達。
国防軍からの横流しによって手に入れたデバイスはその効果を如何無く発揮しており、その無造作にすら見える行為は既に内部に伏兵やトラップの類が無い事を確認した事による安堵によって裏打ちされていた。
手にしたキャリーケースや鞄を開き、中から通信機器やパソコンを取り出し始める彼等を1人の男に担がれたまま無感情に眺める少女は、ジタバタと手足を動かし己を下ろす様にと無言で主張する。思いの外感情の豊かさを感じさせる行為に苦笑いする男がゆっくりと下ろしてやれば、とことこと何処かへと歩き出そうとするのを見て男達からジョークが飛ぶ。
「トイレかぁ、嬢ちゃん！」
「悪りぃが男所帯なんでなぁ！気が回らなくてすまん！」
だが、次いで彼女の取った行動は実に突拍子のない行動であった。ゆっくりとした歩みの先は入り口のドア。カチリ、と鍵を閉めれば少女は不思議そうに此方を見つめる男達を見やり――――突然、親指の爪で勢いよく左腕を引っ掻いた。
虫刺されを掻くような気軽さで、少女の爪が皮膚を破り肉をかき分け、血が滴る。
まさか、過去のトラウマのフラッシュバックか。突然の自傷行為に驚き立ちあがろうとする彼等を、更なる驚愕が襲った。
身体から力が抜ける。手足がまるで己のものではない様に弛緩し立っている者はその場に崩れ落ち、座っていた者はその体勢から動く事ができない。不幸にもバッタへと与える餌の量が足りなかった彼等を、何処からか出でた白い霧が包み込んでいくのだった。
◆
「結局、さっきは中佐に詳細は聞けなかったな……」

小声でぼやきながら目の前を覆う霞を反射的に手で払おうとするが、一向に視界が良くなる様子は無い。ジクジクと痛む左腕を見れば、白い肌に付けられた一筋の傷から立ち上る霞。元凶たる俺が手で払う動作をしよう物なら、更に視界が悪くなるのは自明の理と言えよう。

勿論、余り良い気分はしない。煙や霧ならいざ知らず、今この場に漂うこの霞は『猛毒』だ。それは現在、俺の足元で倒れ伏す人々が健気にもその身で証明している。そんな物が自分の身体から放出されているというのは、河豚が自分の毒で死なないのと同じ様に俺に対しては無害だったとしても、何というか……嫌な物である。

しかし白い霞の影響で輪郭しか捉えられないが、僅かに指先や足が動くのが確認できるのを見て俺は耳へと手を当てる。

この身体に交戦用の機能はほぼ無いと言っても過言じゃ無い。別働隊が来る前にコイツらが復帰してしまえば、俺は為す術なく打ち倒されてしまうだろう。死に慣れてると言っても、痛いのが好きなドMになったつもりは毛頭無いのだ。

「見えてるか？」

『はい。調整官の視界は問題無く私へと同期されています。』

軽く耳に手を添えれば、俺の脳内へと響く聴き慣れた声。この場に持ち込む事が可能だった数少ない有機デバイスで接続するは、この廃ビルより数十キロ離れた法務省の地下に設置されたサーバー。０と１で形作られた無数の演算と試行の上に成立する擬似人格を備えたＡＩが俺の疑念へとその無機質な声によって淀みなく返答する。

『調整官の有機義体の人工血液を揮発させて展開させている為に、ガスの枯渇の心配は御座いません。微細な動きこそ可能では有りますが、医療機関で適切な処置を受ける迄は彼等は無力化されたままでしょう。』

おお、その答えが聞きたかった。

一切動くことの無い表情とは裏腹に俺の心中は安堵で埋め尽くされる。本当ならこんな任務なんてしたく無いのが本音だ。だが、外務省とのコネは作っておいて損は無いだろう。今や世界の大半の異界

への『門』を管理している彼等からしか知れない事は確かに有る。
『外務省移民管理局のエージェントは5分後に到着します。暇つぶしにしりとりでも如何ですか、調整官。』
「じゃあＪＤＡＣＳからどうぞ？しりとりの『り』からだ。」
『ｌｅｎｉｅｎｃｙ（リーニエンシー）ｐｒｏｇｒａｍ（プログラム）。』
「……どういう意味？」
『はい。課徴金減免制度の意であり、入札談合やカルテルなど独占禁止法に違反する――――』
ダメだ。無駄に人間臭いから失念していたが、ＪＤＡＣＳは本来ならば法務省のエージェントの戦闘補佐、異能犯罪の監視、その他の法務省の保有する資産の管理の為にプログラムされたＡＩであり、任務の合間に俺が話しかけまくったせいで今でこそこんな風にまるで人間の様な会話が出来るが、機械は機械。膨大な情報へとアクセス可能なＡＩに対してしりとりなんぞ、ライオンに爪楊枝で挑むような物だろう。
「しりとりは止めよう。ＡＩに勝てるとは思わない。」
先程まで蕪木中佐達と話していた時に纏っていた法務省の制服では無く、今の俺はシンプルなワンピースを着用していた。よくこんなスースーした物を世の女性は履けるな。慣れないワンピースの裾を払いながら地面に転がっている男の背中へと腰掛ける。おお、中々良い座り心地じゃないか。
「お、れ……に……何を、したッ……！」
俺の下で微かな呻き声を上げる男。その顔は焦燥と憎悪に塗りつぶされており、どう考えても友好的な付き合いは出来なさそうだ。
まぁそれも仕方ないだろう。彼等が全幅の信頼を寄せていたデバイスが当てにならなかったのだから。
だが、それもその筈なのだ。この身体はモデルとなった娘と同一の物である。過去に実際に存在していた少女の情報を収集し、それを元に骨格、筋肉のつき方、内臓の配置まで再現して少し血液と皮膚に細工をしてやれば、探知に引っかかる事のないクローン技術を応用した有機義体の完成という訳だ。そしてそのデバイスの製作者は有機義

体なんて物がある事すら知らなかったに違いない。
　何故か有機義体が俺にしか使用出来ず、普通のクローンを使うと会話の時点でボロが出るとなれば、俺へと白羽の矢が立つのは当然とも言えるが、全くこき使ってくれる。俺はこのブラックな国への悪態を心の中で『このニホンはクソ以下の国！』等と吐きつつ、外務省のエージェントが到着する迄の数分間の間の話し相手を、ＡＩから目の前の男へと変更する事を決めたのだった。
「ようこそ、日本へ。ビザはお持ちですか？」

第十三話　悪夢との再会

男は精鋭であった。

祖国の軍隊での厳しい訓練を突破し、ヨーロッパ諸国が第三次世界大戦に際して行った国連徴兵では最優秀の兵士としてその力を見込まれ最前線でその力を振るい、イギリスが一夜にして大海の底へと消えた『悪夢の滑落』事件からの数少ない生き残り。

数多の修羅場を踏破した。己の部隊の数倍の兵力に囲まれ、最早これまでと言う状況だって何度となく切り抜けてきた。

敵の屍を踏み越え、仲間の死を積み上げ、祖国が他の国の腹の中へと収められた今も尚、かつての祖国を取り戻す為に行動を続けてきた。そう、そうなのだ。この日本でのレジスタンスとの協力こそ、彼の祖国の復興への最重要な布石だった筈なのだ。

だと言うのに、何故――――

「これは驚きました。日本製の光学式拳銃に……ドローンの顔認識のジャミング装置。おっと、日本武装医師会の医療用ナノマシン噴霧器まで。税関は通さなかったんですか？」

何処までも丁寧な口調で、倒れ込む男達の荷物を血塗れの腕を気にするそぶりを欠片も見せる事なく漁るは、蝗（グラスホッパー）から預けられていた少女。先程まで己の名前しか告げる事の無かった無口な少女は、その傷口から微かに甘い香りを放つ白霧を撒き散らしながら饒舌に呟く。

その目は相変わらず深い闇に沈み込んでいたが、本性を現した彼女の目は見る者を引き摺り込む異様な引力を放っていた。

こんな目を只の少女がするだろうか？ここに至って漸く彼は状況を理解する。嵌められた――――！

「裏切った……か！　蝗（グラスホッパー）……！」

まるで己のものでは無い様に痺れる喉を必死に震わせ、詰問の言葉を焦燥に歪む唇で紡ぐ。戦場を住処としてきた歴戦の男の眼光が少女を睨め付け、その無表情の顔へと怒りの視線が突き刺さる。

嗚呼、彼女に罪が無い事は分かっている。クローン特有の言語ロック、内臓の変形や骨格の調整が見られない以上、彼女は本当に何の変

哲も無い少女なのだろう。
つまり、少年兵。
薬漬けにされているか、親か何かの弱みを握られているか、はたまた洗脳か。その年頃の少女にあるまじき虚無の表情へと至る迄に如何程の苦悩があったのか。しかし、彼女の返答は彼の予想を大きく上回る物だった。
「蝗（グラスホッパー）？あぁ……彼ですか。彼は頭の良い方ですよ。金の有る陣営をきちんと弁えている。あの服の趣味は納得できませんがね。」
何でも無い様に手を軽く振り、その桜色の唇から銀鈴が鳴る様な音色で語るは余りにも理解出来ない台詞。
この言種では、まるで蝗（グラスホッパー）の背後にいる者が彼女の様では無いか。あり得ない。この少女が？
この華奢な手足の、容易く手折れてしまえそうな少女が自らの意思で我々を此処に追い込み、一網打尽の憂き目に遭わせた？
目の前の少女の口元がゆっくりと弧を描く。その色白の顔に浮かべられた半月の様な笑みを見て、彼は漸く気づいた。
〝化け物〟だ。この目の前にいるのは、少女なんかでは無い。嗚呼、その濁りきった瞳よ。人の腹から生まれた人間がこんな眼をすると言うのか?!　クソッ、日本は魔窟。傭兵の世界では散々聞くこの台詞を自らの身で経験する事になるとは。
少女の皮を被った化け物が、己の腕の傷口に付着したどす黒い血をゆっくりとその白魚を思わせる手で拭いとる。
コツコツと打ちっぱなしのコンクリート床に響く靴の音と共に彼女が男へと近づき、その口元へとまるで死化粧の紅の様に己の血を塗りつければ己の気管へとダイレクトに流れ込む甘い香りの白霧。
彼もまた、この日本という国の洗礼を前にして散った何百もの強者と同じ様に意識を手放したのだった。

◆

あっぶねぇぇぇぇ！
俺は目の前で身動き一つしないものの、凄まじい形相のまま沈黙し

た男の腹を恐る恐る突く。
毒ガスの中で無茶苦茶意識あったぞ、今の奴。まさか創作物特有の物理法則、『気合い』をこんな形で目にする事になろうとは。
「しかし、これは……」
奴等の荷物から取り出した道具達をずらりと床に並べてみれば、良くもまぁ此処まで集めたと言わざるを得ない。
武器、機械、何らかの薬品。日本に密入国するのにそりゃ転移の異能を使わざるを得ない訳だ。
しかし、蝗（グラスホッパー）に払う金をケチったのは賢い選択とは言えない。あの年中アロハシャツのふざけたおっさんは金次第でサクッと人を裏切るタイプの人間だ。
今回の作戦も、蝗（グラスホッパー）が依頼を受けた時点で情報は政府側へと垂れ流されていた。
提示された金額が彼の求める基準に少しでも達していなければ、彼はいとも容易く顧客の敵対組織へと情報を売り飛ばす。
それは日本政府が依頼した場合も例外では無いが、この世界で最も金を持つ陣営の一つである日本政府の提示する額が安い筈もなく。今のところは裏切りの憂き目にあった事は無いが、それも今後の展開次第と言えよう。
彼等が所持していた武器の大半は今や軍事大国となっている日本製の物だが、こいつ等の背後に居る存在をカモフラージュする為の撹乱工作に過ぎない。今でも兵器を横流しして金を手にし、少しでも市民階級を上げようとする国防軍の下っ端供は後を絶たないし、後の公安と外務省の捜査でもこの事件に関しては何人かの国防軍の職員が『消える』だけで終わるだろう。もしかしたら要らん義憤に駆られた賢すぎる外務省の奴等も何人か消えるかもな……。
海外の情勢は政府の検閲を受けた物しか一般市民には知らされておらず、大抵の市民は日本が世界を支配する一強国だと思い込んでいる上に、こう言ったレジスタンスに関する情報も殆ど与えられない。一般市民が見たり聞けたりするのはフィクション多めの報道番組くらいだ。コイツらに対する情報は俺達みたいな国家公務員にしか行

き渡らないし、情報を得られた所で本当の黒幕には行き着けない筈だ。
現在の日本のスタンスとしては、世界を挙げて異界からの侵略勢力と正義の名の下に交戦する！と言った物だ。
確かに異界側から開けられた門も有るが、日本側から異界へと開けてる門も多々あるからプロパガンダ以外の何物でも無いけどな。このプロパガンダは一般市民だけじゃ無く、俺達公務員にまで流布されている。第三次世界大戦を終えて尚、日本は戦争状態だ。その戦争が生存戦争だろうが、資源獲得戦争だろうが流される血に変わりは無い。
だからこいつ等も外務省は『異界の勢力に買収された傭兵共』という事で流すんだろうが――――『原作』の知識を持つ俺はこいつ等の背後に居る存在を知っている。背後にいる奴等は『外』じゃ無くて『内』の連中だ。この情報は今のところは国家の上層部の連中しか知らない。異界とドンパチやってるのに内と外で二正面の戦端を開く愚は犯せないって事だろう。
第三次世界大戦。世界を真っ二つに割った、異能と異界からの技術が飛び交った人類史最悪の戦争。鉄火と厄災が撒き散らされ、幾つもの国が暗黒へと消え去った大戦争だが、別に日本はたった一国だけで世界を敵に回した訳では無い。
いやまぁ、あの合法ロリ局長が日本の裏で糸を引いてる訳だから別に一国だけでも勝利しただろうが。
焼け野原でその薄い胸を張りながら高らかに笑う金髪の幼女の姿を幻視しつつ、俺は目の前に並べられた武器達を手慰みに弄り回しながら思案を続ける。
勝利を手にした日本を含む幾つかの国が次にする事は何か？そりゃまぁ、歴史は繰り返すという事だ。第二次世界大戦後のソ連とアメリカが核を互いの首都へと突きつけあったあの冷たい戦争の様に、今度は偽りの平和の下での小競り合いが始まる。だが、同じ戦勝国とは言え明らかに他の勢力よりも日本は強大だ。表立ってちょっかいを掛ければ、外務省の海外交流課と国防軍がその国の首都へと押し寄

せる事は目に見えている。
　しかし、この国は獅子身中の虫を抱えている。それもとびっきりの。
『レジスタンス』。国防軍の上級将官数名、そして一柱の魔神によって立ち上げられたこの組織は超監視社会のこの日本にありながら、未だに精力的に反抗を続けている。そして彼等を強力に支援する陣営、それこそが――――
「ライヒ＝ユーロ神聖同盟……」
　特に異能への研究に注力していたドイツを中心として結成されたＥＵの後継組織。所有する多くの異界への門からの技術を軍事面へと転用しヨーロッパを支配しており、アジア全域と北アメリカ大陸の一部を支配する日本と並ぶ人類の一大生存区域。日本が既に魔神による傀儡国家と化している事を考えれば、純粋に人類だけで統治されている組織としては最大のものとなるだろう。
　原作において金銭面や兵力面においてレジスタンスを後押しし続けた組織であり、表向きには日本最大の友好国。裏では向こうの諜報部隊と日本の上層部子飼いの部隊が血で血を洗う諜報戦を繰り広げていた様だが、それこそ俺達法務省異能調整局みたいな特務機関にすらライヒ＝ユーロ同盟の真のスタンスは知らされていない。まぁ、局長の気紛れという線もあるが。
　そして間違いなく、今俺の前で横たわる彼等もライヒ＝ユーロ神聖同盟の兵士達が隠れ蓑として使う幾つかのＰＭＣ（民間軍事会社）の所属の筈だ。確か、こんな風に海外からの協力者として主人公と接触するキャラも居たような居なかったような……
　記憶の糸を辿ろうとしたその時。俺の背筋をゾクリと冷たい感触が撫ぜる。
　慣れた感触。先触れ。『死』への予兆。
　瞬間、地面へとその身を投げ出した俺の視界の上を空気の揺らぎが通り過ぎる。それはどこまでも鋭利に、そして無音のままにこの廃ビルの階をど真ん中から切り裂いていた。
　……クソ、二度と見たくなかったんだが。俺が体感で数ヶ月間もの

歳月の間、常に見続けてきたその攻撃。極限まで圧縮した空気を刃物の様に繰り出す鎌鼬。俺の左腕と両脚を奪った攻撃――――！

「あーら、こないに可愛いらしい女の子がおるなんてびっくりしたわぁ。」

立ち込める白霧は一瞬で霧散し切断されたビルの上半分が轟音と共に滑落する中、朝顔紋様の着物の袖を風に吹き流しながら、空を踏み締めて立つ和装の美女。記憶に刻み付けられたその美貌はあの時と寸分違わず、はんなりとした言葉に似つかわしくない不可視の暴力達も一切衰えていない。彼女こそ風を操るレジスタンスの幹部であり、俺の初陣の相手。何でこいつが此処に居る……！中禅寺丹羽！

いや、それよりも何故ここまで接近できた?!

「ＪＤＡＣＳ！」

『朱羽亜門調整官、たった今外務省のエージェント達からの信号が途絶えました。恐らくは今までの信号は何らかの方法による欺瞞信号かと。そして……嗚呼、これは。通信がシャットダウンされています。今の私はオフライン状態であり、本サーバーとの通信ができません。』

耳元へと手を当て、脳内に響く声が告げる内容に戦慄する。おいおい……これじゃどっちが嵌められたのか分かんねぇな……！クローンとしての身体なら兎も角、こっちの身体での交戦は不可能だ。数ヶ月間どころか、年単位でやろうが決着する未来が見えない。それこそ、永遠の死の連鎖へと俺が放り込まれかねない事態だ。

「こないな事言うんは心苦しいんやけど……さっき言うとった言葉――あんさん知ったらあかん事、何や知ってはるね？」

地獄耳にも程があんだろ……！風を操る能力の応用でこっちの声を拾ってたのか！

クソ、さっき俺が何とは無しに呟いたネタバレワードはアイツらにとっちゃ、トップシークレット。日陰者のレジスタンスにとっての生命線であり、頼みの綱。レジスタンス以外に漏れてるのは大問題だろうさ……！

「助けを呼ぼうかて無駄やわぁ。そっちゃ方面の異能を持ってる子が

わての方にはおるさかいなぁ。さて、お姉さんとお話ししよかぁ。色々、聞きたいんよ。」
不味い不味い不味い！本当に不味い！交戦は不可避、だが交戦を切り抜けるのも不可能に等しい。
こっちの有機義体は本当に年相応の少女の身体なんだ。筋力もそれに合わせてあるし、サイバネティクス化なんてもっての外だ。だが……だけど。やらなきゃいけない。俺は、此処で終われない。クソ、本当にやだこの仕事！絶対にいつか辞めてやる。
地面に落ちていた、密入国した傭兵達の荷物の中にあった青い幾何学的なラインが走る拳銃を構え、相手の緑の瞳を見据える。やってやろうじゃないか。たとえ何日、何週間、何ヶ月、何年かかろうとも俺は――死の果てに未来を掴み取る。
ジャキッという音と共に銃口の照準を定めれば、その緑の瞳が驚きに瞠目する。
「あらぁ……随分と懐かしい目ぇしはる子……あんさん、お兄ちゃんとかおりはる？」
その瞬間、彼女が空中から跳躍する。その手は不可視の空気の歪みに包まれており、次の瞬きには俺の身体を風の斬撃が貫いていることは想像に難くない。アイツにとってすれば、俺の生死はどうでも良いんだろう。レジスタンスには原作で見たっきりでこっちの世界では未だに確認できていないが、死者の霊魂と対話できる異能行使者がいる。文字通り魂だけの身軽な身体で霊魂用の拷問を受ける日々が待っているんだろうが……『死』は此方にとっては手札の一つだ。
その斬撃の軌道を少しでも『次』へと活かす為に目を凝らす俺の眼はしかし、凄まじい朱色の閃光に阻まれその直視が叶わぬ事となる。轟音、灼熱。紅蓮の炎が吹き荒れ、放たれた不可視の斬撃を相殺すれば、それと同時に俺の眼前へと降り立つ小さな人影。燃え盛る様に紅いツインテールが風に靡き、聞き覚えのある声が俺の耳朶を揺らす。
「私のあんまり可愛く無い部下を虐めてんじゃないわよ、おばさん。」
「なーんて酷いこと言いはるん……つい手が滑って殺したくなるわぁ。」

俺の前に立つ小さな背中からは眩しい灼熱の両翼が燃え盛りながら羽ばたき、不死鳥は此処にいるとばかりに己の存在を高らかに告げていた。法務省最強の異能行使者たるその少女、赫羽焔（あかはねほむら）は少女らしい端正な顔に勝気な笑みを浮かべながら言い放つ。

「不死鳥が死ぬかってんのよ！若さの有り難み、噛み締めるが良いわ。」

か、課長ぉぉぉぉぉぉ!!!非合法ロリとか言っててすまん!!!

俺の心は一瞬にして上司たる目の前の少女への賛美で溢れかえったのであった。

第十四話　死の巡礼、再び（前編）

　セーラー服を黒くフォーマルに仕立て上げた様な制服の背中から伸びる紅蓮の翼が空気を焦がし、闘争の気配が強者たる2人の間に奇妙な均衡と共に漂う。少女の勝気な性格を反映したように燃え盛る炎に負けず劣らずの紅色に染まるツインテールは和装の女性から放たれる風に靡き、まるで飛び立たんとする鳳凰の如き印象を見る者へと与えていた。

「可笑しかなぁ。しっかり通信は封鎖できとるんやろねぇ？ミーナはん？」

『私の異能、『電脳遊戯』は問題無く発動している。この場に『狂乱の不死鳥』が訪れた理由が不明。』

　空中をまるで確固たる床がある様に木履（ぼっくり）を履いたスラリとした足で踏みしめ、涼やかな水色の着物を身に纏った中禅寺（ちゅうぜんじ）はその眉を不思議そうに下げ、耳元へと手をやれば虚空へと響く何者かの声。

　此処では無い何処かからか電波に乗って飛ぶその声が小声で、何らかの手段でこの場においての通信の一切を封鎖している旨を感情を伺わせぬ無機質な声で彼女へと告げれば、強化された聴覚で声を捉えた焔の顔が不快げに歪む。

「チッ、未登録の電脳系異能行使者？　随分と調整局を舐めてくれるじゃないの……！」

「あらあら、人のプライベートな会話は盗み聞きするもんやないよ。あのおっかないお母さんからそういうマナーは習うてへんの？」

「それこそ――――私のプライベートに踏み込んできてんじゃないわよ！」

　空に屹立する風の支配者を引き摺り下ろさんとその紅蓮の両翼を羽ばたかせる不死鳥が、上半分を崩壊させ途中階層を剥き出しにしたビルのコンクリートを打ち砕きながら空へと飛翔する。

　豪ッと炎が獲物を求めて荒れ狂う音を伴い、揺れる真紅の鋒を迎撃するは不可視の斬撃。膨れ上がる炎へと中禅寺が指を向ければ、その動きに追従するかの様に無数の斬撃が殺到し不定形の炎を突き抜け

ながら、不遜にも空中に立つ風の支配者へと追い縋らんとする不死鳥を切り刻まんと猛威を振るう。
真空の斬撃の嵐と紅蓮の炎の波の拮抗。凄まじい熱と炎に弾かれた斬撃が撒き散らされ、一瞬にして打ち捨てられた廃墟群は地獄へと変貌する。
指向性を持って放たれた炎の槍と風の斬撃が激突し、対消滅を繰り返す空中を彩るは緑と赤の二輪の花。
スカートの裾を翻し炎を纏う健康的な脚が空中へと躍り出た勢いのままに蹴りを放てば、それをとても人体との衝突によって聞こえたとは思えぬ轟音と共に受け止める大気の壁。
激突の余波の衝撃波が吹き荒れる中、真紅の瞳と深緑の瞳が交差し

「確かに強かやけど……年季が足らへんねぇ！」
己の張り巡らせた大気の防壁の内側より、着物の袖の涼やかな水色を残像として引きずりながら鋭く突き出される掌底。
空気を削る音と共に迫る其れを焔は腰を捻り、間一髪で自らの顔の上を通り過ぎる一撃を見ながら顔を引き攣らせる。だが次の瞬間、その端正な少女の顔は鮮血と共に消え失せる事となった。
掌底の為に引き伸ばされた中禅寺の腕が纏うは不可視の真空の刃達。如何に避けようとも必ずその身を切り刻む事となる見えざる絶死の一撃は、回転する真空の刃によっていとも容易く少女の首から上を削り取り、炎よりも赤き鮮血を撒き散らしながらその首から上を失った華奢な体躯は炎を纏いながら地面へと落下する。
嗚呼、だがしかし。〝この程度〟で死ねるのならば――――彼女は猛者犇く法務省において、最強の名を冠して居ないだろう。
瞬間、地面より立ち昇る巨大な火柱。先程までの炎が蝋燭の先で揺れる細やかな小火とすら思えるほどの熱量と共に上空へと目がけて迫る其れを、空中を滑る様に動き回避する中禅寺の着物の袖が僅かな黒煙を上げ、彼女は顔を顰める。
燃え盛る炎より出でるは燃えながら流れ落ちる鮮血を振り払い、何事も無かったかの様に火柱の中心から歩み出る少女。

不死鳥は死して尚、その業火より再びその身を蘇らせる。幾度傷を負おうがその度に火力を増して蘇り、敵を屠り続けるが故に『狂乱の不死鳥』。チロリと舌を出し、口元の血を舐め取りながら彼女は笑う。
「痛いじゃない……！貴女と違ってこの先長い人生、乙女の顔に傷が残ったらどうしてくれんのよ！」
「嫌やわぁ、最近の子は年長者への敬意がなっとらんくて……！」
パチンと焔が指を鳴らせば、火打ち石を打ちつけた様に指の間で踊る火花達。
そこへ彼女が己の指先へと息を吹きかけると同時に、空中へと風に乗り転げ出た火花達はその身を業火へと転じさせる。
揺れる炎は羽へ、酸素を燃やし尽くさんと荒れ狂う炎の鋒は嘴へ。燃える尾羽が放つ火の粉を残像としてその場に置き去り、轟音と共に未だ上空に座す中禅寺へと数十の火の粉より転じた不死鳥達が殺到すれば、負けじと彼女も触れた物を切り裂く幾千もの刃と化した猛風でそれを迎撃せんと手を振るい、弾かれた業火と吹き荒れる斬撃の風が空中を地獄へと彩った。
焔は指先より不死鳥を放ち続けながら、背後にて立つその少女へと声を発する。
感情の感じられぬ顔に炎による陰影を刻み、その澱んだ眼には踊る炎がまるで鏡に映されたかの様に鮮明に踊る少女の左手は鮮血に濡れており、擦り切れた白と黒のワンピースは戦闘の余波で煤けている。どう考えてもこの戦場にはそぐわぬ人物であったが焔が投げかけるその声には確かな信頼と一抹の心配の色が見てとれた。
「調整官、よく通信の封鎖に気付いたわね……！あんな方法で私に緊急事態を伝えるなんて思いもしなかったわよ！」
「……何のことか分かりかねますが。」
やや焔より身長の低いその少女――即ち、朱羽亜門の有機義体が感情の乏しい顔で問うのを見た焔はその顔に苦笑を浮かべる。全く可愛げの無い謙遜があった物だ。科学に干渉する異能で外務省のエージェントの反応を偽造し、廃棄区画一帯の通信を封鎖したレジスタンス側の策略に彼がいつ気付いたのか……否、もしかしたら気付いてす

ら居なかったのかもしれない。
　彼の凡ゆる任務において発揮されてきた超常的とすら言える勘。理屈は無く結果だけを導き出す彼の特性がこの場面に活かされた可能性は充分にあるのだ。
「アンタ、自分の本名を言ったでしょ。」
「……！」
「私の名前でアンタの名前を縛ってる以上、私達の間には繋がりが生じる……つまり、アンタが名前を名乗れば世界の何処に居ても私は分かるわ。そして今のアンタに命じられた任務は『諜報任務』！その状況下で本名を名乗るという事は私に宛てた緊急事態の知らせ！」
　少女の額に汗が垂れる。無表情の中で少し目が泳いでいる様にも見えるが、それもそうだろう。戦闘用では無い有機義体を用いた諜報任務で立て続けに起きたイレギュラー。如何に歴戦のエージェントたる『無能無敗』とてその心労は尋常の物では無い筈だ。其れに気付いた焔はその全身を燃え上がらせながら笑顔で告げる。
「良くやったわ、調整官！そこで休んでて。後は――お姉ちゃんに任せなさい！」
　魔神たる天威喪音の娘である赫羽焔。そして同じく天威喪音の寵児たる朱羽亜門。彼女の齢は僅か15なれど、その肩書きは法務省異能調整局第一課課長。だが、それ以前に彼女はこの生まれて数年のクローンと名で結ばれた姉弟（きょうだい）。弟が敵の策略を看破し、そして己に助けを求めたのならば――後は勝つだけだ。
「ええ加減に……鬱陶しいわぁ！」
　押し寄せる不死鳥を手に纏った風の刃で振り払い、その端正な顔に苛立ちを浮かべる中禅寺。
　だがその苛立ちは直ぐに焦燥へと転ずる事となる。地上より鏑矢を放ったかの様な鋭い音を立てて上昇するは煉獄の炎を両翼に湛えし不死鳥。まるで最初の衝突の焼き増しの様に――しかし、その数十倍の熱が込められた炎を纏った脚から放たれる一撃が眼にも眩い炎の輝きと共に、上空で彼女の真空の防壁と激突したのだった。

◆

ツスゥゥゥゥ……。いや、まぁそうなんですよね。うん。全部作戦通りって言うか……。

そう、名前の繋がりを利用した高度な作戦を俺は用意周到に押し進めていたのだ……って、

んな訳ねーだろうが！そんな知恵がある訳ないだろ！名前聞かれて咄嗟に言える名前があれしか無かっただけだわ！後なんだよお姉ちゃんって。

非合法ロリを姉に持った覚えは無いぞ。というか、焔課長の弟になるって事は……母親が『アレ』になるって事だからね。それなら試験管の溶液が両親でいーよ俺は。

そんな現実逃避気味の思考を俺が脳内で繰り広げている頭上では、正に異能力バトルのお手本と言っても良い激戦が繰り広げられていた。

和装の麗人が放つ不可視の斬撃を避けることもせず、鮮血を周囲に撒き散らすも己の血を燃料とし業火の大剣を作り出し振るう制服の少女。両者とも当たり前の様に上空に浮く中で炎と風が織りなす戦闘は遠目から見る分には非常に煌びやかであり、俺が前世で夏は良く見ていた花火を思い起こさせる美しさだ。

流れ弾が無けりゃな！

上空にて振るわれた炎の大剣へと繰り出された掌底が纏うは真空の刃。轟音と共にその二つが衝突すれば、ベクトルがズレた真空の刃が炎を纏って地面へと雨の様にばら撒かれる。その落下地点は俺がいる上半分が切り落とされた廃ビルも例外では無い。強者の戦闘はその余波だけでも必殺となりうる事を、俺は灼熱の斬撃が胸を貫く事で身をもって体験したのだった。

轟音と共にその二つが衝突すれば、ベクトルがズレた真空の刃が炎を纏って地面へと雨の様にばら撒かれる。その落下地点は俺がいる

上半分が切り落とされた廃ビルも例外ではない。俺が普段の身体と比べて幾分動きにくいこの身体を勢いよく転がし一際大きな瓦礫の影へと身を寄せれば、篠突く雨の様に降り注ぐ炎を帯びた斬撃達が瓦礫を砕く轟音が響き渡る。

クソ、これなのだ。最強論議に名を連ねるレベルの異能行使者が刃を交えれば、その余波だけで俺は余裕で死ねる。

とっとと決着をつけて頂きたい所なのだがそうもいかない。と言うのもこの2人、非常に相性が悪いのだ。

中禅寺丹羽の異能【風来刃舞(ふうらいじんぶ)】は自在に風を操り天空を支配する事が可能な強力な物であり、原作でも序盤から主人公の仲間として登場するキャラでありながら終盤までしっかり主戦力として使えるという無課金勢にとっての救いの女神であった強キャラなのだが、今は俺の直属の上司である非合法ロリこと赫羽焔とてそれに張り合える程の異能を持っている。

異能、【不死鳥塵炎(しなずどり・じんえん)】の持ち主である彼女は鉄すら余裕で融解させる炎を操るだけで無く、不死鳥という文字通りに不死身なのだ。それも絶命する度にその火力は上がっていくというクソ仕様。

ストーリー上で入手するとあるアイテムが無ければ理論上、無限に強くなり続ける敵キャラにあるまじき彼女との負けイベを何とかしてクリアせんとする猛者達(暇人)も居たのだが、結果的にゲーム内数値最大の攻撃力を誇るスーパーフェニックスロリを作り出しただけであった。

それ程の強さを持つ二名だが、この両者が戦った場合千日手なのだ。

中禅寺は焔課長を殺せず、焔課長の纏う炎はその性質上、真空を纏う中禅寺の防壁を突破する事は出来ない。そして戦闘が長引けばレジスタンス側の『最強』が出張って来かねず、そうなればますます戦火は拡大し……という末路になるのだ。

元より、この二名の戦闘は原作より逸脱している。恐らく俺がいなければ順調にレジスタンス側の作戦は遂行され、密入国を果たした神聖ライヒ＝ユーロ同盟の傭兵達を中禅寺が迎えに来、た……？なんか

おかしいな。こんな大物が態々、傭兵の送迎……？

まぁいいや。そんな事を今は考えるべきじゃ無い。俺は降り注ぐ瓦礫や風の斬撃が織りなす戦場音楽を聞き流しながら、為すべき事を考える。俺が為すべき事。それはこの両者の戦闘に介入し、中禅寺丹羽を撤退させる事。レジスタンスの幹部の最強格で有り、俺の右手以外の四肢を奪った女。それを撤退させる。……ふむ。

まぁ、前もやったな！なんか最近価値観がバグって来た感じがするぞ！俺はそんな自分に嫌気が差しつつも、地面に転がる傭兵達の荷物を漁り始める。え？傭兵達はどうなったかって？折角はんなり姉御の真空斬撃で毒ガスから解放されたのに、麻痺が解ける前に戦闘の余波で……全く不運な奴らである。

さて、そんな事より荷物を漁った結果俺の手元にある物は以下の通りだ。

医療用のナノマシン噴霧器。傷口に噴射する事で一時的に剥がれ落ちたり損傷した皮膚の代わりとして傷を覆い、回復を助ける物。まぁ応急処置用だな。

もう一つは１２５年式光学式拳銃。マガジンの代わりにバッテリーを用いてビームを放つ拳銃で、この世界では一般的な拳銃。

後は……軍用ナイフ。俺が下っ端クローンの時にも使ってた量産化された良質なナイフだ。手に程よく馴染む重厚感とシンプルな構造が俺的には気に入って居る……。

え、これだけ？これだけで今からレジスタンスの幹部の相手すんの？

……しかしよく考えれば、前に奴と戦った時に俺は1人だった。戦闘のせの字も知らず、この世界の不条理に打ちのめされていたひよっこ。だが今の俺はどうだ？チート能力持ちのロリ上司に、数年間で積み上げた死に戻り戦闘のノウハウ。

この戦闘向きでは無い有機義体をハンデとしても有り余る戦力と言えるんじゃなかろうか。

前が酷すぎただけだな！数ヶ月間の戦闘が初陣とかチュートリアルがバグって居るとしか思えない。

それと比べれば、この戦闘はぬるま湯みたいなもんだ。柄じゃないが、無くした四肢のリベンジってのも良いかもしれない。

んじゃ、まぁ。いつも通り死んで死んで死に尽くして――――生を手に入れようか。

第十五話　死の巡礼、再び（後編）

降り注ぐ朱色の羽根。
舞い踊る涼やかな朝顔を彩る着物の袖。ふわりふわりと舞い散るは蛍を思わせる光達――
此れだけを聞けば上の文章は美しい情景を描写して居る様にも聞こえるだろう。だが、正にその光景が上空に広がる身としてはとてもじゃ無いがそんな感想は湧いて来ない。降り注ぐ朱色の羽根は触れれば火傷なんてレベルじゃ済まない炎に包まれて居るし、着物の袖は鉄筋すら容易く切り裂く真空の斬撃を纏い、蛍の様に見える火は発火した血が滴り落ちて出来た産物だ。
何が言いたいかって？
まぁ簡単な話、この戦闘は余波ですら俺にとって致命傷だ。通常のクローンとしての肉体ならばこの程度は耐えてくれるのだが、この貧弱ボディではちょっとした弾みの攻撃が逸れて来ただけで余裕で死に至る。
そんな事を考えながら身を隠していた瓦礫から飛び出し、別の瓦礫へと走り出した瞬間に瓦礫へとぶつかる風の斬撃。先程まで俺が隠れていた部分をいとも容易く削り取り、その部分の瓦礫のまるで磨かれた鏡面の様な滑らかな断面がその攻撃の脅威を物語っていた。
まったく、作戦会議すら碌にさせてくれないのは勘弁してほしい。余波を回避する為に死に戻った回数は既に二桁に達して居る。まだこっちはあのはんなり姉御を如何にして撤退させるかの目処すら付いていないと言うのに、これだけ死なせてくるとはたまったものでは無い。
「あらあら、あの子もか弱そうなくせして中々やるやないの。……なぁ、あの子貰ってもええ？なんか懐かしゅう雰囲気がするわぁ。」
「やるわけ無いでしょうが！……アイツがこの攻撃の余波如きで死ぬなんて舐めてもらっちゃ困るわね！」
おい、何か理解者みたいな面してるが本日の死亡原因の半分はお前の攻撃の余波でもあるからな。そのはんなり姉御と同じくらいお前

は俺の事殺してるよ。
上空で炎と風を振り撒きながら激戦を繰り広げる両者の会話が漏れ聞こえるが、とてもじゃ無いが反論してる余裕なんて無い。正面から飛んで来た炎を横へと跳躍する事で何とか避けるも、その熱が左手の生傷を焦がし俺の脳へと苦痛を訴える。
痛みには強い方だが、不快感を覚えないかと言われればそう言うわけでは無い。慣れはしても痛いものは痛いのだ。
炎で軽く水膨れを起こしている左手の傷口に付着した生乾きの血がパラパラと地面へと落ち、更に俺の脳へと不快な痛みの信号を送り続ける。そろそろ止血と応急処置ぐらいしとくべきか……。俺は密入国の傭兵（故）が持ちこんでいた医療用のナノマシン噴霧器を取り出す。
真っ白なスプレー缶に十字架と燃え盛る銃弾の意匠があしらわれたシンプルな見た目のソレのキャップを外し、瓦礫の影に隠れながらワンピースの左袖を破き、露出した傷口と火傷へとスプレーを噴射する。無色透明な液体が傷口へと噴霧されれば、何かが覆う様な感覚と共にジクジクとした痛みが収まり、流れていた血もその煙と共に薄く広がったナノマシンによって覆われ、俺の腕は一応の応急処置が施された形となった。
しかし、火傷周りのナノマシンの定着がよろしく無い。このナノマシンは高温に弱いらしく、業火に直接曝された部分の傷口のナノマシンが凝固せず液体のままで滴り落ち、水膨れの端から漏れ出る白い煙が風に吹かれ――ん？
そうか、そうじゃないか。密閉されて居ない屋外だから度外視していたが、俺の手持ちのカードはもう一つある。
俺の体液由来の毒ガス。吸い込んだ物に麻痺を与え、適切な処置なしでは身動きを取らせない事を相手に強いるガス。しかし屋外ではちょっとした風にすら直ぐに撹拌され充分な効果を発揮しない事から作戦に組み込むつもりも無かったが……。
待て、何か……思いつきそうだ。いける、かもしれない。いや、思いついたと言っても妄想に近い物だ。

成功する確率を数字で出そうとしたら小数点以下の0が凄まじい数連なるのは見えている。だが、俺にはこのズル(死に戻り)がある。不可能と可能の狭間を俺の死体で埋め立てる成功しなければ終われないボーナスステージ。

死に続けなきゃ生きれないなんて皮肉が効きすぎている。この世界に俺を放り込んだ奴が居るなら、今頃大爆笑して俺を見ているだろう。でも、やるしかない。ゆっくりと立ち上がり、上空を舞う己の標的を見据える。

嗚呼、クソ。いっぱい死ぬんだろうな、コレ。

◆

上空を茜色に染め上げる戦闘は一進一退の様相を呈していた。

紅のツインテールの眩しい少女の放つ炎が太陽と見紛う程にその体積を増し、和装の麗人へと襲い掛かれば女の振るう手が纏う風の刃に両断され、女がお返しとばかりに指先から鉄をも穿つ風の弾丸を雨霰と降らせば、少女の背中より伸びる炎の両翼に薙ぎ払われる。

その戦闘の熱狂に身を委ねる2人の口元には隠しきれぬ戦闘の高揚が齎す壮絶な笑みが浮かべられていた。炎が大地を焦がし、舞い散る風刃が熱したナイフでバターを切る様な気軽さで周囲のビルを切り倒す戦場を舞う2人の戦乙女。だが、その強者同士であるが故に成立する均衡は一瞬にして破られた。

「……あーあ、止めや止め！何度切り刻んだかてこない元気でいはんねやったら意味無いわぁ。」

人形を繰る様な緻密な操作で、無数の斬撃と自身の纏う壁を制御していたその指がピタリと動きを止める。

お手上げとでも言いたげに上品に肩を竦める中禅寺に対し、ネコ科の肉食獣を思わせる獰猛な笑みを返す焔の全身を鎧の様に覆いながら中禅寺の態度とは対照的に未だメラメラと燃え続けている業火は、少女に宿る殺意を代弁している様でもあった。

「そう？なら大人しく私に燃やされなさいよ。そうすれば私の仕事も

早く終わってアンタは面倒ごとから解放される。魅力的な提案じゃない？」
「あんさんが死んでも解決すると思うんやけどねぇ……。でも切っても切っても死なへん所を見る限り、不死鳥の名は伊達じゃ無さそうやなぁ。」
　ポツリと呟きながらゆっくりと両手を前へと構える彼女はまるで何かを押し出す様に両手の平を相手に見せ、にこりと穏やかに笑う。
「せやから、うちが〝荷物〟を受け取るまでどっかに行っといてくれへん？」
「まさか、アンタッ――――！」
　焔が何かに気づいた様にその背の炎翼を羽ばたかせ、遥か上空へと跳躍せんと身を屈めるが時既に遅し。
　瞬間、先程までその場にいた不死鳥の姿がかき消える。まるで元より其処には誰も居なかったかの様な錯覚すら抱かせる程に唐突に消え失せた彼女の代わりとでも言うようにその場に響き渡る轟音。
　まるで千発の戦艦の主砲が轟いた様な轟音が彼女に起きた出来事を言外に説明していた。
　不死鳥は殺せぬが故に不死鳥。ならば、殺さずに放逐する。中禅寺が出した最適解に基づき繰り出された局所的な暴風は、焔の肉体を千々に切り刻みながらその身を何処かへと吹き飛ばす事に成功していた。
「あの焼き鳥娘が帰ってくるまでに2分って所やなぁ……で、あんさんが代わりに相手してくれはるん？」
　清々したとばかりに軽く腕を振りながら投げかける目線の先には、上部が切り取られ内側を無惨に露出させた廃ビルのフロアにて戦闘の余波に巻き込まれ、舞い散る炎と風の斬撃によってその命を落とした傭兵達の死体から流れ出る血をカーペットの様に踏み締める少女。
　この世界でも有数の強者2人が激突した地点の真下に居ながら、その身には当初より付いていた左腕の裂傷以外の傷は見受けられない。
　死体の中で唯一無事に立つ彼女の顔は無表情に染まり、彼女が投げかける視線を迎え撃つ様に上空へと向けたその目は昏く濁っており、

光景そのものから死という物が匂い立つようにすら感じられる。
「嗚呼……あんたはん、本当にお兄ちゃんとか居らへんの？本当にそっくりやわぁ、その目ぇ……。」
その頬を恋する乙女の様に赤く染め、潤んだ瞳で眼下を見やる彼女に対して少女は無感情に右手をだらりと脱力させ、左手でナイフを構える。まるで何度も、何百回も、何千回も繰り返したかの様に手慣れた素振りでナイフを持つその構えに中禅寺はぴくりと形の良い眉を動かした。
何かの流派だろうか？血の滲むような反復動作でしか身に付かない様な所作がその構えの端々に見受けられる。
だが、彼女の知る流派にあの様な構えは無い。どちらかと言うとあの構えからは素人感が拭えない様な印象を彼女に投げかけていた。
あまりにもチグハグなその構えを取る少女。興味を唆られる相手ではあるが、例え少女が何者であれ彼女のやるべき事は一つ。
「悪ぅ思わんといてなぁ。」
刹那、彼女の指先より銃弾の様に放たれる斬撃。鉄を容易く両断する事が可能な目視する事叶わぬ風の刃は、肉を眼前にした猟犬の様な獰猛さで空を駆け、その少女の血肉を地面へとぶち撒けんと彼女へと殺到する。不可視故に回避も叶わぬ確殺の斬撃。数瞬の後に少女はその命を散らしている事は確定した様に思えた。だが――
カッ――！
酷く硬質な音と共にナイフが虚空を穿つ。
国防軍正式採用の黒光りするナイフのブレードは空中で火花を散らしながら不可視の斬撃を弾き、微かに響く刀身の振動する音が確かにその時起きた『不可能』が事実である事を知らしめていた。
そう、有り得る筈がないのだ。神速で繰り出される不可視の斬撃。これまでに数多の強者を屠り、その喉笛に喰らい付いてきた彼女の『必殺』。なるほど、彼女の放つ風刃が防がれる事は有り得るだろう。防壁を築き、或いは広範囲への攻撃での相殺によって風刃が意味を成さなくなる事は多々ある事だ。
だが少女は不可視の其れを見切り、剰えその凄まじい速度に対応し

て弾いてみせた。『まるで其処に攻撃が来ると知っていた様に』。
その未来予知じみた行動、そしてその深く澱んだ眼。其れらは彼女にどうしようもなく高揚と疼きを想起させていた。
かつて己の身体に傷を刻み込んだ愛しき無能力の戦士。大量生産から生まれ落ちたイレギュラー。彼女が両脚と左腕を奪い、互いに互いの身体へと痕跡を刻み合ったあの数分の邂逅――――
「あはぁ……♪」
瞬間、彼女の周囲の空気が歪み、圧縮された其れらは鋭利な鋒をもって少女へと殺到する。
鋭く回転しながら迫り来る無数の斬撃達。それらは間違いなく絶死の攻撃であり、数瞬後には全身から鮮血を吹き出して地面へと倒れ伏す少女の姿が其処にある筈であった。しかし、実際に結果でもって示された現実は凡そ信じられぬ光景であった。
するり、と少女がナイフを不規則な軌道で振るえば、黒光りする一閃が放つ甲高い金属音が辺りへと響き渡る。
斬撃の通る道。主人の手から放たれ、敵の喉笛へと喰らいつかんと駆ける不可視の猟犬達が描く未来の軌跡。
何者も見る事叶わぬ須臾の先に訪れる未来。その未来の斬撃が通る軌跡へと刃を配置する様に緻密にそして素早く振るわれたその一撃は、複数放たれた筈の斬撃を一閃にて全て防ぐという有り得ざる不可能を成し遂げていた。
同時に少女の腕から響くブチブチという致命的な何かが断裂する音。
脳が自らの肉体を保全する為に定める『肉体が損壊しない為の運動の最高値』を意図的に突破し、非力な少女の身でありながら圧倒的上位者の連撃を防いだ代償は直ぐに視覚的にも現れていた。
ナイフを振るった左手に徐々に浮かび上がるどす黒い内出血の斑紋。無理な挙動によって断裂した筋繊維達が訴える屈強な男でさえ涙を禁じ得ないであろう激痛を伴うその代償に、少女は一切の痛痒をその顔に浮かべる事なく慣れた手付きでナイフを右手へと持ち替える。その有様はさながら鋼鉄。凡ゆる損害を度外視し、己の目的のみ

を遂げる生きる機械装置。詰まるところは――――人でなし。
「えらく可愛らしい見た目になっとるやないの、『無能無敗』君。前の身体も男前で唆られよったけど、その見た目も好きやわぁうち！どないしたの？またあの『魔神』に弄られたん？」
空中で無数の旋風を周囲に侍らせ、着物の袖元で口元を押さえながら上品にクスクスと笑う彼女。だが、エメラルドを思わせる緑の眼はその中で燃える執着の炎を隠そうともせず、目の前の少女へと粘着く様な視線を投げかける。
そんな１０００年を恋焦がれた乙女の様な雰囲気を纏う中禅寺に対し、無能無敗と呼ばれたその少女は言葉を返す事無くナイフを口に咥え、腰に捩じ込んでいた青い幾何学的な光を放つ拳銃を抜き放ち発砲する事で返答とした。
銀色の銃口より放たれた白銀の光は、マガジンに封入された異界由来のエネルギーにて働く異なる物理法則の元に、忠実に目標を焼き焦がすべく虚空を一直線に駆け抜ける。
幾度も動作を筋肉に焼き付くまでに繰り返した者特有の澱みの無い、流れる様な抜き打ちより繰り出される光の槍が正確無比な魔弾と化してその美しい白い柔肌へと傷をつけんと迫り――――風の腕（かいな）に薙ぎ払われる様にして打ち上げられた付近の瓦礫によって無為に残滅する。
周囲に常に纏わせた万物を切り刻む神威の風による自動防御。其れに守りを任せる事無く振るわれた不可視の巨人の腕。
その意味する所を既に熟知しているとばかりにその行為に一切の感想を抱く事無く再度引き金を引き絞る少女に、中禅寺は獰猛な笑みをその端正な浮かべながら両手を交差する様に振るい、吠え立てる様に叫んだ。
「舐められたもんやねぇ！此れで倒せると本気で思ってはるんやったら……期待外れやわぁ！」
彼女の怒りを示す様にして放たれた爆風。暴虐の嵐は瓦礫を舞いあげ、放たれた光を湖畔に投げ入れられた小石の様に容易く飲み込みながら無表情にその場に直立する少女へと迫る。

流れ落ちる大瀑布の様に迫る巻き上げられた瓦礫達。この広範囲の攻撃の前には避ける事も叶わず、年相応の筋肉しか付いていない少女の脚では逃走も叶わない。ならば残された選択肢は『死』のみか？否、否である。

あるでは無いか、突破口が。目の前に

一切の躊躇いを見せず、拳銃の青い光を残像として引きずりながら少女は全力で走り出した――――絶死の虎口たる前方へと。前方より迫り来る一際巨大な瓦礫の上部へと右手を突き、後方へと受け流す勢いで上方へと勢い良く跳躍する少女へと更に無数に押し寄せる大小様々な礫達。小柄な体を駆使しながら避け、避けられぬ物は手にした拳銃より放たれる正確無比な狙いの光弾により破壊し、その中でも大きな礫を選び取り軽業師の様にいなしながら、上方に待ち構える中禅寺を目掛けて、怒涛の如く押し寄せる瓦礫の瀑布を怖るべき速度で登攀する少女。

巻き上げられた瓦礫による圧殺効果を期待して放たれたこの風に斬撃が込められていない事を加味したとしても、この光景は異常であった。全身に細やかな傷を負い、傷口より立ち昇る白色の霞を風の任せるままに後方へと走らせながら一切の痛痒をその顔に現さぬまに天へと至る瀑布を駆け上るのは小柄な少女。その神がかった挙動の一つでも歯車が噛み合わなければ、押し寄せる瓦礫に全身を擦り潰されて死ぬと言うのは余りにも明白。だが、少女は止まらない。

その狂気すら感じさせる進撃を前に、空にて待つ彼女は思わずといった様に全身を震わせ、己の身を抱きしめていた。

恐怖からの震えでも武者震いの類でも無いその震えで全身を覆い尽くされた彼女は、大好物を前にした幼児の様に眼を輝かせながら赤くなった頬のまま笑う。

「嗚呼……あかんよぉ、そんなに刺激的なもん見せつけられたら……濡れてしまうやろ？」

その瞬間、瀑布の頂点へと至った少女がその血塗れの全身をバネの様にしならせながら跳躍する。

明らかに弱者である筈の彼女が己の力量を遥かに超える筋力を引

き出した代償は凄まじかった。皮膚の下で血管や筋が破断した事を示す青い斑模様で覆われていない四肢など存在せず、恐らくその服の下の華奢な肉体も同様であろう。
最早、この戦場を切り抜けたとしても健常な生活など送れぬ程の損傷。だが、少女の顔に後悔の念も恐れの念も見受けられはしない。それは中禅寺にとって、己の一生を賭けたとしてもお前を殺し尽くすというメッセージに他ならなかった。
かつて殺し損ねた最愛にして無力なる捕食者よ。姿形が変われどその眼を、この犠牲を厭わぬ前進を誰が見間違おうか。
嗚呼、本当に――
「壊してまうんが残念やわぁ……。前の身体やったら殺せたかも知らへんのになぁ？」
刹那、跳躍した少女の胸へと赤い線が刻まれる。不可視の斬撃。音も無く相手に刻まれた鮮血伴う傷によってのみその存在を認識可能な一撃の前に、少女の先程までの未来予知じみた回避行動も虚空では意味をなさず真一文字に胸から吹き出す鮮血。反射的に盾にしようとしたのか胸の前へと添えられた白い缶は容易く両断され、中の無色の液体が彼女の傷へと降り掛かりながら彼女の鮮血と混じり、周囲の空中に浮かぶ瓦礫へと降り掛かり鉄の香りを帯びた絵画を制作する。
苦し紛れだろうか。少女は手にした拳銃を上空に立つ中禅寺へと投擲するも、それは何ら痛痒を及ばさないだろう。
重力の軛に捉えられ、地面へと落下する少女へと愛しげに手を伸ばす中禅寺。その顔は情欲に満ちており、まるで恋人へと一夜を共にした後に手を差し伸べ愛を確かめる女の様な雰囲気すら漂わせていた。
少女が彼女の初撃をナイフで弾く奇跡を見せてから僅か数十秒。奇跡に奇跡を重ねて作られたこの一幕ももう終わり。奇跡は品切れ、羽をもがれた天使は哀れに堕ちるのみ。さぁ、これにて閉幕――
「勝っ……た……！」
羽をもがれた天使は堕ちるだけ。だがそれは何ら彼女の敗北を意味しない。
無表情で染め上げられたその顔。痛みにも恐怖にも動かず、胸へと

一撃を喰らったとしてもピクリとも動かなかったその表情筋が動く。口角を上げ、頬を吊り上げたその顔を第三者が見ればこんな感想を抱くだろう。即ち、『勝利を確信した笑顔』だと。

その言葉に呆けた様な表情を浮かべる中禅寺。次の瞬間、彼女の視界へと割り込むは先程下方より投擲された黒く煙を上げる拳銃。

待て、煙？微かな違和感に気づき、注視すればグリップの部分に深々と突き立てられたナイフの刀身。マガジンが収められている銃の持ち手を軽々と貫通し、黒く煙を上げながら徐々に白熱していく刀身と込められたマガジン。

他の国が通常のこの世界で作られた技術体系に基づく光学銃を運用する中、荒れ狂う異界由来のエネルギーを日本の超科学により頑強に作られたマガジンへと封入し、強力なエネルギーを歩兵でも発射出来る様にと設計された光学拳銃。

その頑強な外殻へと突き立てられるは、同じく日本の技術の髄を凝らして作成されたモース硬度においてはダイヤモンドすら上回る数値を誇る材質を加工して作成された刀身。

風では防げぬ熱線を発生させるエネルギーを封入したマガジン。それに突き立てられたナイフは何を意味するか。

其れを小規模で良くても体験したいのならば、よく振ったコーラの缶にカッターナイフを刺してみると良いだろう。

即ち――――爆発だ。無数の奇跡を積み上げて作られた絶死の一刺し。彼女を死に至らしめる致命的な策略。

だが、少女は一つミスをした。風では防げぬ光線を伴う爆破。成る程、風を操る彼女の異能だけでは防げまい。

しかし――――戦場たるこの虚空にはたった今、瓦礫が溢れているのだ。盾にするには事欠かぬだけの量が地面から巻き上げられ、空中にある。主目的たる少女の殺害こそ叶わなかったものの、彼女の身を守る盾にするには十分だ。

「一手、うちが上や。」

くい、と招き寄せる様に手を素早く動かせば彼女の操る風に巻かれ、一瞬で彼女の周囲を一分の隙間も無く埋め尽くす瓦礫達。彼女の

目の前を最後の瓦礫が覆い尽くしたその刹那、炸裂する異界のエネルギー。
外の光すら入らぬ程に組み上げられた幾重もの防壁をもってしても外界にて吹き荒れる爆破の熱を止める事はできず、瞬間的に温度の上昇する岩のシェルター内で汗一つ流す事なく無言で佇む中禅寺。
それは何処か恋人を亡くした傷心の女の様であり、或いは長年の夢を叶えた無邪気な子供の様でもあった。
この高さだ。生きてはいまい。仮に受け身を取ったとしても、胸に放ったあの傷からの大量出血で少女が死ぬ事は見えている。嗚呼、本当に素晴らしい存在だった。よくぞ此処まで己を追い詰めた物だ。
漂う仄かな甘い香りが鼻を撫でる中、中禅寺は遂に死へと誘う事に成功した愛しい存在を想起しながら……待て、甘い香り？
瞬間、力を失い膝を突く彼女。白い霧が密閉された岩の防御壁の中に充満し、同時に彼女の肺を満たしていく。瓦礫の封鎖を一部解除し、風で霧を追いやろうとするが時すでに遅し。甘い香りの毒は彼女の動きを既に麻痺へと陥れていたのだった。
咄嗟に手を瓦礫の表面へとつけば、ぬるりとした感触。彼女の意識の喪失に伴い崩れ始めた岩の防御壁の隙間より差し込む光で照らされたのは――夥しい血液。
『何か』にコーティングされ、瓦礫へと塗布された血液が織りなす絵画が描かれた瓦礫が防御壁の内側へと紛れ込んでいたのだ。其れ等は外殻のすぐ近くで吹き荒れた異界の膨大なエネルギーの熱に影響され、本来の性質を取り戻したのだ。少女の血で濡れた瓦礫が、その面をこちら側に向けて防壁の最も内側へと組み込まれる可能性は何パーセントだ？偶然なはずが無い。此処まで来れば分かる。全て、全て『彼』の手の内だったのだ。自身が負う傷も、彼女の行動も。
否、例えそれを全て予測できたとしても実行出来るか？死との綱渡りを繰り返し、何より己の予測した未来を此処まで愚直に想像できるだろうか？不可能だ。そんな事が出来る人間が居たのならば、最早『ソレ』を人と呼ぶべきではあるまい。
魔人、人外、悪魔の類。精神的な異形。

積み上げられたのは奇跡では無い。全ては必然だったのだ。持たざる者が一つずつ煉瓦を積み上げて作り上げられた策略という名の巨大な要塞は、最後まで相手にその存在を悟らせぬまま命を刈り取る。故に負けを知らず、その血塗られた道には勝利のみが輝く。

嗚呼、まさしく――――無能『無敗』。

中禅寺丹羽は未だ胸より消えぬ高揚の炎を抱いたまま、その意識を閉ざすのだった。

第十六話　銀色の姉妹

「密入国者共の死体は空間凍結コクーンに入れて外務省の鑑識にまで回しなさい！遺留物は全部回収！拘束したレジスタンス幹部の異能封鎖バンドは三重に付けといて！戦略級の異能行使者よ、護送中に拘束が外れたら首都ごと更地になると思いなさい！」

閑散とした世界から過去へと忘れ去られたかの様な廃墟群。栄華の限りを尽くす東京の影に埋没した数多の負の遺産の一つであり、3等市民にすら満たない日陰者達の溜まり場であったその地は今、恐らく大戦後で最大の賑わいに包まれていた。

空中を所狭しと飛び回る球状のドローンに、戦前より変わらぬ旭日章を制服に刻んだ画一的な顔立ちの警察官達が走り回る。青と赤のパトライトを備えたパトカーに、国防軍から引っ張り出してきたらしい装甲指揮車や一体何を相手にする心算なのだろうか、爆裂式の旧式の戦車まで瓦礫の転がる荒れた道へと乗り付けている始末。

その中でも一際目立つのは一人の少女。ボロボロの制服から傷一つない肌を覗かせながら赤いツインテールを風に靡かせ、声を張り上げる彼女の視線の先には巨大な冷蔵庫の様な灰色の箱へと両脇を二人の黒服の男達に抱え上げられながら運び込まれる拘束服に身を包んだ意識の無い女の姿があった。

周囲を取り囲む黒光りする防護服に身を包んだ数十人の兵士は常に銃口を突きつけ、それに加えて展開した戦車の砲塔の先も常にその女を追っており、その武装の過剰さがこの人物へと向けられた危険度評価の高さを表していた。

「チッ……全く姉としての面目丸潰れじゃ無いの……！」

舌打ちしながらも凛とした声で第三課異能調整局において異能犯罪の鑑識を担当する部署へと下知を下す少女の制服が擦り切れ、露出した肩にぱさりと灰色のコートが背後から被せられる。

少女が振り向けば剥き出しの剃刀の様な鋭い雰囲気を纏った背広姿の男が掛けていたサングラスを外し、少女へとその爬虫類じみた目を向ける所であった。

「餓鬼が一丁前に肩出してんじゃねぇよ。聞いたぜ、何でもレジスタンスの幹部に良い様にあしらわれたらしいじゃねぇか。何だって広域殲滅型のお前さんがこんな現場に出張っちまったんだ？」
「国家に忠誠を誓ったこの場にいる公務員にロリコンなんて居ないのでお気になさらず。それで？公安が何の用よ、木更津（きさらづ）。異能を用いた犯罪はうちの管轄（異能調整局）下の筈よ。それに何で来たかですって？弟から呼ばれたら何処にだろうと行くに決まってんでしょ。」
まるで父親と娘の様な身長差の二人であったが、まるで同年代の同僚と話す様な気負わぬ口調で進む会話。木更津と呼ばれた男は少女の言葉に驚いた様に目を見張り、肩を竦めた。
「こっち（公安）からも人は出してんだ。公安の俺が顔を出しちゃならんという道理も無いだろう。
しかしお前に弟が居たとは知らなかったな。イマジナリーブラザーなんて流行らんぞ。」
「失礼ね、実在してるわよ。更に言えばあの風女を捕縛したのもソイツ。」
「そりゃあ、姉弟揃って優秀な事で。しかし……これでまた一つ、この国も安定に近づいたな。」
草臥れたスーツの胸ポケットから取り出したシガレットケースから一本を抜き取り咥えれば、ライターの金属音と共に周囲に燻りだす紫煙。顔を顰める少女の視線を受け流し、男は空を見上げながら感慨深げにもう一息煙をその口から吐き出した。
「まだ煙草なんてやってんの？毒吸って何が楽しいんだか。」
「餓鬼にゃまだ分かんねぇよ。……なぁ、氷峰の嬢ちゃんは元気か。」
「難しい質問ね。今は元気そのものよ。」
ガシャン！という音と共に異能調整局のエンブレムが刻まれた灰色の扉が閉まり内部に女を収容した瞬間、その場に安堵の空気が漂う。中に女を収めた灰色の直方体が黒い護送車に運び込まれていくのを腕組みをしながら見つめる少女が何処か含みのある言い方をすれば、男は何処か遠くを見る様な目で言葉を続ける。
「そういう言い方するって事は昔は元気じゃなかったって事か？」

「一言で言うなら頑張り過ぎてたって所かしらね。トレーニングと任務の過密スケジュールが毎日。医務室での疲労回復のナノマシン接種が常習化してたわ。」
「上司なら止めてやれよ。アレは疲労を脳に無理やり忘れさせるだけの奴だろうが。」
苦虫を噛み潰す様な顔で嫌な予感が的中したとばかりに天を仰ぐ木更津の口から立ち上る煙が、空を覆う様な曇天へと立ち昇っていく。
脳の一部を麻痺させるナノマシンの常習化は深刻な障害を生む事に繋がる危険行為だ。どうなっていると咎める様にギョロリと目線を送る男に少女はどうにもならぬと言いたげに肩を竦めた。
「局長が放置しておけって言ったのよ。『彼』を超える為にやってるんだから、後に遺恨残らぬ様にやりたい事をやらせろって。」
「あの女の指示か……。全く、あの見た目で経産婦らしいってんだからな。奴さん、俺が見習いの時からあの見た目だってんだから驚くね。おじさんとしては若さの秘訣を伺いたい所だ。」
「……え？」
鳩が豆鉄砲を食ったような度肝を抜かれた顔で木更津の顔を見やる少女に、意外そうな顔で男は告げた。
「俺が知ってるのに直属の部下のお前が知らんのか。娘が居るらしいぞ、天威局長にはな。まぁ、あくまで噂なんだが。子育てとかどうしてるんだろうな。」
別に天威喪音――――アマイモンが腹を痛めて産んだ娘という訳じゃないんだが、というか魔神に生殖という概念が有るのだろうか、という様な思考が彼女の脳裏を過るが、此処で下手に口を出せば深刻な誤解が生まれる事を察知した彼女は強引に話題を逸らす。
「そんな下世話な話は置いといて！氷峰調整官の話だけど。」
「ああ、そうだったな……過去形で話すって事は『無能無敗』との勝負はあの箱入り娘の納得のいく形で終わったって事で良いのか？」
「異能行使有りの模擬戦で完膚なきまでにやられてたわ。まぁアイツ相手ならそのくらいしないと本気出してもらえないでしょうね。今

は吹っ切れて良い方向に進んでるわよ。」
　互いに想起するのはあの無表情の調整官。量産型クローンから生まれた特異個体であり、法務省最大のジョーカーたる彼に勝つ事に氷峰調整官が執着している事は一部の人間の間では有名な事だった。
　特に彼女の出身である『氷峰家』の事情を知っている彼にとっては彼女の強さへの貪欲な執着は危うさを感じさせる物であり、懸念事項であった。彼は肩の荷が降りたという様な溜息を一つ吐き、すっかり短くなった煙草の吸い殻を胸ポケットから取り出したバクテリア分解式携帯ダストボックスへと捩じ込みながら自嘲気味に笑った。
「まぁ、早めに『最強』を知っておくのは良い事だ。最強に張り合っても良い事ねぇからな。」
「あら。経験談かしら？元異能調整官の木更津クン？」
「まぁな。俺も昔みたいなちっこい小娘が自分より強い事を認められない餓鬼じゃ無いって事さ。嬉しいかね、元上司サマ？」
　肩に掛けられた灰色のコートを風に揺らしながら少女はかつての部下たる男へとクスクスと愉快気に笑えば、男もそれに応える様にその笑みを自嘲を多分に含んだ物から柔らかい物へと変化させた。
「それなりにね。氷峰調整官の事は任せなさい。部下の面倒は割と見るタイプの上司よ、私は。」
「ハッ、そうだな。その通り。お前は良い上司だった。俺も部下を持ったから分かるよ。」
　男と少女の間に柔らかな空気が流れたのも束の間、その空気へと水を差す様に上空を舞うドローンの一つが高度を下げ少女の前へと微かな駆動音と共に舞い降りた。
　プロペラも無しに中に浮かぶ灰色の継ぎ目の無いつるりとした機体の中央から覗く無機質なモノアイが少女へと向けられ、溌剌としているが何処か人間味を感じさせない合成音声がスピーカーから発せられた。
『こんにちは、赫羽焔課長。そして木更津国猛（きさらづくにたけ）理事官。ご歓談中に失礼致します。
　現在、赫羽焔課長は総理官邸からお呼び出しを受けております。至

急お向かい下さい。』
『官邸』。かつての超大国アメリカが次元の彼方へと消え失せ、その他の主要な国も先の大戦の影響を受け正常な状態では無い今、世界の権力の中枢とも言える伏魔殿からの呼び出し。
　それは大抵の場合、人生を一変させる様な素晴らしい話が告げられるか、その人生に終止符を打つ話が告げられるかのどちらかだ。だが、少女は何でも無い様にドローンへと告げる。
「分かったわ。すぐに向かうと総理にお伝えして。」
　役目を終えたドローンが上空へと戻るのを見送りながら肩に掛けたコートを脱ぎ、呆然と立ち尽くす男へと放れば少女はその全身を燃え上がらせる。その熱と光に正気を取り戻したかの様に男が今にも飛び立たんとする少女へと焦った様に言葉を放つ。
「オイオイ、何をしでかしたんだ？　クソっ、嘘だろお前！何したら『官邸』から呼び出しなんぞ食らうんだ?!」
　焦る男とは対照的に、落ち着き払った様子の少女がその男の素振りを愉快気な瞳で見ている事に気づいた男は深く溜息を吐き、首を振る。少女が嬉し気に男を指差し、年相応の笑みを浮かべながらその背中から燃え盛る紅蓮の両翼を凄まじい熱量と共に解き放った。
「心配ありがとう。でも私、呼び出されるのは初めてじゃ無いの。安心してもらって良いわ。またいつか、食事にでも行きましょう。積もる話も有るだろうしね。」
　次の瞬間、炎の放つ紅の光を残像として男の目に置き去りにした少女は空へと飛び立ち、都心へと羽ばたきながら加速していく。
　あっという間に豆粒程の点になった少女の熱が仄かに残るコートを羽織り、男は呆れた様にポケットに手を突っ込みながら歩き出した。
「……まぁ、アイツが上司ならそう話が拗れることも無いか。」
　だが彼の心は晴れない。曇天の灰色へと溶け込む様に空中を駆け回るドローン達の浮かぶ空を見上げ、この空の下の何処か――――否、もしかしたら別の世界かもしれない。未だに公安はレジスタンスの本拠地を発見できていないのだから。

「お前は今何処で何してんだ？唯一の妹を放っておいて……なぁ、憐歌（れんか）よ……。」
かつての己の友であり、今や彼が奉仕するこの国の不倶戴天の敵へと成り下がった彼女を目に眩しい風に靡く銀髪と共に思いだす。男の想いも、魔神の思惑も全てを呑み込んで東京という巨大な怪物は今日もその腹に無数の命と悲劇を抱えて胎動するのだった。

◆

「嘘……だろ……」
静まり返った場において誰かが漏らした声。この部屋に集う誰もが思った事を代弁したその呟きは、壁一面に広がるモニターへと映し出された光景を信じられぬ物を見た様な面持ちで見つめるその場にいる人間全員が放つ静寂の中に呑み込まれていった。
とある少女の異能によりその機能を国土交通省の中枢コンピュータより簒奪されたドローンが中継する映像を食い入る様に見る彼等の目線の先には、上空数十ｍに浮かぶ瓦礫によって作り出された球体を構成する都市の残骸達が一つ、また一つと滑落するのに混じり落下する水色の人影があった。
まるで天より堕ちるイカロスの溶けた翼の様に着物の袖を落下の空気抵抗にはためかせ、脱力した様子で落下していくその人影の名は中禅寺丹羽。レジスタンスにおいて実力、立場共にＮｏ．３の座へと君臨する彼女自らが臨んだ『回収』任務の成功はレジスタンスの怨敵たる法務省異能調整局最強と呼ばれる『狂乱の不死鳥』の排除に成功した事により確実になったかの様に思えた。
だが、その彼等にとっては確定したも同然の未来を覆したのは一人の少女であった。
己の血を媒介にガス状の麻痺毒を発生させるだけの異能保持者と見做され障害としてすら認識されていなかった少女は、其れを人間の行いと形容する事すら憚られる数分間の激闘の末に中禅寺を打ち倒したのだった。
こと戦闘において空想の上にしか存在しない最適解を全ての局面において選び取り、緻密に練られた奇跡とすら思える策謀の数々。ナ

イフと拳銃のみを手にし、己の身体の損壊を厭わぬその壊れた機械を連想させる悍ましい戦闘スタイルは否が応でもレジスタンスに所属する情報解析官達に一人の男の存在を想起させる事となる。
「まさか『無能無敗』の後継個体か?!」
「あり得ない!あの少女がクローンでは無い事は既に証明済みのはずだ!あの『無能無敗』の量産など考えたくも無い!」
「ならばアレは何だと言うんだ?!あのクソみたいな戦い方をする様な奴が二人もいると――――」
「落ち着け!アホの様に狼狽えるな、お前達!」
静寂から一転、最早パニックの域に陥りつつある喧騒を凛とした声が貫くと同時、後ろに一纏めにした美しい銀髪を揺らしながら黒色の軍服に身を包んだ女性が開け放ったドアを勢い良く閉じ、部屋の床を軍靴で踏み締める音を高らかに奏でながら、その白雪の様な繊細な顔から発せられるか弱げな印象を抜き身の日本刀の様な鋭い雰囲気で塗り潰し手を振るう。
「ミーナ!ドローンを爆破後に通信封鎖を解除しろ!奴が敗れた以上、法務省のＡＩによる直接の逆探知の恐れがある!空間断絶帯への負荷を一時的に増幅して侵入者に備えろ!総員、甲種臨戦配備にて別命あるまで待機!」
生まれながらにして人の上に立つ事を定められていたかの様な彼女のカリスマは恐慌状態にあったその場を瞬く間に鎮め、烏合の衆であった彼等を元の有能なスペシャリストへと戻す事に成功していた。
ミーナと呼ばれた黒髪の少女の手が高速で動きキーボードを叩く無数の音が響くと同時、勤行に臨む僧侶達の様に整然と並ぶ液晶画面へと命じられた処置を実行している旨を告げる通知が表示される。
液晶の光を赤縁の眼鏡に反射させながらミーナが彼女の方へと顔を向け、指を猛然とキーボードの上で踊らせながら抑揚のない声で疑問の声を彼女へと発した。
「質問。中禅寺丹羽の救援部隊の手配の指示が未だ発令されていません。此れに何か意図がありますか?」
「必要無い。奴とは『自衛隊』からの付き合いだからな、よく分かる。

奴の生存本能からすれば法務省に身柄を拘束される事など屁でも無いだろうさ。それに、だ。」

全幅の信頼を置くが故の余裕を声に滲ませながらその白手袋を嵌めた手で真っ黒な軍帽を整え、アメジストの様な美しい紫色の瞳を強い信念に煌めかせる。己の進む道が見えている者特有の光を瞳へと宿すレジスタンスのリーダーこと、元国防軍准将氷峰憐歌（ひょうみねれんか）は己の小指へと嵌められた黒色の指輪を撫でながら笑う。

「今頃、銀の色に飛びついてきたバッタが我々へと恩を売ろうとしている頃だろうさ。」

世界最大の国家にして、魔神の操る糸に絡められた傀儡である日本に正面を切って敵対する最大の組織、レジスタンスの長たる彼女の顔には見る者を心酔させる、勝利の確信に満ちた笑顔が踊っていた。

第十七話　『反抗声明』

『模範市民の皆さん、本日の労働を開始致します。戦時下である今、皆様の労働が我が国の血肉となり未来を切り開くのです。模範市民の皆さん……』

この国から朝日が消えて久しい。太陽の無い朝の訪れを告げる、重金属を多分に含む黒色の雲の下を飛び回る無数のドローン達の背面に鮮やかに描かれる白地に描かれた赤い円だけがこの国において唯一の太陽であった。神聖ライヒ＝ユーロ同盟の猛攻に押される形となったロシア共産連合体が発動した気象破壊兵器は世界から日光を奪い、貧しき者からは温もりある生活を奪ったのだった。

乱立する高層ビルの屋上に取り付けられた投影機から上空へと通じ出されるホログラムの中では、見る者に硬質な印象を与えるスーツを着こなした金髪の美女が手を振るい眼下の国民へと熱弁を振るっていた。

『諸君！君達は細胞である！この国という大喰らいの生命体を構成する尊き部品だ！其れは総理である私も例外では無い！我々はこの国を存続させねばならない義務がある！我々はこの戦争に正義の名において勝利する義務がある！

だと言うのに、この国を構成する細胞でありながらこの国をより良くする努力が出来ない者は癌だ！私は諸君等がその様な存在では無い事を心の底より――――』

其れに見下ろされる形で朝の出勤をする群衆達の顔には一様に無表情が浮かべられていた。

多くの民需工場は軍需工場へと姿を変え、生活用品にすら事欠く始末。明らかに過剰な迄の兵器作成が行われ、防衛戦争を謳いながらも無限に広がり続ける戦線は海を越え、果てにはこの世界の人間だけでは無く異界の存在とまで戦火を交える迄拡大を遂げた。

凡ゆる情報は封鎖され、インターネットは今や国家の広報センターへと成り果てた。

テレビは国家への礼賛を壊れたスピーカーの様に毎日垂れ流す機械へと変貌し、凡ゆる家庭には防諜目的として監視装置が取り付けられ、其れに反抗した人間は何処かへとその身を消す事となる。

世界の壁をこじ開ける異界への門を世界中にばら撒き、日本という国の中枢に巣食う魔神の愉悦の為だけに大戦が引き起こされ、何の意味も思惑も大義も無く、只管に無為に圧政を敷いている事など露も知らずに、ただ黙々と目の前の仕事をこなすだけのロボットと何も変わらぬ者達へ彼等を扇動する者達の言葉が響き渡る。

『我々は誇り高き市民なのだ！』

『我々の国は自由と平和を愛する偉大なる国家である！』

『海の彼方にて戦う国防軍は国民の生命財産を守る為ならば如何なる犠牲をも厭わない！』

『我々こそ、この大戦を生き抜き新たなる時代にて人類を導く選ばれた存在である！』

繰り返され、疲労に浸かった脳へと刷り込まれていく言葉達。

何故、祖国の防衛を謳いながら国防軍は海を隔てたユーラシア大陸で、北米大陸で戦わねばならぬのか。

一体いつから、あの金髪の美しい総理大臣は我等の上に立っているのか。

そんな疑問は日々繰り返される労働と、農業プラントの大半を軍事用科学プラントへと移行した事による深刻な食糧不足からなる飢えに洗い流され、荒れ果てた心の大地にプロパガンダが染み渡る。

『諸君！君達にはまだ未来が残されている！この国が勝利を手にした暁には必ずや君の家族の元へと帰り、共に過ごす日々が訪れるだろう!!』『だから弛まず奉仕し続けようではないか!!我らが祖国の勝利の為に!!!』

『『『万歳!!!』』』

『『『『万歳!!!』』』』

『『『『『万歳!!!』』』』』

彼等は知らぬままに量産される歯車として消費され続ける。既に大戦は終結している事を、勝者たるこの国には最早戦火への備えが必

要ない事を知らされず、この国の為と嘯く政府の声に従い、何も知らぬ傀儡達は自由と幸福を謳うたった一人の魔神の享楽の為だけに酷使され続ける。

嗚呼、正しくこの地はディストピアなり――――

◆

時は暫し巻き戻る。

「クソっ、自爆のつもりか?!ワシントンのど真ん中で異界に穴をぶち開けやがった奴は何考えてやがる!こちらアイボリー・5!旧連邦庁舎前で異界由来の物と見られる敵対的生命体を発見!道を埋め尽くしながら此方に向かって来てる!至急増援を求む!」

アメリカ合衆国。世界の警察と呼ばれる程の軍事力を誇り、世界の覇権を握っていたこの国が存在していたのは遥か昔。

異能保持者への差別に端を発する国家内の断裂は深刻さを増し、遂にはロッキー山脈を挟んでの国家の分裂にまで事は及んだ。

一時は平和的に二つの国家へとその身を分けたアメリカ合衆国だが、世界を巻き込んだ大戦の混乱は二度目のシビル・ウォーを引き起こす事となる。

サンフランシスコに首都を置き、アメリカの西側を統治すると同時に異能保持者の人権擁護を主張するアメリカ太平洋共和国は大戦の勃発と同時に日本と軍事同盟を締結。『再び自由なアメリカを』をスローガンにアメリカ東部を統治するアメリカ合衆国へと宣戦を布告した。

それと同時に日本は国防軍北米大陸方面軍を組織。未成年の異能保持者を含む5個師団を派遣し、彼等は未だ異能保持者に対するドクトリンが一般的で無い中で猛威を振るいながら共和国軍と共にアメリカ合衆国へと猛攻を加え、ワシントンへと迫る彼等の前に今や勝利は目前と言えた。だが、首都を守る合衆国軍の己の身を顧みぬ必死の攻撃は彼等の進撃を鈍らせていた。

「にく!にくがある!」

麻薬を吸引した徹夜の芸術家が創り上げたかのような、生物としての法則を忘れてしまった形状の全身から舌を生やした大型犬が強酸

の涎を撒き散らしながら兵士へと突進する。
全身を物々しい黒光りするパワードスーツで覆った兵士達が手にした銃から弾丸をばら撒き、迫り来る犬の形をした悪夢達を挽肉へと変えていくが、空中に揺らぐ鏡面の様な物から津波の様に溢れ出す化け物達の前には砂漠へとコップの水を注ぐ様な所業に等しい。
だが、その砂漠へと大海の波をぶち撒けるが如き規格外の暴力がこの兵士達の命を救う事となった。
「あーら、こない躾のなっとらへん犬は初めて見たわぁ。何や、異界にはブリーダーの一人も居らへんの？」
兵士達を守る様に吹き荒れるドーム状の鎌鼬は触れた怪物達の鮮血を天高く巻き上げながらその規模を拡大していく。
周囲の建造物を切り刻み、瓦礫へと変貌させながら瞬き程の速度で怪物の大群を血煙へと変換したその少女は軍服の腰から赤色の幾何学模様が刻まれた拳銃を抜き放ち、未だ空中で揺らめく鏡面へとその弾丸を放った。
風を纏いながら虚空を走るその弾丸は怪物を出現する端から切り刻む風に影響される事なく突き進み、その空間の揺らぎへと突き刺さるや否や赤色の閃光を撒き散らす。
兵士達があまりの眩さに目を覆い次に視界を取り戻した時、その場にかつて悪夢の如き犬達が居た事を示す物は地面に散らばる紫の血液のみであった。
「おお、ええ仕事するやないの、大東亜工業。これで異界問題も解決やねぇ。」
風に舞い顔へと掛かった初夏の葉を思わせる緑の髪を手で背後へと払いながら、異界へと通じる小規模な歪みを修正する弾丸を撃ち出した銃を腰のホルスターへと仕舞う少女。次の瞬間、静寂に包まれていたその場が兵士達の歓声で溢れかえる。
「うおおおお!!!」
「すげぇな、あの日本人！噂の『ヴァルキリーズ』の一人か？」
「ありがとよ！お嬢ちゃん！」
育ちの良さをその上品な所作に滲ませるその少女は年相応の笑顔

を浮かべながら照れ臭げに手を振るが、その耳につけたインカムからは深々と溜息が漏れ出る。コツコツと何かを叩く音からインカムの向こう側にいる人物の呆れ具合が見える様であった。
『中禅寺中佐、煽られて照れてる暇があったらホワイトハウス前にとっとと来い。そろそろ陥落する頃だ。』
「何やのもう……。もうちょっとええ思いさせてもらってもええや無いの。うち等、まだ未成年やっちゅうんに戦場にまで出張って来てるんよ？こんくらいの得はさせてもらってもええと思うんやけどなぁ。」
もう一度手を振り、風を纏いながら地面を蹴って飛翔する少女。
黒煙が立ち上るワシントンの空を気ままに飛ぶ彼女へと合衆国空軍の生き残りが駆る戦闘機が迫るが、搭載した光学式カノン砲が火を吹く前に彼女の指の一振りで爆炎と共にその身を鉄屑へと変えながら墜落していく。
『口を慎め、中佐。祖国の為だ。この戦争が終わってからの国家からの賞賛にその照れは取っておけ。』
「はぁい、准将殿。」
数度の無人機からの襲撃を難なく迎撃し、地上にスクラップを数体増やしながら彼女は己の上官がいる地点目掛けて飛び続ける。
最早、ワシントンの陥落は時間の問題だ。組織的な抵抗は終結しつつあり、前線へと半ば奴隷の様な扱いで駆り出されていた数少ない異能保持者の軍人も異能を前提とした軍事訓練を受けた日本の異能行使者達によって戦争の初期に掃討されていた。
アジアでは日本がユーラシア大陸を東から、ヨーロッパでは同盟国たる神聖ライヒ＝ユーロ同盟が西から攻略しており、両軍が出会うのもそう遠い話では無いだろう。もうすぐこの未曾有の戦争も終わる。そうしたら何をしようか。
かつては煩わしかった学校での勉強も今では懐かしく、魅力的に感じるものだ。恋もしてみたいし、戦後に払われる軍人年金で一生ごろごろしながら暮らすのも良いかもしれない。
日本の情報はとんと入ってこないが、今はどんなファッションが流

行っているのだろう――

そんな取り留めもない事を夢想しながら空中を推進する彼女に上空から影がさす。

上空を見上げれば銀色の剣の様な細身の機体が無音ながら凄まじい勢いで上空を駆け、彼女を追い越す所であった。その横腹には所属を示す赤い円。国防軍が誇るステルス機は更に速度を上げ、上空へと大地に垂直にその身を高く運び彼女の視界から消え去るのだった。

「変やねぇ……？もう終わるちゅうんに今更出張って来て何のつもりかいな。」

『どうした？何かあったか？』

「何やけったいな速さで空軍の戦闘機が上に飛んでったんよ。何か知っとりはる？」

『ふむ……？既に制空権の大半は抑えているし、宙権宇宙においての制空権はとっくの昔に空軍が抑えていた筈だが……。』

「何や、准将やっちゅうんに知らへんの。」

『本土に問い合わせておく。我々の知らぬ脅威への対処かもしれんからな。』

彼女達が会話を交わす遥か上空。次世代型国産戦闘機『天叢雲剣』のパイロットが本土と交信を交わしていた。

パイロットの口調からは隠しきれぬ困惑と躊躇の色が滲み、それに対照的な無機質さすら感じさせるオペレーターの声が返答する。

「こちらイーグル・1。話が違うぞ。先程友軍をレーダーだけでなく目視でも確認した！」

『イーグル・1、貴官の誤認である。任務を遂行せよ。』

空中に投影されたホログラムは地上で動き回る無数の友軍識別コードを赤い点として映し出し、パイロットの判断が間違っていない事を如実に示していた。だが、オペレーターの鉄の様な冷たさを孕む声は無感動に告げる。

『繰り返す、イーグル・1。現在、敵首都ワシントンD・C・に友軍は存在しない。これ以上誤認が続く様であれば敵による対認識攻撃を受けたと見做し、感染を防ぐために機体ごとの除染を行う。』

「……子供が居たんだぞ。」
『それが最後の言葉で良いのか？』
「……こちらイーグル・1。友軍は確認出来ず。投下を開始する。」
剣の腹に当たる下部の格納庫が開き、虹色の燐光を纏う小さな黒色の物体が投下される。
それは是より眼下に地獄を創り出す物にしては余りにも小さく、そして余りにも呆気なく雲海を通り抜け大地を目掛けて重力の導かれるままに落下する――友軍犇く大地へと一直線に。
『キャッスル了解。直ちに帰投せよ。』
「イーグル・1。了解……！」
顔を憤りに歪め、衝撃波と共に音速で日本目掛けて飛ばんと操縦桿を握るパイロット。
下を見るまいと努力しながら彼は、これから飛行機に乗る度に罪の意識に苛まれる事を覚悟する。だがそれは杞憂だろう。日本に着いた彼は、そう遠くない内に『事故』に見舞われる。
それが彼が日本でこの機体に乗り込み、命令を受けた瞬間に決定した未来だった。
「氷峰准将、中禅寺中佐がお着きになられました。」
「中禅寺中佐、参上しました！それで何や分かりはった？」
「取り繕うなら最後までやれ……。いや、何も。それどころか本部が応答せん。」
ホワイトハウスを囲むフェンスはひしゃげ、正面の芝生は鮮血と何かの壊れた部品でかつての景観を完全に破壊していた。
其処に建てられたテントの中、正面に立つ警備の兵士に出迎えられながら少女はぴしり、と文句のつけようも無い完璧な敬礼を行う。
だが直ぐにその纏う凛とした雰囲気を霧散させながら、銀髪を後ろに結い上げた少女の座る机へとドンと手を突き、上官に向けるには相応しくない砕けた口調で話しかける。だが周囲の兵も苦笑いしている所を見ると、これはこの戦場に居る者にとっては日常の事らしい。
そんな周囲の反応もお構いなしに話を進める中禅寺と呼ばれた少女は、不思議そうな顔でその顎に思案する様に指を当てながら首を傾

げ、周囲に立つ兵士達へと質問を投げかける。
「変やねぇ……？こっちのレーダーは問題の機体を確認しとるん？」
「其れなのですが、新型機体で有るらしく此方のレーダーでは捕捉できていません。見間違いという線は……」
「それは無い。こんな巫山戯た奴だが、そんな詰まらん見間違いをする様な奴では無いというのは私が一番知っている。」
「うち、視力2．0やしねぇ。」
　であれば何故、現地に展開している我々に何の連絡も無しに新型機体を此方へと派遣して来たのか。
　謎は深まるばかりであり、アメリカ合衆国の攻略完了を目前にして新しい問題が発生する事が無ければ良いが、と皆が話していたその時、テントの外より兵士達の騒めきが響き始める。作戦の終了を前に気が緩んでいるのかと思えば、その声は次第に切羽詰まった色を帯び始める。
「何事だ！」
　立ち上がり、軍服の裾を翻しながらテントを出た少女の顔が驚愕と戦慄に凍りつく。
　何事かとそれを追い、テントから出てきた他の兵士達も一様に空を見上げながら凍りついた。
　巨大な『黒』が空に浮いていた。
　奥行きも何も感じさせぬ、ただ只管に単色の黒き厚みのない円が空へと当然の様に座し、自らを見上げる人々に頓着する事なく刻一刻とその大きさを拡大させていくその様子は何処か薄ら寒い者をその場にいる全員に感じさせるに充分であった。
「何やの……これ。」
　次の瞬間、黒色の円は爆発的にその形を広げる。
　早回しで空を撮影しているかの様に天蓋を覆い尽くすその『黒』は太陽光を遮り、一瞬にしてこの地を夜の様な闇で包み込む事となる。それと同時に各所で悲鳴が上がり、何事かとそちらを見ればまるで何かに吸い寄せられる様に天空を目指し廃墟と化した都市内の無数の瓦礫が『落ちて』いく所であった。

否、瓦礫だけではない。車両も、兵器も、そして人すらも。
皆等しく狂った物理法則に誘われ空へと落ちていく。その先に待ち構える『黒』に接触すれば何が起こるのかは直ぐに分かる事となる。
消えた。消え去った。其処に元から存在しなかった様に消えていった。『黒』に触れた物は一切の痕跡を残さず消えていく。
それは非生物も、生物も変わらない。一切の区別無く大地に犇く全てを消し去らんとするその『黒』は、無慈悲に己へと万物を引き寄せていた。
「中禅寺！」
「やっとる！だけど何時迄も保つもんでもあらへんよ！」
銀髪をその引力に乱されながらも己が最も信用する副官へと手を振れば、以心伝心の様に周囲へと逆に地面へと吹き付ける風を展開する中禅寺。
一時的にその場にいる者達の延命に成功したものの、永遠に異能を行使し続ける事が可能な訳が無い。これが敵の攻撃であれ、はたまた自然現象であれ、助けられる人間だけでも本土に撤退させるべきである。
氷峰准将は彼等が海を渡るのに使用した転移ポータルの起動を命じるも、それは更なる絶望を生む事となった。
「ダメです！本土側のポータル、ロックされています！」
「バカな！再起動してやり直せ！」
「もうしています！反応変わらず！」
本来あり得るはずのない反応。それは本土側からの意図的な封鎖であり、彼等をこの場から逃さぬという日本からの意思表示。
あり得てはならなかった。彼等は外敵と戦い、祖国の平和と自由を守る為に血を流し、未だ国家の庇護下に有るべき年齢である者達は己の青春を国家へと捧げ、此処にいるのだ。
なのに、なのに。
「まさか……さっきのあの戦闘機は……！」
何故だ。分からない。本当に分からない。勝利を目前にして、何故敵ごと我等を葬り去らなければならないのか。

私達は、此処で祖国の手で死ぬ為に戦ってきたのか？こんな、こんな死に方をする為に。
大地が引き剥がされ地中の地下鉄が天を舞い、半ばからへし折れた高層ビル達が空を目指す鳥の様に天空へと登り行く。
宛ら黙示録の光景の中、展開された風の結界もその効果を減少させつつあった。
少しずつ、少しずつ天空へと浮かびゆく彼等。泣き叫ぶ者も、怒りを露わにする者も。皆一様に死への飛翔の手に捕らえられ、天空へと浮かんでいく。
だが、『黒』との接触を待たずして彼等の最期は訪れる事となる。
その天空からの引力に耐えられなくなった大地が捲れ上がり、無数の瓦礫が津波の様に押し寄せる。全てを呑み込みながら、天上へと至る逆転した瓦礫の大瀑布。其れに呑まれ、中禅寺の右手に凄まじい激痛を感じた瞬間。この場に似つかわしくない声がその場に響いた。
『ねぇ、助けてあげようか。』
そんな幼い少女の声と共に、白色の光が彼等を覆い尽くし――――

「……何やもう、えらい昔の夢見とったわ。」
ゆっくりと開かれた瞼の下のエメラルドの様な目から涙が零れ落ち、彼女の顔を伝った。
揺れる護送車の中、両手を拘束具で胴体に固定された快適とは言い難い場所で彼女は目を覚ます。
周囲にいる筈の護送の警備員の姿は無く、運転席に座った一人の男の派手なアロハシャツだけが無機質な護送車の内観から異様に目立ち、彼女は拘束されたまま苦笑した。
「おう、お目覚めか。……泣いてんのか？」
「欠伸してしもうただけよ。それで？何の用件かいな、裏切り蝗はん？」
男は振り返りながらそのサングラスを外し、両目とも義眼の眼球をぎょろりと彼女へと向けながら笑う。
「商談に来たのさ、囚われのレディとね。」

第十八話　魔神の一手

落ちていく。胸部に走る激痛。重力に従って力無く落下する華奢な肉体の残像はむせかえる程の鉄の匂いを纏っていた。傷口から鮮血が溢れ出し、口から血塊をゴボリと吐き出しながら死の冷たい指が自分の肩へと添えられるのをどこか他人事の様に感じながら、喉に迫り上がる血塊を口の端から垂れ流す。

臓腑がその落下に付いて行けていない様な独特な感覚が腹の内を駆け巡り、脳内で垂れ流されるアドレナリンが意識を引き伸ばす。失血と疲労で霞んだ視界に映るのは遥か上空で、不可視の風によって構築されていた瓦礫の防壁が密閉効果を失った事で溢れ出す白い霧。

そして――俺を後追いする様に落下する目に鮮やかな水色の着物の人影。

勝ったのか。

その事実を何処か他人事の様に俺は感じながら、未だ闘争に備え荒れ狂う脳内を久方ぶりに休められるという甘露の如き安堵に身を埋没させる。長時間繰り返した死に戻りの後は、つまりは死が日常の数ヶ月は酷く自意識が曖昧だ。戦闘の為に最適化された機械的な思考の海を痛みが駆け巡り、この常人の精神が狂いそうになる度にリセットされる脳味噌が予想と整理を繰り返す。

次はどうする。この瓦礫を避けたその次は。指をどう動かせば良い。どうやって彼処の瓦礫に己の血を飛ばす。筋肉の一つ一つに思いを馳せ、辿り着くべき微かな光明へと無数の死を積み上げる無限に思える……そして恐らくはその光明を手に収めなければ無限に繰り返されるであろう血生臭い回廊を走り抜け、がむしゃらに脳裏に描いた妄想じみた結果に辿り着く為だけに持ちうる全てを出し切った。

嗚呼……だがどうやら、死の回廊の出口に見えた光はまやかしであったかもしれない。この世界に生を受けてから何度もお世話になっており、最早幼馴染と言っても過言では無い死神が笑顔で俺が地面に叩きつけられ、真紅の徒花を咲かせるのを待ち受けているのを感じる。もしも死神が本当に居たとするならば――魔神が居るんだか

らあながち妄想という訳でもないだろうが――俺一人で死神としての生涯ノルマを果たしているに違いない。幼馴染だからって調子に乗るなよ。金取るぞ。

幼馴染というワードに反応した疲労の極みにある脳が、セーラー服を纏った全身骨格を連想しつつある事に我ながらげんなりしつつ、数瞬の後に来たる死へと諦観と共にその身を委ねようとしたその時。閉じられんとした瞳が目の端に紅蓮の閃光を捉える。太陽かと見紛ったそれはその大きさを瞬く間に――実際には瞬きよりも速く――その温かな光で視界を満たす程に増し、此方へと勢い良く飛び込んできたかと思えば、何か柔らかい感触が俺を包み込む。

疲労のあまり目に滲む涙に歪んだその光から伸びる腕。鼻を擽るは鉄錆の中に混じる少女が纏った微かな花の香り。

凛とした顔に焦りと安堵を浮かべたその可憐な顔は瞬時に展開された炎の両翼の極光にかき消され、その残像が光と共に俺の網膜へと焼き付けられる。

重力の軛に囚われるままに落下し、臓物と鮮血の芸術へと成り果てる筈だった身体に仄かな温かさを持つ手が触れるのをぼんやりと感じ、少女の背より伸びる両翼が生じさせた浮力が同時に浮遊感を臓腑へと奇妙な感覚と共に与える。落下死の憂き目を逃れた事実に対し、今やほぼ麻痺している死への忌避感と其れを免れた事によるほんの少しの安堵が温かさとなって心へと沁みていく。なんと、まだこんな感覚が残っていたかと驚きつつも重い瞼を無理矢理に開けば、鮮明な視界に広がる泣き顔が其処にはあった。

「ごめん……私が付いてたのに……！あんたが助けを呼んでくれたのに……！」

暴風と業火によって蹂躙された結果、今や鉄筋の欠片すら残っていない廃ビルの跡地へと俺の身体をゆっくりと労わる様に横たえた少女の焼け焦げた制服から露出した背中から伸びる炎の両翼が彼女の心中を表す様にゆらゆらと儚く揺れる。

何時もは勝ち気な表情を浮かべたその顔は悔しさとやるせ無さが入り混じった表情に彩られ、紅の瞳には涙すら浮かばせる真面目すぎ

る少女に思わず笑みを浮かべようとするが、上手く表情筋が動かない。こういう時は永久休職してしまった表情筋が恨めしい。そして無論、己の直属の上司であり名を分けた存在である彼女――即ち、赫羽焔（あかばねほむら）が今回の闘争において無力であった事を責める気は毛頭無い。

異能行使者という人の身でありながら超常を行使するその特異な存在にも、無論異能の強弱という物がある。自らの身体の一部を時間制限下で動物由来の物に変化させたり、ほんの少し指先に炎を纏ったりする様なこの世界においては取るに足らぬ異能から、単身で大都市を壊滅せしめる異能までその幅はピンからキリまでだ。

その中でも最上位。戦略級と呼ばれる単身で戦争の行く末を左右する事が可能な異能行使者は核に等しい扱いを受け、存在するだけで抑止力となる事を期待されるトップクラスの異能を彼女はその小さな身体に宿している。

その戦略級の異能の中でも特に異質。再生、飛行、そして金属を融解せしめる炎を広範囲へと展開する複数の能力が複合された彼女の異能『不死鳥』はその強大な力故に、その能力を振るう上で最も懸念すべき事は敵を如何程に殲滅できるか、では無く味方への被害をどれだけ減らせるのかであると称される程。

故にこそ彼女は人類二大生存圏たる日本の首都では、たとえこの打ち捨てられた区画であったとしてもその全力を発揮する事が出来ない。彼女の本来の舞台は大規模な異能犯罪の『土地ごとの滅却』などの最終的な解決が求められる任務。同じ戦略級の異能行使者であり、その戦闘経験は大戦途中から連綿と実戦下で積み上げられ続けている中禅寺丹羽に対し、よくもまぁ中学生程の年齢でありながらも荒れ狂う不死鳥の炎を抑制し、あそこ迄張り合ったものだと逆に感心するほどだ。

それにこの目の前の少女が己の得手不得手を理解していない筈が無い。

俺の意図しない形で発せられた名前を口に出した事による救援要請に対して、他の人員を向かわせる事が出来たにも関わらず、課長は

危機に瀕しているであろう俺の下へと一刻も早く向かう為に自身の異能が十全に振るえない状態であることを察しながらも此処に赴いたのだろう。
腹黒魔神の次くらいに俺に激務を押し付けてくる彼女だが、苛烈な上司であると同時に俺の事を名前を分けた『弟』として混じり気のない思いを向けてくれる『姉』でもある。まぁ俺は中学生ぐらいの年齢の(見た目も残念ながら年相応の)彼女を姉として見た事は無いが、この全くもって救えない世界において信用している数少ない人物の一人だ。そんな彼女を俺がどう責められようか。
いやでも、俺を助けに来たのに割と死因になってたのは擁護し難いかもしれない。上空で怪獣大決戦している間に下で必死こいて上空の戦闘の余波から逃げていた俺の死因としては、はんなり姉御による鎌鼬での三枚おろしよりも課長の攻撃の余波の方が多い。
何故かって？課長が羽ばたく度に灼熱の羽毛が舞い散るし、肉体が傷付けば燃える血の滴が俺の頭上に垂れてくるんだよ！滞空してるだけで俺に弾幕ゲーを無意識に仕掛けてくるから途中からどっちが味方か分からなくなってきたくらいだった。
――ああ、でも。それでも。この世界で俺の為に泣いてくれる彼女は間違いなくかけがえの無い存在なのだろう。
そのルビー色の瞳から雫が溢れ、その小さな水滴にすら込められた微かな不死性が俺の傷を僅かに癒すのを感じながらぼんやりと思う。
思わず彼女の頬を伝う涙を拭おうと手を伸ばそうとするが、限界を超える挙動を繰り返した腕は痛みを訴えるばかりで動こうとはしない。恐らくは千切れてはいけない筋やら神経やらがダース単位で破損しているのだろう。それを見た彼女の顔が再び痛ましげな表情に染まる中、冷ややかな失血死の予感が足から頭へとゆっくりと浸すように迫っていく。
『通信が回復。全回線がオールグリーン。現在、法務省異能調整局より第二課隷下部隊、及び第三課が現場に急行中。現在をもって朱羽亜門調整官の任務は終了となります。当該任務において異能調整局の資産の損耗、無し。おつかれ様でした。義体からの魂魄転送シークエ

ンスを準備中……』
レジスタンスによる通信封鎖により長らく沈黙していたＪＤＡＣＳが俺の脳内へと無機質な声で告げる。そう、俺は資産だ。人材では無く、資産。コンピュータで計算される数字の一つであり、最終的に生きていれば俺という『資産』の損耗は無かったこととなる。失った部位は義体化すりゃ良いし、何なら強化に繋がるからな。全く、福利厚生が過ぎて涙が出るね。
「……私は貴方に何もしてあげられない。」
ぽつり、と彼女の口から零れ落ちたのはらしくもない泣き言だった。最強とすら目される異能行使者、法務省きっての武闘派としての顔では無く、年相応の少女の顔で彼女は呟いた。
「分かってるわ。どんなに私が異能を磨いても、貴方の強さの段階には手を掛けられないのだもの。ねぇ、亜門。貴方は……この仕事が好きかしら。まだ7歳の貴方にこんな事を聞くのも何だけどね。」
俺は別に強くないけどね。いやほんとに。
異能調整局の第一課でこれまでやってきたのも膨大な回数のやり直しのお陰なのだし。ぶっちゃけそこら辺歩いてる一般人を捕まえてこの力を与えたとしても、同じくらいの実績を残せるだろう。繰り返せば大抵の事は何とかなるものだ。ソースは累計ループ数が億を誇る俺。
そして――ふむ。この仕事が好きか、と。成る程。よく死ぬ、仕事を押し付けられる、休み無しのこの仕事が、好きかと。
うん。好きな奴居るの？もし居るんだったら多分そいつは洗脳されてるか元々頭おかしい奴だろう。
ブラックを通り越して引力すら伴いつつあるダーク企業……いや、ダーク国家。アットホーム（住む場所が此処という意味で）な職場です。こんな仕事好きになれる筈がない。
精一杯の抗議と最大の拒絶の意味を込めて全力で首を横に振りたいところだが、今の身体では首すら動かす事が叶わない。
表情筋が完全に死んでいるので、表情で伝えることも出来ない。仕方なく目をカッ！と見開き、彼女の眼を見つめ念じる。

転職させろと。生誕して7歳の子供をこき使っている認識があるなら改めてくれと。さもなくば労働基準砲（レメゲドン）の使用も辞さないと。全力で目を開き、真摯に未だ涙の跡が残る眼を見つめ続ける。届け、届いてくれこの思い！超絶過酷上司としてではなく、一人の少女として居る今の彼女になら通じるかもしれない！

俺の必死極まる無言の訴えを眼で受け止めた彼女は、大きなため息を吐く。ゆっくりと俺の眼を手で覆いながら、少しだけ悲しそうに彼女は呟いた。

「……そうよね。馬鹿なことを聞いたわ。貴方から戦場を奪うつもりはないからそんなに睨まないで。戦場で生まれて、戦場に生きてきた貴方は……『これ』以外を知らないものね。」

そう、俺一刻も早い退職と引っ越しを……なんて？

「私の可愛い弟、戦場の揺籠で育てられた貴方……傷つく事を厭わない理想のエージェント、だもの。忘れてちょうだいな。」

違う。何故そうなる。なんか俺が戦場の悲劇の化け物みたいになってるのだが。まぁ悲劇の中心にいる事は全力で同意するが。

いや待て。余りにも正反対の解釈に戦慄する俺の脳に、前世の記憶の欠片が過ぎる。そう、そうだった。

目の前の少女――赫羽焔はチョロインであった。思い込みが激しい故の攻略のしやすさ。故に中盤の彼女のレジスタンス加入イベントからすぐに好感度を上げやすく、スキルを解放しやすいメインアタッカーとして中盤のプレイヤーに重宝されて居たのが彼女だった。

更に自分の今までの行動を思い出す。粛清と廃棄が怖すぎて必死に働き続けた数年。少しでも美味い物を食うべく金を求め、任務のない日でも出動を繰り返してきた調整官としての毎日。下手に正体が魔神と知っているが故に逆らう事なぞ出来ず、只管にあの金髪腹黒リ（ハラグロリ）の走狗としてワンワン駆け回った日々。

嗚呼、なんてこった。過去が俺を追い詰めていく。だが今更どうしようもない。この国での俺の――異能調整官、朱羽亜門の価値は文字通り犬の様に駆け巡りながら仕事をこなす社畜さにあるのだから。手を抜き始めた時点で役に立たぬとばかりに切り捨てられるのがオ

チだろう。この国に使えぬ犬を飼っておくだけの甲斐性も慈悲も有りはしないのだ。
　そんな俺の狼狽を他所に、一枚の宗教画の様に彼女の顔へと辺りを覆う粉塵から一筋の光が注がれる。少しの憂いを含んだ笑顔と、頬に微かに垂れる涙が一筋の光に照らされ、風に靡くツインテールが燃え盛る炎の様に美しい。なんかシリアス告白イベントみたいになってるよ……。
「任務ご苦労様、調整官。……私は貴方が部下で本当に誇りに思うわ。」
『魂魄転送準備完了。シークエンスを実行します。』
　その言葉と共に獄炎の両翼により焼き切られた制服の背部から覗く色白の背中を此方へと向け、先程までの雰囲気が嘘であるかの様に鋼鉄と言うに相応しい法務省異能調整局第一課課長としての言葉を此方へと投げかける。それと同時に、俺の脳内へとこれよりこの肉体に別れを告げる旨の言葉が告げられた。
　もうどうとでもなってくれ。今更なんと思われようが、原作に突入した以上は俺の逃避行までの期限もそう長くはないだろう。絶対に逃げてやる。待ってろ異界。待ってろ南国ビーチ。俺は必ずこのブラック国家から逃げ出してやるからな……!
『そんなに上手くいくと思ってるの？』と脳内で囁くセーラー服の全身骨格を俺は意図的に無視し、魂魄の転送により呆気なく意識を手放すのだった。

◆

　異能調整局の指揮室は蜂の巣を突いたが如き喧騒に包まれていた。
「第二課の即応部隊をとっとと輸送しろ！周辺空域は全て法務省管轄に置け！『官邸』にも連絡！」
「はい、こちら法務省……。ええ、レジスタンス勢力の戦略級異能行使者を第一課の職員が捕縛しました。既に第一課より赫羽調整官が現場に到着済みですが、念のため公安からも手が欲しい。」

「電脳系の異能行使者からのドローンネットワーク、及び監視衛星への介入の痕跡あり。ＪＤＡＣＳによる攻性防御プログラムを展開中。バックドアの有無の確認が取れるまでの間、アリアドネ・プログラムにより全政府ネットワークを――――」

画一的な制服に身を包んだ男女が手元の端末へと怒鳴る声、異なる部署への要請の声が入り混じり、混沌とした様相を呈す部屋の中心に立体映像で映し出された幾つもの光点が描かれた東京の地図が淡い青い光を放つ。

端的に言って、大事件であった。

行政、居住区画から離れていたとはいえこの国の中心地で行われた大規模なテロ。敵対勢力――情報統制こそ敷かれているが、こんな事をするのは神聖ライヒ＝ユーロ同盟くらいのものだ――に送り込まれた不法入国者が空間跳躍により廃棄区画に侵入、それを捕縛すべく予め運び屋との密約により情報を得ていた外務省のエージェント及び異能調整官が展開するも、レジスタンス所属の戦略級異能行使者が襲来。

そして何より、それをこの超監視社会たる日本が誇る凡ゆるシステムがその状態を捉えていなかった事が問題であった。一瞬にして周辺のドローン、及び該当地区を監視していた衛星がレジスタンス側によって掌握。欺瞞情報を法務省及び関連省庁に送り続けていたのだ。

無数の防壁と暗号化により防護されていた筈の政府のシステムにいとも簡単に侵入されたという事。この事実は法務省だけではなく全ての政府機関の職員を震撼させた。無論、それはレジスタンス側に未だ見ぬ伏せ札があるという事実に対してでもある。だが、もっと切実な問題があったのだ。

間違い無く、多くの首が飛ぶことになるだろう。この国に無能は要らないのだ。逆賊に裏をかかれる様な無能は須く職を辞し、身の丈にあった職務に移るべし。そのような集団粛清を招きかねない『裏をかかれる事』はなんとしても避けなければいけなかった。だが、起きてしまったのだ。

しかし幸いな事に完全な失態とはならなかったのが救いであった。

日本における異能犯罪を取り締まり、同時に異能による諜報活動を担う異能調整局の中でも異彩を放つ部署、第一課。未だ全容の明らかにならぬその部門のエージェントにより戦略級異能行使者は捕縛、無力化されていた。この事実が無ければ、異能調整局のみならず多くの省庁のスタッフは翌日より自らが唾棄する3等市民へとその身を堕とすところであった。

名も知らぬそのエージェントへ首の皮一枚つながったスタッフ達の感謝と称賛が混沌の坩堝で沸き立つその最中、騒然とする法務省の廊下を闊歩する少女が一人。

雪の妖精に喩えられる可憐なその風貌を鉄の様な無表情で覆い、廊下の照明を美しく反射する銀髪をキッチリとポニーテールに結い上げた少女は左手の端末に映し出された時刻へと目をやる。彼女が突如として上司である異能調整局局長、天威喪音より局長室へと呼び出されたのが２０分前であった。

天威喪音。可憐な童女の見た目をしておきながら、その実態は日本における異能黎明期より法務省に在籍する妖怪。容姿を一切変じさせる事なくこの国の異能を司る立場に座し続ける彼女には黒い噂も多く、それと同じくらいの謎があった。

だが、そんな事は彼女――氷峰裁歌（ひょうみねさいか）にとっては些事も些事であった。

氷峰家は大戦において功績を多く残した家系でありながら、終戦間近に身内より大逆人を出した咎で取りつぶしの憂き目に遭いかけた。その沙汰に異論を唱える者は居らず、処分の決定もそこそこに氷峰家の利権を誰が握るかで揉める始末。彼女もまた良からぬ目に遭うところであった。

その沙汰を一声で覆し天威喪音は前当主の離反により当主となっていた彼女の身柄を引き取り、自らの新設した異能調整局へと席を用意した恩人であり、そして何より敬愛すべき上司であった。そんな彼女が上司であり恩人の呼び出しに歓喜しないわけがなかったのだ。

課長を通さぬ直接の呼び出し。これが意味するところは彼女への直接指令。喜び勇む彼女が予定より幾分か早い時刻にその豪奢な扉

の前に到着してしまったのは責められることでは無いだろう。嬉々として襟を正し、彼女がノックしようとしたその時、押し殺した悦楽の念を孕む声が室内より響く。
『フ、フフフ……!·まさかそんな勝ち方を……』
ふむ、と彼女は怪訝な表情を浮かべる。己の上司はこの様に感情を全面に出して喜ぶ様な人間であっただろうか？
何かを喜ぶときは静かにほくそ笑む様な人間であったと記憶しているが、何やら聞いてはいけない事を聞いてしまったかの様な気まずさがある。咳払いを一つ、一拍置いて重厚な扉を3回叩けば、誰かがまるで椅子から転げ落ちる様な音と共にドタバタと何かを急いで仕舞う様な音が室内から響き渡った。
「……入り給え。鍵は掛かっていないよ。」
数秒後、扉の向こうより放たれる落ち着いた声。ゆっくりと扉を開き、一礼しながら顔を上げれば、執務室に腰掛ける金髪の少女が其処に居た。口の端に浮かべるのは冷酷な笑み。ワインレッドの瞳は嗜虐的な光と共に深い叡智の光が灯り、彼女の体格に合わせて設られた制服の襟には局長である事を示す白い天秤のバッジが輝いていた。
「ず、随分と早い到着だね。」
「はい！　先程の事態は私も聞いております！　この様な状況での局長からのお呼び出しでありましたので、緊急の用件であるかと思いまして……。」
先程の音は聞き間違いであったかと心の中で首を傾げながらも、教本に乗せられる様な姿勢で凛と告げる彼女。それを見る局長の頬が仄かに引き攣っている様に見えるのは錯覚だろうか。
「職務に熱心な様で結構だ。さて――」
局長が手を振れば、執務室に備え付けられた投影機より伸びる光。それは空間にホログラムを映し出し、局長の指の一振りと共に彼女の前へとそのホログラムに映し出された写真を移動させた。隠し撮りだろうか？妙な角度で撮影されたその写真に写されていたのは一人の少女であった。
紫の髪を背中まで伸ばし、中世ヨーロッパを思わせるドレスに身を

包んだ少女。何処かのサロンに居てもおかしくは無いその少女だが、その写真の背景がどうにも奇妙であった。路地裏の一角。ゴミ箱や用途の知れぬガラクタの転がるその場所で撮られた写真に写った少女は手にした流麗な曲線を描く弓を画面の外にいる何者かに向けている様だった。

「彼女は……？」

「それは知る必要は無い。一つ言えるのは、彼女はこの国の異能安全保障において重要な人物になりうるという事だよ。」

局長は何処か愉快げに人差し指を天井へと伸ばし、笑いながら言った。

「命令だ、氷峰調整官。もうすぐ帰還する朱羽調整官と共に彼女の身柄を抑え給え。」

魔神のチェスの盤面が、動く。

第十九話　野生の摂理

世界は狭くなったという言葉がある。

凡ゆる情報がインターネットに溢れ、地球の反対で起きた事すら己のことの様に見、聞き、知る事が可能となり、発達した移動手段が距離を障害としなくなった事によって世界の事柄が身近に感じられる様になった事を指す言葉だ。

だがしかし。この世界――即ち、第三次世界大戦を経たこの世界は広がるばかりである。

自然発生した異界への門を世界を二分する超大国が解析し終わった後、この地球は二度目の大航海時代を迎える事となった。主要な石油産出国が文字通り地図から土地ごと消え去り、新たなるエネルギー革命を迎える事を余儀なくされた人類にとって新たなるフロンティアは正に垂涎の品であった。

日本国は人為的に異界への門を開く事に成功した事を公表した瞬間、日本の衛星国の持つ兵力を根こそぎ引っこ抜き、国防軍を中心としたアジア平和友好条約機構軍（Asian Peace and Friendship Treaty Organization Army）を編成した後に『アジアの盟主としての資源開拓』を名目に異界への大規模侵攻を開始。

国内の経済を圧迫する大規模出兵だったが、独裁国家たる日本にとって民意なぞ如何様にでも調整できるパラメーターでしかない。具体的な事は何一つ言わずに『更なる発展の為の開拓！』をプロパガンダとして打ち、一旦熱狂させておけばその内出兵の事すら日々垂れ流される無数のプロパガンダに流され民衆は忘れ去る。

何か凄い事を国が行っており、それが成功すれば資源が沢山手に入る。この程度の認識だけを国民の中に漠然と残し、戦勝国たる日本に住まう国民は今日も労働に勤しむのだ。

天を舞う無数のドローン。数値化される国民協力度。テレビではアニメですら国家礼賛に従事し、人々は漫然とした『生きている』事

への幸福感を胸に生きていく。
そんな世界は、彼女にとってはやはり窮屈に過ぎたのだった。
彼女が目覚めた時に彼女はその肉体と服、そして武器以外は何も持っていなかった。名前さえも。とりあえずは自分の髪の色に肖って彼女の保護者が似ている、と言っていた紫陽花（あじさい）をそのまま読んだ紫陽花（むらさきひばな）を名乗っていたが、無論偽名であるどころか自然発生的にこの世界に発生した彼女はこの国家に国民として認識されていない。
だが、彼女が生まれ落ちた闇市場の近辺。数多ある廃棄区画の中でも随一の無法さを誇る『新宿駅区画』に住まう番外市民達にとってそんな事は関係が無かった。新宿駅区画、其処はこの世界に出現したもう一つの異界。常に変化する内部構造に、異なる法則が支配する駅構内。数多の敵対的な存在が彷徨く魔境であり、日本政府が正式に宣言した『人類生存非適地帯』。
過去を知る手段の少ないこの国において、何故そんなものが首都のど真ん中にあるのかを窺い知るのは難しい。だが確かなのは一つ。この地に手を出して碌な事はない。故にこそこの地に法は無く、摂理は無く、政府も干渉を最小限に留めるのみ。
そして其処は魔境であるのと同時に、爪弾き者達の楽園であった。
政府に追われる者、市民権を剥奪された者、その他数多の事情を掲げた厄介者達。無論、この地において生存は保証されるものでは無く自身で勝ち取る物だ。
彼女は疲弊していた。プロパガンダを描くホログラムは生まれたての彼女に眩しく、国の発表を叫ぶドローンは騒音だった。更に彼女は与り知らぬ事ではあるが、不審人物を通報した事による報奨金目当てに出会う凡ゆる人間が己を捕らえようとする。国から配布される配給コードが無ければ飯すら買えぬ。そして……なにより、都市の中心に聳える巨大なビルから感じる嫌な気配。それが一番耐え難かったのだ。
故に彼女が弱肉強食の場である新宿駅を本能的に選んだのは当然と言えるのかもしれない。
面倒な規則、無し。監視、無し。あの眩しいのも煩いのも無し！そ

して何より、この駅の住人はどれもこれも国を受け入れられず、さりとて立ち向かえもせぬ故に逃げ出した弱き者達。故に、新宿駅に足を踏み入れた新人には優しくしたがる。

それは群れなければ生きていけぬ弱者の知恵であり、同時に弱きを互いに補おうとする持たぬ者故の慈しみであった。彼等は快く彷徨う彼女を見つけ、少ない資源から貧しくも温かい食事を振る舞った。それは生まれ落ちてから名も持たず、食事も出来ず、簡単に無力化できるとは言え追われ続けた彼女にとって初めて感じる『快』であったのだ。

そして、彼女が新宿駅入りを果たして数ヶ月。彼女は――

「なんか飯っぽいのが走ってます！ぶっ殺しますわね！」

「「うおおおお！行くぞお前らぁぁぁッ！」」

立派な蛮族（バーバリアン）の長へと成長を遂げたのであった。

緩やかな駅の住人達の繋がりで構築されたコミュニティ。これまでそのトップと呼べる人間はおらず、集団として動くことなど無いあくまで相互互助の組織であった。

当然である。彼等の中にも異能を持つものや多少は腕に覚えのある者も居たが、彼等とて生きるのに精一杯。そして元より、この新宿駅で人類のリーダーとなりうる力がある者は国家機関に吸収されるか、レジスタンスとして活動していた。この状態ではとても協力して集団で何かを為すような余裕など無かった。そう、彼女がこの新宿駅に来るまでは。

綺羅星の如く現れた彼女は間違いなく新宿駅の生態系の頂点に立つ存在であった。

生来の頑強さ、細腕から繰り出されるとは思えぬ程の凄まじい膂力。そして撃ち抜いた物を銀へと変質させる必殺の異能。彼女を中心に安寧を求めた人々が少しずつ群れていくのは必然であった。

そしてその傾向は彼女が『エキ・イン』と呼ばれる駅を隔てる幾つかの門を守護する人型の生命体を撃破した時から最早誰にも止められぬうねりとなって新宿駅中の人間達を巻き込んでいった。

それは何故か。新宿駅においての探索圏の拡張。それはまさしく

偉業であり、それをかつて夢見た者たちがエキ・インに挑み無惨に死に果てた事により作られた禁忌を打ち破る爽快な出来事であった。その行為は彼女が思う以上にこの駅の人間を心酔させたのだ。

不可能を可能にする少女。綺羅星の如く現れたアメジスト。彼女を中心とした強固な人類による生存の為の組織が作られるのは必然であったと言えよう。彼女は賢くは無かったが、この共同体において自身に要求されている事は理解していた。群れの長として、弱きを守る。力持つ者の責務。

それは野生の摂理。外界の発展し過ぎた文明より逃れた彼女が行き着く最適解。

それ即ち――

強い奴が勝つ（カこそパワー）

彼女は新宿駅における人類の守護者として、今日も全力を尽くす。それが彼女が己に定めた法であり、己を温かく迎えてくれた人々への恩返し。高さは数十メートルもあろうかという円柱が立ち並び、両端を巨大な溝で挟まれた回廊――我々の知る駅のホームを数十倍に拡大したような光景である――の磨き上げられたタイルを彼女の脚力が粉砕し、猛然と自身より逃げる獲物へと走り出す。

彼女が追う獲物。それは金属で構成された奇妙な生命体であった。直方体の側面から2本ずつ伸びる獣めいた脚。背中に当たる部分は人工的に光るいくつものボタンが一直線に何段も設置されており、その間からは飲料水の容器のような物が整然と並ぶ様が透けて見えていた。

もし此処に朱羽亜門が居たのならば『屈強な4本の足が生えたデカい自動販売機』と形容したであろうそれは、下手な乗用車よりも速いスピードで迫る捕食者――即ち紫陽花（むらさきひばな）に恐れを成したかのようにその4本の足を必死に動かし、逃亡を試みていた。

だが其れは彼女にとって余りにも遅すぎる。いわんや、彼女の放つ矢にとっては止まっているも同然であった。彼女は猛然と走りながらもその上半身の軸をずらさず、紫の残像となって手にした流麗な弓へと矢をつがえる。鏃の鋒が胴体部分へと向けられ、矢筈を挟む指が

僅かに緩む。目が細められ、シイッという息の吐く音と共に必殺の矢が放たれんとしたその瞬間、彼女の後方より何者かが覇気に満ちた声で叫んだ。
「お嬢！殺すな！そいつは家畜にできる！」
その言葉が彼女の耳朶を揺らした瞬間、機械仕掛けのような精密さで矢の狙いが一瞬にして胴体より外れる。そして風切り音と共に放たれた白銀の閃光はその奇怪な動物を走らせていた４本のうち２本の足を同時に打ち抜いた。正に神業、あり得ざる技巧。
どうっ、と己の足を銀へと変化させた四足歩行自動販売機が音を立てて倒れると同時、彼女の神速の疾走により遥か後方に置いて行かれた男達による歓声が轟き渡る。
「凄えええ！」
「走りながらも当てたぞ！」
その歓声に笑顔で手を振りながら、どっこいしょという気の抜けた声と共に自らの数倍はあるその巨体を持ち上げ、再び彼等の元へと戻る少女を男達の群れの中より先程叫んだ一人の老人が出迎えた。
「ほー、よく殺さずに仕留めたの。正直ダメ元で言ったんじゃが。」
「この程度楽勝でしてよ。それでシン爺、こいつ何です？」
孫と祖父のように気軽に会話を交わす彼等だが、あながちその評価も間違っていない。この老人は彼女の名付け親であり、未だ彼女が此処に迷い込んだばかりの時に後見人を務めた人物でもある。
新宿駅が出現してからずっとこの駅に住んでいると噂される長老、シン爺と呼ばれるその老人は伸びた髭を扱きながら恐れる様子もなく、ツンツンと杖で地面で未だ蠢くその生命体を突く。
「うむ。ジドー・ハーバイキとか何やら呼ばれとった奴でな。ほれ、こうすると……」
背面に並ぶボタンの一つを杖の先で押せば、何やら中で駆動する音が響き渡る。ガチャガチャと言う音と共にそのジドー・ハーバイキと呼ばれた生き物が揺れたのも束の間、ガチャン！と言う音と共に何かが下部より吐き出された。それは、ペットボトルに満ちた透明の液体であった。

「飲みもんが出るじゃ。これを持って帰れれば蛇口のある場所にタンク持って遠征する頻度が少なくなるやもしらん。」
その言葉を聞いた瞬間、彼女がそれを仕留めた時を凌駕する歓声が響き渡った。飲料水の確保は彼等にとって長らく問題視されていた事だった。人は生きる以上、水を必要とする。新宿駅に住まう彼等は様々な箇所の壁から生えている蛇口から流れ出る水をタンクに溜めて持ち帰る事で得ていたが、それは安全とは言い難かった。
駅の構内に数多潜む敵対的な生物達。彼等はコミュニティを養う量の水を入れたタンクをえっちらおっちらと運ぶ人間を見逃す程温厚では無かったし、彼等を逃す程無能では無かった。故に、水の不足は常に人間達を悩ませてきていたのだが、其れが解決される。
その喜びは凄まじかった。
男達は涙すら伴いながら抱き合い、事を為した少女も小さくガッツポーズを決め歓喜に浸っていた彼等を遠くよりじっと見つめる二組の目があった事など、知る由もなかったのだった。
「対象の人物を発見……!あの様な巨躯の敵対的生命体を一撃で無力化とは。やはり一筋縄では行かなさそうですね。……朱羽調整官？どうかしましたか？」
「いえ……何でもありません。」
光学迷彩のスーツを身に纏う二人。長い銀髪を小さく纏め、涼やかな瞳で彼方を真剣な表情で見つめる少女と、死んだ目をした一人の男。どちらも抜き身の刀の様な威圧感を無意識に垂れ流すその様は、暗部に生きる政府機関の人間である事を如実に示していた。
そして見ているつもりであった彼等もまた、第三者より見つめられていた。気配を完璧に遮断し、光学的にも認知不可能な状態で線路の先の暗がりから全てを見ている集団がまた一つ。
「無能無敗……?!」
「落ち着くんだ、香織。……これはチャンスだ。リーダーの妹を此方に引き込めるかもしれん。」
「という事は、あの隣の銀髪の子が……？」
驚愕と微かな恐怖に目を見張る青髪の少女に、其れを諌める全身を

強化外骨格で覆った人物。そして、不安など微塵もない顔で前を見据える桃色の髪の少女。彼等もまた、魔神の思惑を帯びてこの地に至っていた。

図らずともこの地は、人類の生存が保証されぬ魔境。新宿駅は――魔神達のゲームボードへと変貌していくのであった。

第二十話　氷姫と魔人

『左腕【金神】の接続完了。疑似神経を接続……接続しました。』

空白だった感覚に突如として流れ込む情報達。ある筈のない部位に痛みを感じる事を幻肢痛と言うらしいが、俺が今感じている此れは人為的に起こされている現象だ。空気の触れる感覚、先程まで義手の最終メンテナンスを行なっていた整備用のアームが俺の腕から離れていく感覚。

その全てが先程まで存在していなかった情報として俺の脳へと押し寄せてくる奇妙な感覚に僅かに身を震わせる俺を見た整備士が、手元のタブレット端末を弄りながら俺へと話しかけた。

「自然な感覚があるか？何か不具合があるなら……」

「いえ、大丈夫です。全ての感覚に異常ありません。」

整備士の言葉を遮り、無表情のまま首を振る。一刻も早く俺は整備を終えたいんだ。……何故かって？ふむ、良い質問だ。

俺の肉体はサイバネティクス化とナノマシンの投与、骨や筋肉を人工のものへと取り替える事により人体にあるまじき出力や隠し武装を仕込んでおくことが可能な訳だが、この措置は全身に及んでいる。肉体の６５％が機械は伊達じゃないのだ。

つまり何が言いたいかって言うと、全身を整備しなきゃいけない訳だから整備中は、その……全裸なんだよね。

いやまぁ、これ何百回もやってる事だから全裸の状態で天井からケーブルやらアームやらでぶら下げられてるのも今やどうとも思わんけどさぁ……。幾ら慣れてるからってフルチ〇でずっとこのままなのは気が滅入る訳よ。

という訳でこれ以上の拘束はごめん被りたい。実際特に不具合がある訳でもないので、この俺への尊厳破壊を続ける意味も無い！

『いいから早よ下ろせ』という念を込めた目で整備士を見ながら凍りついた表情筋で精一杯微笑もうとすれば、側から見ていたらしい整備士達が微かに青ざめた顔で思わずといった様相で呟く。

「あの顔を見ろよ……ブチギレてやがる。」

「戦場にそんなに行きたいってか?生き急ぐ野郎だ……。」
また何か余計な勘違いを産んでしまった気もせんが、どうせもうすぐ此奴等ともおさらばなのだから知った事では無い。吹っ切れた俺は強いぞ。
俺の精一杯の笑み（無表情）により顔面蒼白となった整備士のタブレット操作によって俺の身体を固定していたロックが解除され、既に装着されていた義足が地面へと触れる硬質な音と共に降り立つ。微かな駆動音と共に俺の脳が発する信号に対し、僅かな狂いもなく重厚感を感じさせる黒い光沢を放ちながら手を握る動作を繰り返す。良し。今回も大東亜工業は良い仕事をしてくれているらしいな。
俺の欠損した両脚と左腕を補う義手であり、俺の主武装でもある【歳殺】【歳破】【金神】の忌むべき方位を司る方位神の名を冠した此れ等は重みすら感じさせる事なく、いつも通りに俺の動きを完全に補助していた。良きかな良きかな、先程までの義体が貧弱過ぎて一層の頼り甲斐を感じる己の愛機……いや、愛腕?をガチャガチャと動かしながら、壁に掛けられた異能調整局の制服を手に取った。
防弾、防刃の素材で作られたこの異能調整局の制服のデザインを俺はかなり気に入っている。スーツを基調にした黒をメインに所々に青いラインの入った如何にも『ＳＦ』な感じのこの服には俺の内なる中学２年生もニッコリだ。下着を身に付けた後にズボンを引き裂いてしまわないように慎重に義足を通し、シャツへと腕を通そうとしたその時、カシュッ!という音と共に整備室のドアがスライドして開く。
「朱羽調整官、任務からの帰投直後ですが局長より……」
左腕の腕時計型端末から投影したホログラムに目を通しながらドアを潜り抜けてきたのは、俺の同僚の一人であった。
鼻筋の通った顔立ちの凛々しい少女。俺の着ている制服の女性タイプを遊びなくかっちりと着こなした、俺の前世で言うところの委員長の様な雰囲気を纏う彼女の銀髪が整備室の白い照明を反射し、天使の後光のように輝くその様に、整備室にいた連中が感嘆の息を漏らすが、冷めた顔で俺は其れを横目で眺める。

此奴等も二、三回殺されたらそんな反応もできなくなるだろうよ。いやまぁ、美人だよ？俺も殺された事なかったらお近づきになりたいくらいには顔面偏差値は高いからね。そんな取り止めのない思考を巡らせながらシャツを羽織る俺へと、夏の海のように澄んだ水色の瞳がホログラムから向けられたその瞬間、雪の妖精を思わせる色白の顔が真っ赤に染まる。

「ふ、ふ……！服をキチンと着てください！破廉恥ですよ！」

何だこいつ。下なら兎も角上じゃろがい。しかも下着はもう着てるし。耳まで赤くした彼女が俺から目を逸らし、あわあわと何やら口走りながらチラチラと此方を伺っているのを無視してボタンを留めながら俺はボソリと呟く。

「突然入ってきたのは其方でしょうに……。」

なんか俺が変態みたいな扱いされてるのは非常に不満である。まだ顔を赤く染めているむっつりスケベである事が本件で確定した彼女――氷峰裁歌（ひょうみねさいか）は原作でも非常に数奇な運命を辿るキャラクターであったと記憶している。彼女の一族は強力な異能行使者を一族から輩出し、国防軍へと送り込んだ功績で戦時中に名家へとのし上がったが、当時の当主でもあった長女、氷峰憐歌（ひょうみねれんか）の大規模なテロ行為によりその地位を追われたのだ。

まぁその後に局長に一族ごと拾われて今に至る訳なのだが、彼女の姉への感情は鬱屈している。妹として姉を深く愛していた過去と、愛国者としてこの国へと反旗を翻した姉を憎悪する現在。原作の終盤でレジスタンスの援護に駆けつけた戦艦を全て破壊する為に大海を凍らせ、己を捨てた愛憎入り混じる姉へと決闘を挑むシーンの血を吐くような独白は今でも記憶に残っている名シーンだ。

え？姉の働いたテロ行為は何か？新開発されていた重力崩壊兵器を本国から簒奪し、北米大陸を消し去ったらしい。まぁ日本側の仕込みなんだけどね。アメリカが戦後のパワーバランスに食い込んでくる事を危惧しての措置らしいけど、わざわざ当時味方だった彼女を巻き込む必要性はあったんですかね……？結果としてレジスタンスが生まれてるし。

そんな事を考えながらスーツを着終え、ネクタイを締めながら彼女が先程話そうとしていたことの続きを促す。
「それで？局長が私に何か？」
「あ、えっと、嗚呼、そうでした。局長から貴方へのビデオメッセージです。」
端末から展開したホログラムを指で弾き、此方へと滑らせてくるのを指で止め、再生する。どうにも嫌な予感がする。あのパワハラが日課みたいな魔神が俺にビデオメッセージ……？見たら死ぬ視覚兵器とかの実験とかだったらどうしよう。
もはや被害妄想の域に達している嫌な予感が迅速な逃亡を指示してくるのを理性でねじ伏せ、再生ボタンを押せば虚空に映し出されるニヤニヤとした笑みを浮かべた少女。嗜虐的な笑みを隠そうともせず、その小さな身体に不釣り合いな大人用の皮椅子に腰掛けるさまは背伸びしたい年頃の少女にしか見えないが、そのワインレッドの瞳に浮かぶ隠しきれぬ魔神としての気配がその可愛らしい印象を塗りつぶす。日本を牛耳る魔神である彼女の数多持つ表の顔の一つである天威喪音が映像の中で口を開いた。
『さて、任務ご苦労だった。まぁ何やら諸々の不確定要素があったが、敵性難民のレジスタンスへの参入が阻止できたようで嬉しいよ。』
レジスタンスの幹部襲撃を諸々の不確定要素の一言で終わらせる辺り本当に性根が腐ってると思う。主人公ちゃん達各位におかれては早くこいつを次元の彼方へとぶっ飛ばしてくれるように一層の奮戦を期待する。あ、俺がトンズラこいた後でね。現実逃避めいた思考が巡る俺をよそに局長の発言は続く。
『その高い問題解決能力、及び対異能行使者への卓越した抹殺及び無力化技能を見込み、私は異能調整局を統括する権限をもって朱羽調整官へ指令を下す。法務省第二百八十五号辞令。貴官は氷峰調整官の指揮下に入り、新宿駅地区においての秘匿任務につくべし。任務はこのメッセージが再生された現時刻より開始される物とする。』
……は？

◆

その瞬間、空気は凍りついた。背筋を悪寒が走り、幾千万もの氷の如き冷たさを込めた刃が突きつけられているかのような錯覚すら感じる。氷点下の冷気を操り、万物を凍結させるという自負がある私にすらその錯覚を齎す威圧感の主を私は畏敬と微かな頼もしさが入り混じった奇妙な感情を胸に抱きながら見つめる。

『任務の内容は氷峰調整官より聞き給え。ではさらばだ、朱羽調整官。Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ！』

その言葉と共にホログラムが消え去ると同時にゆっくりと此方へと向けられた彼の顔に居並ぶ整備士達から微かな悲鳴が漏れた。だがそれを責める事はできまい。かく言う私も悲鳴をあげかけたのだから。

笑っていた。無表情を崩す事なく、冷たい鋼鉄の機械を思わせる彼の表情は壮絶な笑みに染まっていた。口角を上げ、半月のように吊り上がった笑みと共に駆動音と共にギチギチと唸る義手。彼のスーツで覆われた背中は微かに震え、彼の心中を荒れ狂っているであろう感情を示していた。

それは間違い無く新たなる戦場を与えられた喜びだろう。彼の任務への並々ならぬ執着心と過激な迄の国家への忠誠は法務省の中では周知の事実。殺戮に飢えた忠実なる戦闘機械が武者震いにその身を戦慄かせる中、私は斬りつけるような空気を垂れ流す彼へと歩みを進めながら部屋に居並ぶ整備士達へと人払いする様に手で合図する。

脱兎の如く部屋から退出した彼等を横目に、手元の端末を操作すればホログラムに映し出される今回の追跡対象者の姿。可憐な紫を基調にした古めかしい服に身を包む少女の写真を彼へと見せながら、未だその笑みを崩そうとしない彼へと告げる。

「聞いての通りです、調整官。私と貴方でこの人物を追わねばなりません。彼女は現在新宿駅廃棄地区に潜伏している未登録の異能行使者であり――――」

「氷峰調整官。私は余り頭が良くないので、簡潔に願います。彼女を

見つけて殺せば良いのですか？」
　いつの間にかその顔からは笑みが消え、いつも通りの無表情が浮かべられていた。首を傾げ、死を煮詰めた様な真っ黒な目で私を見つめる。これだ。この冷たい銃口の様な威圧感。任務に臨む彼の放つ気配を感じる度に、勝てないと思わせられる。あの時の模擬戦から、私と彼の力は縮まった気がしないのだ。いや、それどころか彼はさらに強く――――
「調整官？」
「あ、いえ。殺害は最終的な解決手段です。まずは身柄を確保。国家登録下に置くことに抵抗すれば……殺害も解決手段として許可されています。」
「成る程、了解です。……今から向かうのですか？」
『まさかそれ以外の返答は有り得ないだろう？』とでも言いたいのだろう。彼の無表情の中に浮かぶ微かな期待の色に私は思わず笑ってしまった。全く、かつては目の敵にしていた彼だが本当に仲間ともなれば心強い事この上ない。
　連戦を気にも留めず、国家の為に新たなる戦場へと赴かんとするその鋼の様な在り方は異能の強さでも、技術の優越などで語られる様な物ではなく、存在としての強さという概念が適切に思える。私は己の同僚である無敗の魔人に対し、背伸びして肩へと手を置いた。
「ええ、無論です！頼りにしていますよ、朱羽調整官……！」
　その瞬間、真っ黒な目が絶望に染まっていた様な気もしたが、気のせいであったことは言うまでもないだろう。

第二十一話　抵抗者よ

七色の極光が床を抉り、抉られたコンクリートの欠片が周囲へと散弾の様なスピードで舞い散る。その鋼鉄をも焼き切らんとするその圧倒的な熱量が向かう先は一人の少女だった。

ブルマと体操服という、前時代も前時代の装いに身を包む少女。それは一見年端も行かぬ少女へと超常の暴力が振るわれる凄惨な現場かの様に見えるが……。無論、それは大いに間違っている。彼女はこの場において被害者でも何でもなく、『挑まれる側』――即ち強者であるのだから。

崩れ落ちる大瀑布の様に荒れ狂うその破壊の権化を前にして、愉快げな表情を浮かべてその少女は涼しげに言葉を紡ぐ。

「セフィラ・ツリーは強大な魔神の亡骸が変質した物なの。だからその適合者は転樹を繰り返せば繰り返す程に、肉体にその全能の欠片が馴染む程に、使用者の本質も全能へと近づいていくって訳。」

瞬間、その熱を伴う光へと無造作に伸ばされる手の平。まるで飛んできたビーチボールを受け止める様な気軽さで差し伸べられたその手は余りにも細く、とてもこの光の大瀑布をどうにかできる様には見えない。

須臾の先を待つことも無く、一瞬にしてその少女が消し炭となって果てるのは自明の理である様に思われた。だが、彼女の事を少しでも知る者はその様な予想をあり得ない、と切って捨てるだろう。その理由は直ぐに光景となって現れる。

光はまるで先程までの輝きが白昼夢であったかの様に、少女――魔神、エリザベートの手に触れた瞬間にかき消えた。

箸よりも重い物は持った事がありませんと言わんばかりの華奢なその手には傷一つなく、微かに白煙が立ち上るばかり。

（マルクトの出力任せかぁ……。まぁ、適応してから数日じゃこんなもんか。）

妥協の念を抱く心中とは裏腹に微かな失望の色がエリザベートの顔に浮かぶが、その表情はすぐに別の感情で上書きされる事となる。

「これは――へぇ、やるねぇ！光の屈折だなんて味な真似するじゃん！」
粉塵の残滓中から猛然と迫るは、鏡像の様に――否、鏡像そのものであるのだろう。全く同じ容姿、武装の少女達が四方よりエリザベートへと手にした大剣を振りかぶり、猛然と駆ける。
桃色の彼女達の髪の残像がエリザベートへと吸い込まれる様に迸り、手にした自身の身長を越す程の水晶で形作られた大剣が軽々とその細腕によって空気を切り裂く轟音を奏でる。その刀身に輝くは先程の一撃は前座であったとばかりの虹の奔流。もはや直視も叶わぬ程の極光の刃は一切の手心無く、エリザベートの首へと四方から迫りつつあった。
どの少女が本体であったとしても、その光に込められた熱量は全て真。四人の必殺のうち、一人にしか実体は在らねども、光が齎す破壊の力だけは全ての少女の像が有していた。だがしかし。必殺の刃の檻の中でエリザベートは己に窮地を齎す光の刃達へと一瞥もくれる事なく、その整った顔に愉快げな笑みを浮かべながら己の直上を見やる。
「そして本命は透明化してからの一撃、か。良いじゃん良いじゃん！一端の戦略を練ってくれるじゃん！」
その大剣の鋒を下へと向けその小さな年相応の身体をしならせながら一直線にエリザベート目掛けて突貫していた少女は、狙いを看破された焦りに顔を歪める。何故見えた？己の知らぬ技術か、はたまた『魔神』としての特性なのか。だが最早ここまで来て戦略を変える選択肢もある筈が無し。
大勢は既に決しようとしていた。エリザベートの四方を必殺の光で囲み、上空からの重力に任せた突貫。逃げる事は叶わず、触れてかき消すにしろ一つの攻撃に対処している間に、少女の用意した残りの手札によってその体躯は焼き尽くされる事だろう。言わば王手、チェックメイト。
少女が己の番狂わせの勝利を確信したその瞬間――
「でもさ。戦略って所詮は――弱者が積み上げる布石なワケよ。」

その必殺の全てが霧散した。あらゆる物を切り裂くであろうその煌めく水晶の鋒は、白魚の如き指が放つ万力の如き力によって刀身を摘まれ、エリザベートの目の数センチ上で停止した。冗談の様な光景。だが、少女が如何に動かそうと試みてもピクリとも動かぬ己の得物が純然たる現実である事を無言で示していた。

次の瞬間、エリザベートを囲んでいた光が展開された重力場によって四散する。吹き荒れる暴風に乱れる金髪を黄金を背負うかの様にたなびかせながら、エリザベートは獰猛に笑った。

「ダメダメダメ……！全能を断片でも手に入れたからにはそんなんじゃダメ。その力は――セフィラ・ツリーはそんな物じゃない。何の捻りもなく強く在らないと！技量じゃない、出力でもない。存在としての『強さ』。其処に至らなくちゃッ！」

大剣を持ったまま突っ込む様な体勢のまま、エリザベートの二本の指によって頭上に固定された少女の戦慄する視線を飲み込むかの如く、ワインレッドの瞳の中の瞳孔が興奮の余りぱっくりと割れ、口からは鋭い牙が覗く。魔神は興奮と官能に潤む瞳に人ならざる紋様を浮かべながらもう片方の手を伸ばし、恐怖に引き攣った可愛らしい顔へと――――

「はいアウトー!!!」

触れる事なく、横薙ぎに振るわれた重力場によって壁へとめり込むのだった。

突如として己を支えていたエリザベートが吹き飛び、重力の導くままに地面へと頭から落ちそうになっていた少女を不可視の力場が包み込み、優しく部屋の地面へと下ろす。

此処はレジスタンスが本拠地、マヨヒガ。エリザベートの魔神としての特性により展開された擬似的な異界であり、広大な広さを誇る一つの国。

その中央に位置する『スパルタクスの塔』と呼ばれる巨大な白色の尖塔の地下へと設けられた訓練用の部屋の壁へと顔面からめり込み、ぶらりと下半身を揺らすがままにするエリザベートの臀部を入り口から走り寄ったもう一人のエリザベートが思い切り蹴飛ばした。

「訓練なのに何で本気出してんのかなぁ！このポンコツ分け身はさぁ！春音ちゃん怖がってるじゃんか！」
「あはは……別に怖がってない……って言ったら嘘ですね。めちゃくちゃ怖かったです。食べられちゃうかと思いました。」
「いや、待ってほしい！私の話を聞いて欲しい！これには深い訳がある！」
　地面に気の抜けたようにへたり込む少女が苦笑いを浮かべながら手にした大剣を重厚感を感じさせる音と共に地面へと置けば、ジタバタともがきながら勢いよく壁から頭を引き抜いた『分け身』のエリザベートが己の本体たる闖入者から露骨に眼を逸らしながら、弁明を開始した。
「聞いてやろうじゃん。その深い訳とやらをさ！」
　春音の前に門番のように立ち塞がったエリザベートが腕を組み、呆れ切った表情で地面へと正座するもう一人の己を見下ろしながら告げる。だが腐っても自分。次に言うことが大体予想がついているが故に余計にげんなりした表情を既に浮かべていた。
「ほら、さ。春音ちゃんが予想よりも強くてさ……えっと……その……？」
「心にズキュンと来ちゃったと。」
「もうズキュンと来ちゃった。」
　溜息と共に脳天へと拳骨一発。彼女――真なるエリザベートとて己と同じ見てくれの存在を殴るのも嫌な気分だが、思わず手が出てしまった。魔神の一撃を受けた魔神が涙目で地面をのたうち回る中、既にその大剣を消失させた春音が苦笑いと安堵が入り混じったような表情でエリザベートへと声をかける。
「別に気にしてませんよ、エリザさん。エリザさんも私の事を思ってやってくれたんですから。えっと、今言ったエリザさんは模擬戦に付き合ってくれた方のエリザさんで……。」
「こいつの事はもうエリ公で良いよエリ公で。」
「もっと自分を大事にして欲しい！自分の事をそんな風に呼ぶなんて良くない！」

「……ふふっ。」
　レースを散りばめた格式高いゴシックロリータを纏う少女と体操服姿の少女が睨み合い、ぶつかる視線には火花が散る。全く同じ顔、声の少女達がいがみ合うその光景に思わず声を上げて笑ってしまった春音の声に思い出したかの様に、未だ憤懣やるかたなし、といった表情で此方を睨みつける己の同じ顔に赤と黒のレースの袖で一撃を見舞いながら顔を向ける。
「あ、そうだ。良いニュースと悪いニュースがあるんだけどさ。どっちが良い？」
「え……じゃあ、そうですね。悪いニュースからで。」
　唐突に問われたその問いに対し、少し考え込んでから答える春音。レジスタンスのＮｏ．２であるエリザベートがそこまで急いで居ないのならば、悪いニュースと言ってもたかが知れたものだろう、と思った矢先。その報せは突きつけられる。
「あのね、中禅寺ちゃん法務省に捕まっちゃった。」
「はえ？」
　何でもない様に告げられたその内容に目が点になる春音。中禅寺丹羽。レジスタンス発足から在籍する最古参のメンバーの一人であり、先の大戦より異能を用いた戦闘に携わっている生粋の異能行使者。レジスタンスのＮｏ．３の地位を持つ彼女が捕縛された。その晴天の霹靂とも言える報せに彼女は、だがしかし。
「……中禅寺さんならまぁ、何とかなるでしょうね。」
「だよね。その反応になるよね。」
　驚きの色を浮かべながらも、微かな苦笑いと信頼の入り混じった笑みで応えるのだった。
　この場にいる全員が、中禅寺丹羽という女の生き方を知っている。緩いようで抜け目なく、特に『生き残る』という点において彼女は何者よりも秀でているのだ。レジスタンス発足からのらりくらりと凡ゆる危機から逃れ、或いはいなしてきた彼女ならば何とかなる……そんな確信を出会って日の短い春音が抱く程に、中禅寺丹羽という女は強烈な人間であった。

「まぁ、腐ってもレジスタンスのＮｏ．３だからね。直ぐには殺されないだろうし、中禅寺ちゃん自身も口を直ぐに割る様な柔な人間じゃ無い。此方も色々と手は打つけど……自分一人の力で帰ってくる事態もあり得るからねぇ。」

春音が『嫌やわぁ、もう。監獄がもう狭いわ臭いわで……。』やらなんやらと言いながら平然と帰ってくる彼女を脳内で想像していれば、エリザベートがぴん、と形の良い人差し指を立てて注意を促す。

「さて、良いニュース……こちらは君の今後を左右する事だ。」

その瞬間、エリザベートの言動に見え隠れしていたおちゃらけた空気が霧散する。ただのエリザベートではなく、マヨヒガを政府から数十年間隠し続け、レジスタンスのＮｏ．２として戦い続けた人外、魔神エリザベートとして紡ぐ言葉。それは質量すら幻視する程の威圧を伴い放たれた。

「初仕事だ、春音ちゃん。君には――この世界に生まれ落ちたもう一人の魔神を回収してもらう。」

神の宿る駅に、反逆者が集わんとしていた。

【幕間？・前編？】初陣。死都にて。

首都の流通の要を担い、大戦中もその賑わいを絶やす事の無かったその港は今や、この世界の何処よりも人の肉が焦げる臭いで充満していた。

太陽の無い重化学スモッグに覆われた鈍色の空を業火が焦し、天空を茜色に染め上げる。大地を破り、遥か地下より炎熱地獄が這い出てきたかの様な惨状をこの地に齎した元凶は、余りにも優雅に天上を舞っていた。

翼がそこにはあった。数多の羽根を束ね、羽ばたく度に圧倒的な熱風を周囲へと振り撒き地上の人間の喉を焼き焦がす炎の巨鳥。

夜の海面に自らの炎の彩りを浮かべ、この世界に降り立ったもう一つの太陽であるかの様な輝きが港を真昼よりも明るく照らし出せば、港に配備されていた兵士達から焦燥の声が上がる。

「クソッ！海軍の奴等は何してやがんだ!?まさか、もう……？」

「馬鹿言うな……！あの大艦隊だぞ！あの数を撃破できるだけの大兵力があるならとっくの昔にレーダーに――――」

だが、その言葉が最後まで紡がれる事は無い。喉を焼かれ、その全身の水分を余す事なく沸騰させながら、激痛と共にその生涯に幕を下ろした故に。それを齎したのはたった一度の羽ばたきだった。吹き荒れる熱風、そして火の粉というには余りに大きく高熱の巨鳥の炎で形作られた羽毛。

荒れ狂う炎によって肉体を編む事で顕現したその巨大な不死鳥は、其処に居るという事実だけで並の人間達を焼き尽くす。

重力の軛から解き放たれ、天は我が物であるとばかりに空を覆う一対の炎の翼はアスファルトを焦し、舞い散る炎の羽根は肉を焼き焦がし骨を炭へと変化させていく。

その暴虐に抗うかの様に、地上に等間隔に設置されていた銃座に据えられた砲塔が動いた。

かつて世界を二つに割った三度目の大戦以前に用いられていた火薬を用いた旧式の対空砲が、青い燐光を帯びた対異能行使者用のミサ

イルが、光学兵器が、耐熱装備に身を包んだ歩兵の持つ拳銃が、強化外骨格に備え付けられたライフルが。
およそこの地において空へと向ける事が可能な全ての兵器の先端に不可視の糸が結び付けられ、その糸の全てが炎の巨鳥へと繋がっているかの様な挙動で一糸乱れぬ動きを見せる。
この化け物を止めなくてはならない。この場にいる全ての人間がそう悟っていた。この化け物を殺しうる火力を、打撃を、全ての戦力を叩き込まねば、この地は世界で最も巨大な殺人オーブントースターへとなり果てる事になると。
誰が号令を発した訳でもなく、一斉射撃が始まった。無数の色彩の光線が、砲弾が、異能を無効化するミサイルが、炎の翼を突き破り、舞い踊る焔に隠された異能行使者の本体を目掛けて地上より放たれる。
轟音、閃光、その全てが如何なる異能行使者であれ殺しうるだけの力を持っていた。
戦時中に開発された異能行使者の齎す超常を打ち消す技術によって生み出されたミサイル。虎の子たるそれを惜しげもなく投入した全方向からの一斉掃射。それは、天空の暴君を殺すに足る攻撃の筈だった。
だが、しかし。
「嘘だろ……！」
炎が踊っていた。嘲笑うかの様に炎に形作られた鳥の嘴が開き、火の粉を散らす。
影法師を幼児が戯れに枝で突こうと何の変化も齎さぬ様に。水面に映る像に石をいくら投げ付けようと無駄であるかの様に。放たれる数多の攻撃は無意味に炎を突き抜けるのみ。
絶望が戦場に染み渡る。
兵士達の瞳に闘争心で押さえつけていた恐怖心が浮かび、地上からの攻撃の手が緩みかけたその時。男の声が響いた。
「撃ち続けろ！どんなカラクリがあるかは知らんが、異能行使者である以上はこの飽和攻撃が有効打になる筈だ！」
天空より降り注ぐ茜色の光で耐熱装備のバイザーの奥にある顔を

照らしながら、その光に負けじと閃光を振りまく光学兵器の先端より発される熱線を放つその男は己の同胞へと大音量で言葉を紡ぐ。士気を下げさせぬべく放たれたその言葉には思考停止と現実からの逃避の色が多分に含まれていたが、限界状況の兵士達の兵士達を再び戦闘行為へと回帰させるには充分であった。

再びその数を増した周囲の攻撃を見ながら、瞳に恐怖と自己暗示の色を浮かべた男が譫言の様に低い声で繰り返す独り言は狂気の色をも帯びつつあった。だが、その言葉が最後まで紡がれることは終ぞ無かった。

「そうだ。異能は無効化できている筈なんだ。撃ち続けてりゃあの化け物もいつか、いつか死――」

「異能は、ね。悪いけど私のは特別製よ。」

「ギャアアアアッ!?あ”ぁ”づッ!あ、あ”ぁ”あ”ぁ”ぁ!!!」

銀鈴を揺らしたかのような可憐な声と共に彼が立っていたその場所を業火が覆い、一瞬で熱によって収縮した筋肉が無理矢理に男を地面へと倒れ込ませる。耐熱装備の許容値を一瞬で上回った炎が喉を焦がし、言葉にならぬ悲鳴と共に肉の焦げる臭いが男は死の間際、己の死が決して孤独では無かった事を悟るだろう。

数百メートルに渡って銃座が配置され、多くの兵士が屯していたその港を今支配しているのは業火だけであった。

大地を、空気を、その場にある全てを港の全てを覆い尽くすかの様に肥大化した翼が一瞬にして覆い尽くし、件の男を含む全ての命を焼き尽くしたのだった。

炎の舌先が舐め回し、無数の黒焦げた人だった物が散らばるその地獄を1秒にも満たぬ時間で作り上げた、今やその翼の幅を数百メートルの規模へと成長させた巨鳥の炎で編まれた肉体が解け、そのウチに隠していた術者を曝け出す。

「バカスカ撃ってくれちゃって……!痛覚無効のナノマシンは打って無いから普通に痛いっての!」

巨鳥の身体が消え去り、残された翼を背中に背負うは炎よりも紅き髪を熱波に揺らす少女。

明らかに戦場に似つかわしく無いその容貌に身の丈。だが、全身に空いた風穴を補う様に炎が蠢き、瞬く間に無傷の状態へと変貌していくその姿は人外以外の何者でも無かった。

「まぁそのお陰で蘇生繰り返して火力上がったから良いか……。全く、こんなにうら若き乙女の服をよってたかって剥ぐ真似してこの国にはロリコンしか居ないのかしら。」

人を燃料に炎が踊るダンスホールへと変貌した港へと降り立った少女――赫羽焔が、己の身へと降り注いだ数多の砲弾でボロボロになったかつてスーツだった布の欠片を両腕で自らの身体に押し付けながら海へとナノマシンによって視力を強化された目を向ける。

港より数キロ。そこにはもう一つの戦場が広がっていた。

◆

大戦において中立を宣言していたとある国家。運良く協商連合国陣営の消滅(この場合は正しく文字通りの意味で)に巻き込まれず、国家元首の血の滲むような努力によって大戦を乗り切ったこの国家に対し、大使館を通じて日本が最後通牒を突きつけたのは二時間前の事であった。最後通牒は単純明快。衛星国(奴隷として搾取される)になるか、国ごと消えるか。

不幸な事として。いや、覇権国家たる日本が今まで自身の権益領域へとこの国家を組み込む事を留保していた幸運の揺り戻しでもあるのかもしれないが。

それはともかくこの国において不幸だった事は彼等がなまじ兵力を持っていた事だったと言えよう。

大戦終結後に大量に市場に出回った不要となった兵器の数々を安値で手に入れ、神聖ライヒ＝ユーロ同盟より買い付けた異能行使者対策の兵器の数々。高額に過ぎる最新兵器だったが、金に糸目は付けなかった。そして戦後に神聖ライヒ＝ユーロ同盟と交わした密約。其れ等は彼等に「もしかしたら」を想像させるに充分であった。

もしかしたら。日本の侵攻を跳ね除けるとまでは行かずとも、拮抗状態を数日間は続けられるのではなかろうか。そうすれば、そうすれば――――。

大総統と戦後に交わした密約。それは、万が一日本がこの国に侵攻

を開始した場合は神聖ライヒ＝ユーロ同盟の飛び地として統治を受け入れるというものだ。売国と罵られる事は百も承知。だが国としての主権を、歴史を、国家としての誇りを失うとしても日本の統治を受け入れるよりはマシだろう。

アジア平和友好条約機構。平和だの友好だのと宣っておきながら、実際のところは日本の大規模な搾取農場に過ぎない。衛星国の国民の生活に欠かせぬ民需工場は必要最低限の更に下の優先度でしか建設されず、国土の殆どはクローン、兵器、日本の3等国民以上の市民が利用する物品の製造プラントで埋め尽くされ、反対の声を上げよう物なら常駐している『同盟国の治安を守る』兵士達によって暗がりへと誘われる末路があるだけだ。

それに引き換え神聖ライヒ＝ユーロ同盟は同盟とは言ってはいるものの実際は一つの歴とした巨大国家だ。国としての独立は保てぬとしても、日本に永遠に財産と人間を差し出さねばならぬ衛星国ではなく、国の一部として国民には最低限の権利が保障される。

「残念ながら我が国において総統とは独裁者では無いんだ。議会を纏め、そして君達の――否、私の庇護すべき神聖ライヒ＝ユーロ同盟の新たなる大地へと私の兵を送り込むのに1日かかる。1日だけ、持ち堪えて欲しい。」

ならば、ならば。たったの1日耐えれば日本の攻撃は止まる。海洋には先の戦争で一切の損耗無く戦後を迎えた戦艦に、空中には無数のドローンを内包する空中母艦。1日ならば、あの日本相手とて持ち堪えてみせよう。

その、筈だった。

氷の華が咲き乱れ、最早本来の機能を果たす事が叶わなくなった兵器達。戦場にて収集したデータを元に、その戦場に最も適したドローンを生産し続ける『空飛ぶ工場』たる空中母艦の凍りつき、エネルギーの供給を果たす事がなくなった中枢動力炉。

其れ等の美しくも圧倒的な惨状とは裏腹に、船内の兵士達は冷静な面持ちだった。壁に立ち並ぶコンソールに手を掛け、船同士の連絡を密とすべく受話器に手を掛けながら何事かをメモする操縦士達。使

命感に満ちた瞳に、適度な緊張に引き締められたその顔は正しく歴戦の兵士の貫禄であった。
　その全てが、一切の動きを見せていない事以外は。船内は静寂そのものであった。氷が時たま軋む音以外は何の音も響かぬ氷の集団墓地。何も感じる事なく、何も気づく事なく、己の職務に殉ずる覚悟と共に永遠に凍りついた彼等は幸運だったのだろう。
　凍りついた戦艦。そして海中から聳え立つ巨大な氷柱に貫かれ、この全身を凍て付かせた巨大な空中母艦達。
　それらが乱立する海と空の船の墓場を彩る無数の氷の結晶はさながら献花の如く。その巨大な氷の墓地より港へと伸びる氷の道を靴で踏み締める音と共に、人影が一つ港へと降り立った。
　数キロ先の海域から漂う冷気が港へと吹き込み、熱と冷たさの狭間で吹き荒ぶ蒸気にその白銀の髪を躍らせながら、一人で海を冷たき死の支配する領域へと変貌させた少女は息も絶え絶えに焔へと敬礼を向ける。
「ハァ……ッ……！ハーッ、ハーッ……！ひ、氷峰裁歌……合流します……！」
「……ねぇ、まさか走って来たの？あの海域から？此処まで？」
「い、移動用のドローンが壊れてしまって……！あ、焔さん、お召し物が……私ので良ければ此方をどうぞ！」
　雪の妖精を思わせる銀髪を上気した頬に貼り付けたその端正な顔の眼下に隈を浮かばせ、疲労の余りに産まれたての子鹿のように脚を震わせる氷峰から上着を受け取りながら、微かに引き攣った笑みを浮かべる焔。
「別に合流じゃなくて通信だけ送ってくれれば良かったのに……。サイバネティクスは仕込んで無いんでしょう？体力はなるべく温存しておきなさい。」
「も、申し訳ありません……考えつきませんでした……！」
「あんたね、そんなにペコペコしないのよ。あんたは今日から公務員なんだから。社会を管理する側としてしゃんとしなさい！」
　自身の身長を二回りほど上回る氷峰の上着の袖をダボつかせた腕

を組み呆れ顔を浮かべる焔は、自身へとペコペコと頭を下げる少女の頭をぺしりと余った袖で叩く。
「わ、分かりました。精一杯国家に尽くします！」
「力は適度に……いやまぁ、それでも良いか。ちょっとデバイス借りるけどアンタはそこで休んでなさい。私は局長と通信してるから。」
「はい！休みます！」
びしり、と肩肘張った敬礼をしながら波止場に腰を下ろし、体操座りを始めた新人を生温かい目で見やりながら氷峰の上着のポケットに入れられていた腕時計型デバイスに指を走らせ、目的の人物へとコールする。
数回鳴り響く呼び出し音の後に、通話開始を示すアイコンが緑色へと変化し、あどけない少女の声がデバイスより響く。
「やぁやぁ。進捗はどうかな？」
「はい、天威理事。私が沿岸部の陸上戦力の殲滅、氷峰調整官が海兵力及び航空戦力の殲滅を終了させました。首都からの陸路以外での離脱は困難でしょう。空間のジャミングも正常に作動しています。空間跳躍も不可能かと。」
「やだねぇ、親娘だろう？もっとフランクに行こうじゃないか、愛しの我が娘よ！ママとは呼んでくれないのかね？」
あどけない幼子の声ながら嗜虐心の滲む、恐らくは画面の先でニヤニヤといつもの様な邪悪な笑みを浮かべている己の母親――天威喪音の声に微かに溜息を吐きながら焔は言葉を続ける。
「首都内部の制圧は順調かしら……ママ。」
「よくぞ聞いてくれた、我が愛娘！まぁ期待はしていなかったがつまらんつまらん。中立国の立場に胡座をかいていた軍は脆弱に過ぎる。まぁ何はともあれ、〝彼〟が紳士的に私をエスコートしてくれたおかげで首相官邸の制圧は完了した。そちらの新人の調子はどうかな？使えるかね？」
〝彼〟。すなわち、先日のレジスタンス強襲事件において唯一生存した特異個体たるクローンの無表情の顔を思い浮かべながら、自身の背後にて体操座りで海に聳える無数の氷の墓標を眺める氷峰を目の

端で見やる。
「戦略級の異能なのは間違い無いんだけれど、どうにも緊張が抜けて無いみたいよ。私に必要以上に怯えてるせいで柔軟さに欠けるわね。」
「ハハハハ！その異能の強さだけが彼女の心の支えだったのを君が蹂躙し尽くしたからだろう。家も、財も、地位も奪われた彼女だが、次は強さへの自信まで奪われた訳だからねぇ。」
「必要な事だったと思ってるわ。張り詰めた糸は一度切ってあげるのも一つの解決策だもの。」
　自身の事が話題にされていると雰囲気から悟ったのか、びくりと肩を震わせながら怯えた表情を向ける彼女へと自身の腕には長過ぎる袖をシッシッ！と犬猫でも追い払う様な素振りで振りながら毅然とした態度で焔は答える。
「おやおや、まだ設立が決まった訳では無いのにもう上司気分かな？」
「設立しない、なんて選択肢は無いんじゃ無かったの？法務省異能関連犯罪対策委員会第一理事様？」
「そうだとも。これから先もこの長過ぎる肩書きを一々名乗らねばならないなんて耐え難いからねぇ。……！おや。なんと！ハハハ！小さな鍵（レメゲトン）を使ったのか!?切るぞ、我が愛娘。やはり〝彼〟は――！」
　デバイスの奥で響いた爆音音と共に、明確な喜色を滲ませた天威の声を最後に打ち切られた通信画面を見ながら、何度目かの大きな溜息を吐く焔。
「……ま、頑張りなさいよ、魔人候補さん。」
　法務省異能調整局。その創設前夜の一時は数多の死と共に過ぎていく。

◆

　時はわずかに遡る。
「素晴らしいな、う―２６８５号！その義肢は今回が初仕様だろう？まるで生来の部位のように動かすじゃないか！」
「……いえ。」

唐突な話なのだが、銃と刀剣はどちらが強いと思うだろうか。
これが至近距離での話ならばこの問いは多くの議論を呼ぶだろう。銃弾を銃口の向きから軌道を予測し、至近距離からの刀剣の一振りで決着だ。いやいや、連射の効く銃ならばやはり弾丸を避けるのは至難の業。近接武器使いなぞ蜂の巣、遠距離こそ文明の証なのだ、と。
だが俺のこの状況を議題にするならば、世の人々は満場一致で刀剣側の敗北を予測すると俺は確信している。
【問い】
２０ｍ程の部屋に強化外骨格フル装備の男達２５名と閉じ込められました。遮蔽物はなく、相手は連射可能で一撃でも貰えば死が不可避の銃を保持しており、俺はナイフ一本が与えられているものとします。俺は生き残り、尚且つこの全員を撃破できるでしょうか？
無理です。満場一致。論争を交わしていた者達は手と手を取り合い、自分達の意見が一致した事に涙を流し、人類とは分かり合えるのだと実感する事間違いなしであろうこの問いだが、残念ながら不正解と俺は声を大にして言わせてもらおう。
『バ、ケモノめ……！』
数多の銃弾を受け止め、逸らした事でグニャグニャに曲がったナイフが虚空へと投擲され、何もない空間から鮮血が迸る。蜃気楼のようにその空間から滲み出すように現れた髭面の男は恨み言をこぼしながら、喉元へと鋭利な金属を捩じ込まれた喉を押さえながら地面へと崩れ落ちる。
彼の名前は……あー、髭男爵だ。勝手に俺が命名したわけだが、そのフランクな渾名に似合わぬ強さだったよマジで。光を曲げる異能で自身と部下の数を、場所を撹乱させ、俺を何度もひき肉にしたこいつだったが、ようやく２３１度目のループで全員の位置とフォーメーションの組み合わせを覚えることに成功した俺の前では無力だったようだ。
髭男爵……いや、公爵と呼ぶことにしよう。強かったし。髭男爵改め髭公爵が守っていたのはこの国の中枢たる施設、即ち大統領官邸だ。

俺達の任務はこの国の首都機能を麻痺させること！責任重大だぁ……さぞかし大部隊が派遣されとるんやろなぁ……（現実逃避）

「いやぁ、お見事お見事。今後もその調子で頼むよ。」

後ろにはニコニコと笑いながらコチラをワインレッドの目で見つめてくる幼女が一人。右には敵の死体。左にも敵の死体。前には髭公爵。あれ、おかしいな。友軍は？

……派遣兵力は二人です。はい。原作ラスボスと二人っきり！敵陣中枢ツアー！ポロリ（俺の首）もあるよ！舐めとんのか。しかも俺の使用が許可されたのナイフだけ。

縛りゲーは他所でやってくれないか！マジで！でももうナイフ壊れちゃったし、いいよな!?他の武器使ってさ！ね!?

「申し訳ありません、理事官殿。支給されたナイフが破損してしまいました……以後は支給されたこの銃を使用してもよろしいですか？」

「ダメだが。ほら、ナイフならこんなにあるぞ！好きなのを持って逝きたまえ。」

「……了解しました。」

満面の笑みで懐から数本のナイフを取り出す幼女。それどこにしまってたんだ？胸ポケット？足引っ掛けたら転んで刺さって死なねぇかなマジで……。

ラスボス討伐クエストを受注できる場所ないの？ない？原作開始まで待て？そっかぁ……。

じゃあなんで俺にこの銃を持たせたんだ？目線を腰に向ければ、黒光するホルスターに収められた大型の銃。赤黒い光のラインが所々に刻まれたこの禍々しい銃なのだが、すごく邪魔だし重い。お前原作では自分と取り巻きにバフかけて殴ってくる脳筋バッファーだっただろ。デバフだけ俺にかけてくんのやめてくんねぇかな。

「そんなに〝ソレ〟が使いたいのかい？止めはしないけどすっごく苦しんだ後に死ぬと思うね。」

……転職してぇ～！